79-264

第一高等學校教授 箕作元八
ドクトル、理學士 合著
高等師範學校教諭 峰岸米造

西洋史綱

東京 六盟館發兌

歴史家之泰斗
ランケ先生之肖像

辨言

一本書は中等教育を施すべき諸學校の教科書に充てむことを目的とす。故に其編述の體裁・事實の聯絡精粗等は、著者の最も意を用ゐたる所なり。

一西洋史は、東洋史と相俟ちて、始めて完全なる世界史をなすものなれは、彼此相關聯せる事蹟は、勉めて其要領を擧げ、以て東西相關の形勢を示したり。

一西方の東漸を明示せむがため、特に各國の殖民政策を詳述したり。

一古を略し、今を詳にするは、歴史教授上當に然るべき所とす、上古を簡にし、中古・近古・最近世に至るに從ひ、漸く之を詳述したり。

一地名・人名及び其他各種の固有名詞は、上古及び中古の初めにありては、主としてラテンの發音に據り、其後にありては、悉く原音に從はむ

ことを期したれども、既に邦人の慣用せるものは、必しもテラン音或は原音に拘泥せず。別に鼇頭に、原語音其他の原字を記して、讀者の便を圖れり。

一歐(エウロッパ)米(アメリカ)英(エギリス)佛(フランス)獨(ドイツ)普(プロイセン)墺(エステルライヒ)露(ロシア)蘭(オランダ)伊(イタリア)西(エスパニア)葡(ポルトガル)土(トルコ)嗹(デンマルク)の略字は、從來の用例に從ひ、鼇頭には、尙ラ(ラテン)ギ(ギリシア)原(原音)の三略字を用ゐたり。

一圖畫・沿革地圖・系圖・年表の類は、敎授上の便を圖り、之を別冊とせり。

明治三十一年十二月

著者識

目次

第一部　上古史

第一篇　太古西洋諸國興亡時代

第一章　エジプト及び西南アジア諸國……一

第二章　アッシリアの强大　四國對立……六

第三章　ギリシア勃興……一〇

第四章　ペルシアの統一……一六

第二篇　ペルシア・ギリシア衝突時代

第一章　ペルシアのギリシア侵寇……二〇

第二章　ギリシア文物……二三

第三章　ペロポンチスス戰役……二七

第四章　スパルタ・テーベ・マケドニアの覇業……三一

第三篇　東西文化融合時代

第一章　アレクサンドル大王の業……三五
第二章　地中海沿岸諸人種の關係……三八
第三章　ローマのイタリア一統
　エピルスの寇……四二
第四章　ポエニ戰役……四四
第五章　ローマの地中海沿岸地征服……四九

第四篇　ローマの大統一時代

第一章　ローマ共和政治の腐敗……五二
第二章　東方諸國及びローマの内亂……五六
第三章　ケーザルの業……六一
第四章　ローマ帝政の前期……六四
第五章　ローマと其東隣。基督教の弘通……六九
第六章　ローマ帝政の末期。ローマの國情……七三

第二部　中古史

第一篇　中古初期

第一章　種族の遷移……七八
第二章　東ローマとペルシア……八二
第三章　サラセン國の勃興……八六
第四章　ギリシア皇帝とローマ法王……九〇

第二篇　中古本期

第一章　カール大帝の業……九三

第二章　ノルマンの跋扈……九七
第三章　神聖ローマ皇帝と法王との交渉……一〇〇
第四章　英國憲法の制定、佛國王權の伸暢。英佛二國の交渉……一〇七
第五章　十字軍。東方諸國の盛衰……一一五
第六章　中古西歐の情形……一一九
第七章　ギリシア帝國と近隣諸邦……一二四
第八章　蒙古の侵寇……一三〇

第三篇　中古末期

第一章　文運の復活……一三六
第二章　地理及び天文上の發見……一三九
第三章　西歐諸國の中央集權。
第四章　政略兵制の一變……一四二
　オットマン・トルコの跋扈。
　モスクヴァー勃興……一五〇
第五章　イタリア戰爭。宗教改革の企圖……一五六

第三部　近古史

第一篇　エスパニア・フランス對抗時代

第一章　宗教改革　西佛二國の確執……一六二
第二章　宗教改革の進行。トルコの西侵……一六五
第三章　シュマルカルデン戰役……一七一
第四章　葡西の殖民政策……一七四

第二篇　エスパニア強大時代……一七四
第一章　宗教改革の反動……一七九
第二章　オランダの獨立……一八二
第三章　英國の宗教改革……一八五
第四章　佛國に於ける宗派の爭……一八九
第五章　三十年戰役……一九二
第三篇　フランス強大時代
第一章　オランダの隆盛及び其殖民策……一九七
第二章　佛國國家主義の確立及び外國侵略……二〇二
第三章　英國兩度の革命……二〇六
第四章　土・墺の關係。エスパニア繼承戰役……二一二
第五章　北歐及び東歐諸國の盛衰……二一八
第四篇　ロシア・プロイセン勃興時代
第一章　北歐大戰役　ポーランド繼承戰役……二二二
第二章　プロイセン勃興。墺國繼承戰役……二二六
第三章　七年戰役……二三〇
第四章　英・佛の殖民策。其衝突……二三四
第五章　ポーランド第一分割……二三八
第六章　王公同盟……二四一
第七章　露國のシベリア拓殖……二四四
第十八世紀に於ける歐洲の風潮……二四四

第五篇　革命時代

第一章　北米合衆國の獨立……一五〇
第二章　佛國大革命の初期……一五四
第三章　佛國大革命の進行。ポーランドの滅亡……一五九
第四章　佛國恐嚇政治時期……一六二
第五章　佛國大革命末期……一六八
第六章　ナポレオンの覇業。歐洲局面の一變……一七〇
第七章　歐洲獨立戰役。ヴィーン列國會議……一七五
第八章　佛國大革命時代に於ける各國殖民地。大平洋探檢……一八〇

第四部　最近世史

第一章　神聖同盟……一八四
第二章　アメリカ諸國及びギリシアの獨立……一八七
第三章　七月革命及び其影響……一九一
第四章　獨の關稅同盟。英の改革。葡西の內亂……一九五
第五章　東方問題……一九九
第六章　二月革命及び其影響……二〇四
第七章　英佛の同盟。東亞の情勢……二一〇
第八章　イタリア統一……二一四
第九章　北米合衆國南北の爭。

メキシコの亂……三一七
第十章　墺・普の爭覇……三二四
第十一章　獨・佛衝突。獨・以統一完成……三二五
第十二章　露・土戰役……三三〇
第十三章　最近事件……三三三
第十四章　最近の進歩……三三九

目次終

1. Egypt＝Aigyptos(ギ)
2. Pyramid
3. Hieroglyphik
4. Hyksos(ギ)＝Hakushasu(原)
5. Aahmes(原)＝Amasis(ギ)

西洋史綱

箕作元八
峰岸米造　合著

第一部　上古史

第一篇　太古西洋諸國興亡時代

第一章　エジプト及び西南アジア諸國

傳へいふ、エジプトは、紀元前約四〇〇〇年の頃、建國したりと。然れども其歷史の確信すべきは、第四王朝（凡紀元前二五〇〇、同二四〇〇）に始まる。當時エジプトは、既に大に開明に赴き、金字塔[2]を建て、象形文字[3]を以て、王者偉人の事蹟を錄しき。

其後、紀元前二一〇〇年の頃、ヒクソス[4]と稱する遊牧の蠻

民、アジアより侵來し、全國を統治すること、凡五〇〇年。エジプトの文化、ために大に衰へしが、國人アーメス[5]義旗を擧げ、ヒクソスを國外に驅逐して、王位に登り、文化漸く舊觀に復しぬ。爾後三百餘年間は、エジプトの全盛時代にして、ラメス[6]二世（紀元前一三二二に死す）の如き英主出で、外は屢遠征を爲して、版圖を擴め、內は工藝美術を奬勵して、宮殿堂祠を建て、以てエジプト史に光彩を添へぬ。

エジプトは、氣候炎熱なるに、毎歲ニル[7]河氾濫して、膏土を遺し、人民も亦能く水利を應用せしを以て、農耕の業、夙に發達せり。これエジプトが、早く文明の曙光を放ちたる一因なり。エジプト人は、又牧畜の業を營み、諸種の工藝に長じ、染織及び硝子製造等に巧なりき。建築は、宏大壯嚴を以て、其特色とし、金字塔、方尖碑[8]、獅身女面像[9]等は、實に千古の偉觀たり。文字は、象形文字の外、別に其草體ありて、之を一種の紙[10]に書し、卷軸として保存せり。繪畫と彫刻とは、共に變化に乏しく、且同形の重複多くして、意匠風致殆ど一律なるもの多し。

6. Ramessu(原)＝Ramesses(ギ)
7. Nil＝Nilos(ギ)＝Nile(英)
8. Obelisk(ギ)
9. Sphinx
10. Papyrus

政治は、上に王[11]ありて、萬機を獨裁し、人民は、僧侶・武士・平民の三階級に分れ、僧侶最も權勢を占め、官吏・教師・判官等を兼ねて、武士と共に貴族たり。

宗教は、太陽をラー[12]と稱し、之を最上の神とせしが、其他の星辰及び動植物をも崇拜せり。又輪廻の說を信じ、藥術を施して、屍體の腐敗を止め、之を永遠に保存するの風ありき。

ラメス二世が、外征の師を出すや、其最も激戰せしは、キタ[13]なり。キタは、シリア[14]・パレスチナ[15]地方の遊牧民にして、ヒクソスも其一部落なるが如し。當時は、統一せる一大國をなし、文化大に進み、殆ど[16]エジプトと、對等の地位を保ちしが、此後國勢大に衰へぬ。

パピルス紙は、莎草の一種カミカヤツリ（Cyperus papyrus）の內皮にて製す。

11. Pharaoh
12. Ra
13. Khita＝Kheta＝Hittites(英)
14. Syria

或は五階級とし、或は七階級とする說あり。

民、アジアより侵來し、全國を統治すること、凡五〇〇年。エジプトの文化、ために大に衰へしが、國人アーメス[5]義旗を擧げ、ヒクソスを國外に驅逐して、王位に登り、文化漸く舊觀に復しぬ。爾後三百餘年間は、エジプトの全盛時代にして、ラメス[6]二世（紀元前一三二二に死す）の如き英主出で、外は屢遠征を爲して、版圖を擴め、內は工藝美術を奬勵して、宮殿堂祠を建て、以てエジプト史に光彩を添へぬ。

エジプトは、氣候炎熱なるに、毎歲ニル[7]河氾濫して、膏土を遺し、人民も亦能く水利を應用せしを以て、農耕の業、夙に發達せり。これエジプトが、早く文明の曙光を放ちたる一因なり。エジプト人は、又牧畜の業を營み、諸種の工藝に長じ、染織及び硝子製造等に巧なりき。建築は、宏大壯嚴を以て、其特色とし、金字塔[8]・方尖碑[9]・獅身女面像等は、實に千古の偉觀たり。文

6. Ramessu(原)＝Ramesses(ギ)
7. Nil＝Nilos(ギ)＝Nile(英)
8. Obelisk(ギ)
9. Sphinx
10. Papyrus

字は、象形文字の外、別に其草體ありて、之を一種の紙[10]に書し、巻軸として保存せり。繪畫と彫刻とは、共に變化に乏しく、且同形の重複多くして、意匠風致殆ど一律なるもの多し。

政治は、上に王[11]ありて、萬機を獨裁し、人民は、僧侶・武士・平民の三階級に分れ、僧侶最も權勢を占め、官吏・教師・判官等を兼ねて、武士と共に貴族たり。

宗教は、太陽をラー[12]と稱し、之を最上の神とせしが、其他の星辰及び動植物をも崇拜せり。又輪廻の說を信じ、藥術を施して、屍體の腐敗を止め、之を永遠に保存するの風ありき。

ラメス二世が、外征の師を出すや、其最も激戰せしは、キタ[13]なり。キタは、シリア[14]・パレスチナ[15]地方の遊牧民にして、ヒクソスも其一部落なるが如し。當時は、統一せる一大國をなし、文化大に進み、殆どエジプトと、對等の地位を保ちしが、此後國勢大に衰へぬ。

パピルス紙は、莎草の一種カミカヤツリ（Cyperus papyrus）の內皮にて製す。或は五階級とし、或は七階級とする說あり。

11. Pharaoh
12. Ra
13. Khita＝Kheta＝Hittites(英)
14. Syria

ラメス二世は、ニル河と紅海との間に、運河開鑿の大業を創め、ヘブライ人をして、其苦役に服せしめき。ヘブライ人は、初めパレスチナ地方に住し、嘗て飢饉に際し、エジプトに移り、子孫大に繁殖せしが、エジプト王の虐遇に堪へず、紀元前一三二〇年、モーゼス、其族民を率ゐて、エジプトを去り、終にパレスチナに達し、キタの諸國と戰ひて、其大部を略し、之を十二族に分つ。ヘブライ人は、熱心なる一神教信者なれば、祭政一致の政府を立てゝ、高僧の統治に服せしが、各族の結合鞏固ならず、外患亦頻りに至りしかば、紀元前一〇五五年、サウルを立てゝ王となしき。是より國内の統一漸く固く、第二代の王ダヴィドは、内は都をエルサレムに定めて、文武の政を整頓し、外はフィリスチア人に勝ち、又シリア王國を滅し、其國境エウフラテス河に達せり。シリアは、初めキタの一部なりき。後分れて獨立し、ダマスクスを都とせしが、是に至りて、ヘブライに滅さる。此後キタの殘部は、更に南北に分れ、國勢益衰へぬ。

ダヴィドの子ソロモンは、盛に商業を奬勵し、大に國を富ましゝが、シリアは、遂に王の時に獨立せり。王の死後、ヘブライ大に亂れ、イスラエル・ユダヤの二王國に分裂せり。

當時ヘブライの西北に、フェニキアあり。其國市府の聯合より成り、各世襲の王を戴き、僧侶・富豪の會議ありて、其政に參す。紀元前一一〇〇年頃より、同八〇〇年頃までは、此國極盛の時にして、チルス市、諸市の牛耳を執り、繁榮多く其比を見ず。フェニキア人は、怜悧活潑にして、盛に硝子・染料等を製造し、又廣く通商航海を營み、地中海沿岸各地に殖民し、更に進みて、ジブロルタルを過ぎ、マデイラ・カナリア諸島より、遠

15. Palæstina＝Palestine(英)＝Canaan.
16. Hebrai(ギ)＝Ibrim(原)
17. Moses
18. Shofetim(原)＝Judge(英)
19. Saul
20. David
21. Jerusalem
22. Philistia
23. Euphrates
24. Damascus
25. Solomon(ギ)＝Salomo(原)
26. Israel
27. Judaia(ギ)＝Judæa(ラ)
28. Phoenicia
29. Tyrus
30. Gibraltar
31. Madeira
32. Canaria(西)＝Canary Ilds(英)

先輩　スエス運河の

チルス市の前に、シドン市覇權を握れり。

く今の英・蘭・獨の海岸地方に往來し、又隊を組みて、陸路東方諸國と交通し、智識の傳播と、經濟の發達とに大功ありしが、殊に其發明せる文字は、歐洲諸國の文字の源をなしぬ。

以上の數國は、孰れも皆强大となるに至らず。アッシリアの勃興するに及びて、悉く其併呑する所となれり。

第二章　アッシリアの强大　四國對立

エウフラテス・チグリス兩河地方には、エラム[2]・バビロニア[3]・アッシリア[4]の三國、交興起したり。エラムは、紀元前二二八〇年頃、既にスーサ[5]に都せる一强國なりしが、バビロニアは、數個の王國に分れ、屢エラムの侵略を被り、遂に其屬國となりぬ。後紀元前一九〇〇年頃、バビロニア、全く獨立して、一大王國となり、バビロン[6]に都せり。アッシリアは、もとバビロニアの一

1. Euphrates
2. Elam
3. Babylonia
4. Assyria
5. Susa

殖民地なりしが、後叛きて獨立し、ニヌア[7]に都し、屢バビロニアと干戈を交へ、紀元前一二五〇年、遂に之を滅せり。是より、アッシリアの國勢、日に强く、紀元前第七世紀には、國運隆昌の極に達し、キタ・シリア・フェニキア・イスラエル・ユダヤ・エジプト等、悉く其版圖に歸しぬ。

エラム・バビロニア・アッシリアは、人種・政體・宗教・言語・文字・習慣、ともに大同小異にして、其民皆殘忍殺伐、戰術に長じ、戰終れば、獲る所の首級を、將校の點檢に供し、捕虜は、之を殘殺するを常とせり。

兩大河と、無數の運河とは、大に水利灌漑の便を與へしを以て、農耕の業、夙に發達し、工業亦頗る盛にして、バビロンの毛氈刺繡は、其名殊に高し。建築は、規模宏大にして、柱壁一面に、彫刻を施せり。彫刻は、專ら寫實を勉め、其同形重複と、變化

6. Babylon
7. Ninua＝Nineveh
8. Cuneiform Letters(英)＝Keilschrift(獨)

に乏しきことは、恰もエジプトに於けるが如し。文字は、所謂楔[8]形文字にして、之を泥製の圓柱若くは多角筒に彫り、燒きて以て保存せり。

政治は、君主獨裁にして、多く宦官を用ゐ、壓制を極む。法律も、亦頗る嚴峻なりしが、人民は、王に直訴する事を許さる。社會には、僧侶の外、エジプトの如き階級の別なし。

宗教は、多神教にして、ヘブライの外、セム派民族一般に歸依せし者なり。其最上の神は、ベル又はバール[9]と稱し、殘忍卑陋の祭式あり。而して其天體崇拜の風より、天文臺の如き高塔を建てゝ、神殿となし、僧侶は、斷えず日月星辰の運行を考ふ。其觀測の精確なる、實に驚くに堪へたるものあり。

アッシリアの東に、メヂアあり。初めアッシリアに服屬せしが、

9. Bel
10. Baal
11. Media
12. Cyaxares(ラ)=Kyaxares(ギ)

後獨立してペルシアを併呑し、キアクサレス王[紀元前六三三、同五九三]に至り、國勢大に振ひぬ。又アッシリアの東北、小アジアにリヂア[12]あり。其王ギゲス[紀元前六八九、同六五四][13]大志を懷き、海岸のギリシア殖民諸市と戰ひ、又エジプト人プサムマチック[14]を援けて、先に同地を占領せるエチオピア人を驅逐し、其獨立を全くせしむ。プサムマチック、大に商業を奬勵し、リヂア人・ギリシア人を聘用し、エジプトをして、復盛運に向はしめたり。

此時に當りて、アッシリアの國勢稍衰へ、新興の三國、皆其勢を窺ふ。會、遊牧の蕃族スキテー[15]、カウカス地方より潮の如く侵來し、到る處焚掠を逞しくす。バビロンの鎭將ナボポラッサル[16]、擊ちて之を退けしが、メヂア王キアクサレスも、亦大にスキテーを破り、遂にナボポラッサルと結びて、アッシリアを攻め、紀元前六二五年、其國都ニヌアを陷る。是に於てアッシリア國

12. Lydia
13. Gyges
14. Psammatik(原)=Psammetichus(ラ)
15. Scythæ(ラ)=Skythai(ギ)=Scythians(英)
16. Nabopolassar(ギ)=Nabupaluzur(原)

亡び、北部は、メジアに歸し、南部は、ナボポラ、サル之を併せて、新バビロニア王國を建てたり。

今や、強大なるアッシリア國瓦解して、バビロニア・メヂア・リヂア・エジプトの四國相對立し、皆中原の鹿を逐ひて、覇業をなさんと欲せしが、會ペルシア國、東方に崛起し、悉く之を併呑せり。

第三章　ギリシア勃興[1]

東方に於て、四國對立の形勢を呈せる時に當り、歐洲の東南に位せる一半島に、一種優等なる國民勃興せり。これ即ち[2]ギリシア人なり。

ギリシア人は、北方より移り來れる民なり。其先んじて來れるを、[3]ペラスギ又[4]エオリア人とし、其後れて來れるを、[5]ドリア人及び[6]イオニア人とす。是等の民族は、其性質、優美活潑にして、地勢風土の秀美なるギリシアに土着せるが故に、夙にフェニキア・エジプト等の感化を受け、更に特殊の發達をなして、歐洲文明の先導者となるに至りぬ。

ギリシアは、早くより許多の小王國に分れ、各政兵の權を併有せる世襲の王を戴けり。後ドリア人、北方より南侵して、[7]ペロポンネスス半島に入り、其東部及び南部を占めしかば、エオリア人の一部は、逃れて半島北岸のイオニア人を驅逐し、イオニア人は、中部ギリシア及び東方の群島に移住せり。此運動の息みし後、列國概ね貴族政治となり、イオニア族なる[8]アテン、ドリア族なる[9]スパルタ、最も強盛を極めき。

スパルタは、[10]ラコニカの首府なり。初めドリア人の、ペロポンネススに入るや、被征者たるエオリア人との間に、儼然た

1. Græcia(ラ)=Hellas(ギ)=Greece(英)
2. Græci(ラ)=Hellenes(ギ)=Greeks(英)
3. Pelasgi
4. Aeolia
5. Doria
6. Ionia
7. Peloponnesus(ラ)=Peloponnesos
8. Athen=Athenai(ギ)=Athenæ(ラ)
9. Sparta

る懸隔を設けしが、殊にラコニカにては、ドリア人、悉くスパルタに住し、獨り政治の全權を握り、多數の被征者を壓せり。此の如く少數の市民を以て、多數の人民を威服するは、頗る難事なるが故に、早くよりリクルグス[11]が創定せりと稱する憲法により、政府は、市民の教育・結婚等に干渉し、男兒の羸弱なる者は、之を下して平民とし、强健なる者は、七歳に至れば、父母の膝下より離して、政府之が教育の任に當り、公育所に入れて、嚴格なる規律に服せしめ、主として武技を教へ、素朴・剛毅・沈着・献身・廉潔の風を養ふ事を務め、女子の教育も、亦專ら身體の鍛錬と、婦德の涵養とに力を用ゐ、以て良妻賢母たるに耻ぢさらしむ。又市民をして、悉く共同の食卓に就きて、同一の粗食をなさしめ、濫りに市外に出づるを禁じて、他國の風に化せらるゝことを防げり。

普通に、羸弱なる男兒を山間に棄つるといふは、山間の平民に與ふるの義なり。

10. Laconica(ラ)=Lakedaimon(ギ)
11. Lycurgus(ラ)=Lykourgos(ギ)

政體は、上に二人の王あれども、權力弱く、元老院[12]ありて、國事を議し、大事は、可否を全市民より成れる民會[13]に諮る。民會は、年々五人の監察官[14]を選擧して、之に彈劾權を與へ、又外交事務に當り、國有財産を管理せしめぬ。是に於て、スパルタは、權力僭奪の患を絶ち、黨派の爭鬪を防遏する事を得、其勢日に强大に赴き、紀元前六三〇年頃、メッセニア[15]を併呑し、遂にペロポンネスの覇權を握り、進みて、中部ギリシアに其威權を張らんとせしが、此時既にアテンは、これと頡頏すべき實力を有せり。

アテンは、アッチカ[16]國の首府なり。初め王政なりしが、後之を廢し、執政官[17]九人を置き、在職一年とす。然れども貴族の會議全權を握り、平民を抑壓せしかば、貴族と平民との軋轢久しく止まず。紀元前五九四年に至り、執政官ソロン[18]、憲法を制定

16. Attica
17. Archon
18. Solon
19. Timocratia=Timocracy(英)
20. Boule 又 Proboule

12. Gerusia
13. Ekklesia
14. Ephoros
15. Messenia

し、金力政治[19]を立て、平民に權利を分てり。即ち其財産に從ひて、人民を四級に分ち、國家に對する各級の權利義務を異にし、民會[20]には、各級の人民出席して、政府の報告を聽き、役員を選擧し、政府提出の議案を可否し、豫審會は、會員四百人、毎歳上三級より選び、民會を召集し、及び之に提出すべき議案を定め、兼ねて民會の決議執行を掌るの權ある事とせり。

ソロン、憲法制定の後も、貴族と平民との爭止まず。ピシストラッスといふ者、巧に民心を收攬して、僭主[22]となり、猶ソロンの憲法を襲用せしが、紀元前五一〇年、クリステチス[23]、政權を握るに及び、更に豫審會の制を改めて、國内を十區に分ち、抽籤法に依りて、各區より五十人の議員を出し、總數五百人を以て、豫審會を組織し、又オストラキズモス[24]と稱する秘密投票法を設け、裁判を用ゐずして、何人にても、之を國外に放

21. Pisistratus(ラ)=
Peisistratos(ギ)
22. Tyrannos=Tyrant(英)
23. Clisthenes(ラ)=
Kleisthenes(ギ)
24. Ostrakismos

逐するを得ることゝせり。

然るに貴族は、此改革を喜ばず。スパルタの兵を誘ひて、クリステチスを逐ひしが、市民忽ち起りて、貴族黨を逐ひ、クリステチスを招還せり。スパルタの二王、乃ち兵を率ゐて、將にアテンを侵さんとせしが、軍中に不和を生じて師を班し、アテンの民主政治、遂に全く確立し、中部ギリシアに雄視せり。

スパルタとアテンとは、大に立國の主義を異にす。スパルタは、貴族政治主義にして、國家を以て中心とし、貴族たる市民も、唯其用に供するの外、餘地を存せず、惟武これ尚び、質素を旨とし、廉潔を貴び、寡言を美德とし、貨殖を賤しみ、航海通商を排斥す。アテンは、之に反して、民主主義を取り、個人自由と、國家主義との併行を圖り、尚武の風あれども、また學問美術を崇拜し、華美を喜び、能辯を貴び、財産を國民權利の基本

とし、航海通商を盛にするを以て、其國是とす。要するにスパルタ人は、ギリシアの勇壯なる精神の粹を顯し、保守的傾向に富み、アテン人は、其優美なる精神を代表して、文化進歩の先導者たり。

ギリシア人は、鄉土を偏愛するの情深きを以て、小邦各、一方に割據し、政治上の統一を缺きしと雖も、皆其人種の同一なるを自覺し、國祭等を共にせるを以て、恐るべき外寇あるに及びては、能く合從同盟して、之に當る事を得たり。

第四章　ペルシアの統一

[1]ペルシアは、もとメヂアの屬地なりしが、紀元前第六世紀の頃、知事[2]キルス自立し、先エラムを併呑して、スーサを都とし、次ぎてメヂアを滅し、アルメニア及びカウカス山地方の

1. Persia
2. Cyrus(ラ)=Kyros(ギ)=Kurush(原)
3. Sardes

土民を征服せり。

リヂアは、ペルシアの勢、日に盛なるを忌み、バビロニア・エジプトと同盟し、更にギリシア諸邦に援兵を求めたりしが、キルスは、之に先んじて、リヂアを攻め、紀元前五四六年、其都[3]サルデスを陷れ、又將を遣りて、海岸のギリシア殖民諸市を征服し、紀元前五三八年、親らバビロニアを攻めて、之を滅し、久しくバビロン府に、拘留せられたるユダヤ人を放ちて、其國に歸らしめ、又[5]バルチア・[6]バクトリヤ地方を平定し、其國境遠く[7]印度河に及べり。

從來勃興せる諸强國は、一たび他國を征服するや、其王を殺し、其民を虐げ、暴政を逞しくしき。故に土民之に悅服せず、動もすれば離畔せんとす。これアシリア各王の紀念碑に、叛民征討の事を錄せざること稀なる所以なり。然るにペルシ

5. Parthia
6. Bactria
7. Indus

アは之と異なり、諸降王を厚遇し、征服したる民を撫安し、舊慣を壞らず、法律を新にせず、宗教の信仰を抑制せず、之をして亡國民の怨を忘れて、反りてペルシアの臣民たるを悅ばしむる事を務めき。此の如くペルシア人の寛仁おりしは、其宗教の感化與りて力あり。蓋し其國教ゾロアストル教[8]は、人間の善惡禍福を以て、總べて善惡兩種の神が相爭ふの結果なりとせるが故に、ペルシア人は、罪を惡みて、人を惡まず、責罰するよりは、寧ろ救濟するの精神を有せり。

キルスは、紀元前五二九年、當時開化せる諸國の公敵たる北方のスキテーを討ちて、其陣に沒し、其子カムビセス[9]、繼ぎてエジプトを征服し、歸路シリアに死せり。時に奸僧ガウマ[10]タ、位を僭し、縣知事等、各地に割據し、國內大に亂れしが、王族ダリウス、ガウマタを斬りて、反徒を討ち、終に國亂を戡定し、更に歐洲に渡りて、トラキア[12]の土民を服しぬ。ペルシアの强大此時を極とす。

ダリウスは、撥亂の業をなせるのみならず、王國統一の基礎を確立せり。即ち王權を以て無限となし、貴族の子弟を宮中に教育し、國內を二十縣に分ち、各縣にペルシア貴族の知事[13]を置き、行政・司法及び收稅を總理せしめ、屬僚以下、專ら地方人士を登庸し、將軍ありて、兵事を管し、監察使ありて、官吏の行爲を監督せり。其他王は常備軍を置き、軍路を開き、驛傳を設け、運河を通じ、貨幣の制を定め、農商の業を奬勵せり。

紀元前五〇〇年、小アジアなるギリシア殖民諸市の叛くや、アテン等、軍艦を送りて之を援け、其勢猖獗を極めき。ダリウスは、大兵を發して、之を鎭定し、更にギリシア本國を膺懲せんとする心を生じぬ。

11. Darius(ラ)=Dareios(ギ)=Daryavush(原)
12. Thracia(ラ)=Thrake(ギ)
13. Shoitrapaiti(原)=Satraipatas(ギ)

8. Zoloastrism=Persism=Magism= 祆教=火教
9. Cambyses(ラ)=Kambyses(ギ)=Kambujiya(原)
10. Gaumata

第二篇　ペルシア・ギリシア衝突時代

第一章　ペルシアのギリシア侵寇

ペルシア人は、忠君を以て立國の基礎とし、常に大統一の理想を懷き、ギリシア人は、自由を愛し、人に膝を屈するを屑しとせず、割據の精神頗る盛なり。兩國の性質主義、相容れざること此の如くなるが故に、其衝突は早晩免れ難き勢なり。

ダリウスは、紀元前四九二年、第一回の遠征軍を出しゝが、陸軍は途に破れ、海軍は颶風に遇ひて、空しく歸國せしかば、紀元前四九〇年、更に復大軍を遣し、アッチカを攻擊せしむ。アテンの勇將ミルチアデス[1]、之をマラトン[2]の野に迎へ擊ちて、大勝を得たり。

此戰爭後、アテンに於ては、テミストクレス[3]、大に海軍を擴張して、敵の再擧に備へんことを主張せしが、アリスチデス[4]は、重きを陸軍に置き、テミストクレスの政策に反對せしかば、テミストクレスは、オストラキズモスに依り、アリスチデスを逐ひて、己の計劃を實行せり。

紀元前四八五年、ダリウス死し、其子クセルクセス[5]、父の遺志を繼ぎ、紀元前四八〇年、親ら大軍を率ゐ、水陸並び進みて、ギリシアに侵入せり。是より先、ギリシア列國の大使、コリンツ[6]に會し、スパルタを盟主として、防禦同盟を結びしが、是に至りて、スパルタ王レオニダス[7]、市民三百・同盟軍數千に將として、テルモピレー[8]の要路を扼し、能く大敵を防ぎしが、敵軍間道より大に至るに及び、スパルタの將士、勇戰奮鬪して、悉く死し、ペルシア軍、遂にアッチカに入り、アテンを燒けり。

是より先、テミストクレスは、アテン人に說き、市を棄てゝ

1. Miltiades
2. Marathon
3. Themistocles
4. Aristides(ラ)=Aristeides(ギ)
5. Xerxes(ギ)=Khshayarsha(原)
6. Corinthus(ラ)=Korinthos(ギ)
7. Leonidas
8. Thermopylae(ラ)=Thermopylai(ギ)

悉く船に上らしめ、又スパルタ以下同盟國將校が、退却を主張せるを排し、遂にペルシア海軍と、サラミス[9]灣頭に激戰し、大に之を破りぬ。是に於てクセルクセスは、歸路を斷たれんことを懼れ、陸兵若干を留めて、倉皇本國に逃れ歸りき。

其後、ペルシアは、新附のマケドニア[10]王を介し、甘言を以てアテンを誘ひ、列國同盟を脫せしめんとせしが、アテンは、斷然之を斥け、翌年列國の兵と共に、プラテーエー[11]に於て、ペルシアの殘兵を粉碎し、海軍は敵艦を追ひて、小アジアのミカレ[12]岬に至り、上陸せる敵軍を窮追して、之を鑒にせり。

其後、アテンは、スパルタの因循なるに乘じ、之に代りて、海上の覇權を握り、イオニア諸市を合從して、デルス[13]同盟を組織し、自ら其盟主となり、紀元前四六六年、其將キモン[14]、同盟艦隊を率ゐて、復大にペルシア海軍を破りしかば、アテンの武威内外に輝きぬ。

13. Delus(ラ)=Delos(ギ)
14. Cimon(ラ)=Kimon(ギ)
15. Artaxerxes(ギ)=Artakhsatra(原)

9. Salamis
10. Macedonia
11. Plataæ(ラ)=Plataiai(ギ)
12. Mycale(ラ)=Mykale(ギ)

是より先、クセルクセスの子、アルタクセルクセス[15]、父に嗣ぎて位に登りしが、國財欠乏し、叛亂連りに起り、エジプト人、亦アテンの助を借りて、兵を擧げしかば、王は永くアテンと兵を交ふるの不利なるを悟り、紀元前四四九年、小アジアなるギリシア諸市の獨立を確認して、和を結びぬ。

此間デロス同盟諸市中、アテンに抵抗する者、漸く生じ、スパルタ亦之を助けて、アテンと戰ひしが、紀元前四四五年、各邦間に三十年の休戰を約しぬ。

ホメロスの詩「イリアド」は、ギリシア列國同盟して、小アジアなるトロヤ

第二章　ギリシア文物

ギリシア語は、他に超越せる優美なる言語にして、これが粹を顯せるは、ホメロス[1]の詩なり。故にギリシア人は、一般に

市を攻むることを叙す。同「オデッセウス」は、トロヤ攻撃の一將オデッセウス王、歸途のことを叙す。

1. Homeros＝Homer(英)
2. Hesiodos＝Hesiod(英)
3. Anakreon
4. Pindaros＝Pinder(英)
5. Aeschylos(ラ)＝Aischylus(ギ)
6. Sophokles
7. Eurypides
8. Aristophanes

てれを聖經視し、其詩中の人物の行爲は、早く少年の理想に入り、其德義の基礎となりぬ。

ホメロスの後、ヘシオドス[2]・ソロン・アナクレオン[3]・ピンダル[4]の如き詩人輩出し、或は教訓の意を寓し、或は愛國の精神を皷舞し、或は種々の情緒を詠出しぬ。既にして、詩體一轉して悲哀戲曲の詩文、新に起り、之に伴ひて演劇亦起りぬ。殊にアテンに於ては、賞を懸けて佳什傑作を奬勵しければ、エースキルス[5]・ソフォクレス[6]・エウリピデスの[7]如き、古今に卓絶せる詩人を出せり。悲劇に次ぎて起りしものを、喜劇戲曲とす。アリストファネス[8]は、此流の詩宗にして、其諷刺滑稽は、一世の喝采を博せしが、てれ既にギリシアの人心輕浮に赴き、高尚眞摯の精神衰へて、其國運の漸く衰頽に傾くの兆なりき。

美術は、其初めエジプトの感化を受けしが、ギリシア人は、

9. Phidias(ラ)＝Pheidias(ギ)
10. Iktinos
11. Parthenon

之に特種の發達を與へ、古今獨歩の名を得るに至れり。彫刻に於ては、早く活動の妙趣を悟りきと雖、尚未だ寫實に偏し、美に於て欠くる所ありしが、技術益進みて、終にフィディアス[9]の如き名手を出し、美實兼備、雄偉凛々たる大作を出すに至りぬ。其後漸く艶麗精緻の風行はれ、美神の嬋妍・痛苦・悲哀の容姿等、寫し得て妙を極めきと雖、高尚雄偉の風は、全く消失したり。是蓋し人心の柔弱に陷りし氣運を表出せしものなり。

建築も大に發達せり。其最も簡單にして嚴正なるを、ドリア式とす。イクチノス[10]が設計せるアテンのパルテノン[11]神殿の如き、此式の最も壯嚴なるものにして、今尚建築家の模範とする所なり。ドリア式より少し後れて起り、之と並び行はれたるを、イオニア式とす。壯麗にして稍複雜なり。又別にコリンツス式と稱するは、裝飾極めて多く、巧緻纖細にして、光

彩陸離たれども、前二者の品格高きに及ばず。これギリシア國が衰亡に傾ける頃、行はれたる式なり。

哲學者は、其數甚だ多し。今其最も有名なるものを擧ぐれば、ソクラテス[12]は、專ら形而上の事を究め、邪惡を無智とし、智識に因りて至善を得べしとす。其弟子プラトン[13]は、靈魂不滅を信じ、又一種の社會的國家を理想とせり。是等二人に反し、實驗と歸納法とを基礎として、形而下の事を研究せるは、アリストテレス[14]なり。故に氏は理學各科の父と稱せらる。

歴史家には、ヘロドツス[15]あり。始めて詩人の想像を脱して、實事を錄せんことを務め、歴史の父と稱せらる。然れども史眼炬の如く、能く事實の因果を究めしは、ツキヂデス[16]なり。

ギリシアの宗教は、元來自然崇拜の多神教なるが、人民は、神を以て人間に類したる感情あるものとし、最上の神ゼ[17]

15. Herodotos(ギ)=Herodotus(ラ)
16. Thukydides=Thucydides
12. Sokrates
13. Platon(ギ)=Plato(ラ)
14. Aristoteles

毎に其大祭ありて、種々の競技を行ひ、苟もギリシア民族なりと信ずる市は、皆之に[18]入を遣り、競技の勝敗に非常の重きを置けり。又何事にまれ、疑義ある時は、デルフィ[20]なるヘルメス神の神託を請ふを習とす。此ヘルメス[21]の神殿を保護する爲に、アムフィクチオン同盟[19]あり。オリムピア競技と共に、ギリシア人民[22]をして、協同一致の念を起さしむるに力ありき。

第三章　ペロポンネスス戰役

三十年休戰條約締結後十年間を、アテン極盛の時代とす。此間高潔明敏の大政治家ペリクレス[1]は、輿望を一身に負ひて、施政方針の指導者となり、アテンを中心として、ギリシアを統一し、高健優美の國風を完成せしめん事を期したり。當

1. Pericles
2. Anaxagoras
21. Hermes(ギ)=Apollo(ラ)
22. Amphiktyon
17. Zeus(ギ)=Zupitor(ラ)
18. Elis
19. Olympia
20. Delphi(ラ)=Delphoi

アナクサゴラスは、ソクラテスに先ちて、形而上の事を研究せし哲學者にしてペリクレスの師なり

時アテンには、アナクサゴラス・エースキルス・ソフクレス・エウリピデス・フヂアス・イクチノス・ヘロドツスの如き、識量技術、千古に超絶せる名士輩出し、皆一種凛然たる氣象を有し、ペリクレスと、ギリシア統一の理想を共にせり。

スパルタは、アテンの隆盛を見て、嫉妬の念止み難く、百方其政策を妨害せんとせり。ペリクレス一派の人々も、亦一たびスパルタを懲すにあらざれば、到底其大統一の理想を貫くに由なきことを覺り、遂に紀元前四三一年、兩國及び其同盟の間に、所謂ペロポンネスス戰役は開かれぬ。

アテンの鋭は、海軍にあり。スパルタの強は、陸軍にあり。是を以て、ペリクレスは、壘を高くして、敵を城下に誘致し、海軍を縱ちて其虛を衝き、敵をして奔命に疲れしむるの妙策を

3. Sicilia＝
Sicily(英)
4. Syracusae(ラ)＝
Syrakusai(ギ)＝
Syracuse(英)

ペリクレスの遺策、尙其効を奏して、其勢スパルタと相伯仲し、紀元前四二一年、列國間に五十年の休戰條約成りぬ。

此休戰は、アテンに十分國力を休養すべき機會を與へたれども、アテン人の多數は、今や遠大の經綸に着眼せずして、偏に一時の利益名譽を得るに汲々とし、輕佻なるアルキビアデスの献策を納れ、紀元前四一五年、故なくシチリア島なる、ドリア族の殖民市シラクセーを擊ち、反りて大に敗績し、海陸の全軍を失ひければ、スパルタ以下、アテンを惡める諸國大に悅び、其疲弊に乘じ、合從して之を攻め、ペルシアも亦之に加はり、軍資をスパルタに輸しぬ。

アテン人は、更に新艦隊を作り、數、敵を海上に破りしが、當時民主主義極端に流れ、無智の賤民多數權を弄して、眼前の

利益、一時の感情に制せられ、政策・戰略兩ながら一貫せる方針を欠きけるが、紀元前四〇五年、スパルタ王リサンデル[5]、アテンの艦隊を襲ひて、之を全滅し、直にアテンに迫りて、海陸より合擊し、市内糧食竭くるに及びて、終に之を陷れ、悉く其武庫及び船具を毀壞し、民主政治を廢して、貴族三十人の寡人政府を立てぬ。之を三十僭主（テンノス）といふ。是に於てスパルタは、ギリシアの覇權を握り、到る處貴族を助けて、民主政撲滅を力め、專横驕傲の處置多かりしかは、列國皆之を厭忌せり。

5. Lysander(ラ)
=Lysanders(ギ)

是よりしてチランノスは、暴主と同意義となりぬ。

其後、アテン人は、三十僭主の暴政に堪へず、兵を擧げて之を逐ひ、民主政を復して、秩序的改革を行ひ、民會出席者の日給を全廢して、賤民の跋扈を防ぎ、民會・豫審會の決議と雖、成文法に抵觸するものは、之を無効とする事となしたれども、子ありと雖、社會は之を容れずして、反りて之を毒殺せり。

第四章　スパルタ・テーベー・マケドニアの覇業

ペルシアにては、アルタクセルクセス二世の弟キルス、竊に王位を覬覦し、紀元前四〇一年、反旗を翻せしが、事成らずして戰死し、其部下のギリシア傭兵は、ペルシア内地を縱横に通過して、終に歸國せり。是に於てスパルタは、ペルシア衰弱の實情を知り、紀元前三九六年、アゲシラウス[1]王を遣して、ペルシアに侵入せしめしが、ペルシア人、之を防ぐこと能はず、人を派し、財を散じて、列國に遊説し、以てスパルタに反かしめんとせり。列國も、亦久しくスパルタを惡めるを以て、コリンツスを盟主として同盟し、大にスパルタと戰ひぬ。

1. Agesilaus(ラ)
=Agesilaos(ギ)

是有名なる「一萬騎の退却」にして、其將クセノフォン(Xenophon クセノクラテスの弟子)之を詳記せり。

既にしてスパルタは、ペルシアに小アジア海岸のイオニ

ア族殖民諸市を與ふることを約し、之をして、列國に說かしめ、紀元前三八七年、平和條約成りぬ。此和約中に、各邦の獨立を認むといへる一項あり。是スパルタが、諸邦の同盟を解きて孤立せしめ、陰謀を用ゐて、漸次貴族政治を成立せしめ、再び自己の覇權を確立せんとの野心より出でたるなりき。

此陰險なる手段は、[2]ボエオティアの[3]テーベーに於て、十分に實行せられしが、テーベーの名士、[4]エパミノンダス・[5]ペロピダスの徒相謀りて、貴族政治を顚覆し、民主政を確立し、ボエオティアの諸市を聯合して、テーベーを其盟主となし、連年スパルタと兵を交へしが、紀元前三七一年、エパミノンダスは、[6]レウクトラ原頭に、有名なる斜線陣法を用ゐ、以て[7]クレオムブロッス王以下、スパルタの精鋭を鑒にせしかば、從來スパルタの壓制に苦みたる諸國は、爭ひて之に反けり。

2. Bœotia
3. Thebae
4. Epaminondas(ラ)=Epameinondas(ギ)
5. Pelopidas
6. Leuctra
7. Cleombrotus(ラ)=Kleombrotos(ギ)
8. Macedonia

エパミノンダスは、勝に乘じて、ペロポンネスに攻入し、メッセニアを獨立せしめ、[7]アルカヂア諸市の聯合を組織し、以て永くスパルタの勢力を減殺し、又テーベーを海軍國となさんと欲して盡瘁せしが、經營半途にして戰死し、ペロピダス等、亦之に先ちて死しければ、テーベーは、覇業未だ確立せざるに、國勢既に衰運に傾きぬ。

スパルタは、此戰役の爲に、非常に疲弊し、貴族たる市民の數、著しく減じたれども、これが補充の道立たず。其國憲も、今や大に弛廢して、少數の門閥權を弄し、剛毅素朴の風、日に消耗し、アテンも、亦國力衰弱して昔日の如くならず。此時に方りて、[8]マケドニア國、北方に勃興し、終に覇業をなしぬ。

マケドニア人は、ギリシア人に近似せる民族なれども、開化の發展、甚だ遲々たりしを以て、常に列國より外蠻視せら

れたり。然るに其海岸地は、黑海沿岸地方を經て、印度に達する商路の要衝に當れるが故に、イオニア族の民、夙に之を占め、許多の繁盛なる市を起し、自然マケドニア人を化して、漸く開明の域に向はしめたりしが、其王フィリップ[9]二世は、幼時テーベーに質となり、エパミノンダス以下名士の薫陶を受け、ギリシア人性行の眞相を知悉し、已これが覇主となりて、威名を輝かさんと欲し、其王位に登るや、頻りに列國の内事に干渉せり。時にアテンに、デモステネスといふ者あり。[10]フィリップの心事を看破して、極力之に反對し、大同盟を組織せしが、フィリップは、當代の名將にして、新奇なる密聚長鎗隊[11]を用ゐるしかは、同盟諸邦は、紀元前三三八年、ケーロネア[12]に大敗し、終に全く屈服して、フィリップを大元帥に推戴せり。是に於てフィリップは、將に大舉して、ペルシアを討たんとせしが、會刺客の爲に殺

1. Alexander= Alexandros(ギ)
2. Alexandria= Alexandreia(ギ)
3. Arbela
9. Philip= Philippos(ギ)
10. Demosthenes
11. Phalanx
12. Chæronea

デモステネスの雄辯は古今獨歩と稱せらる。

鎗の長さ二丈一尺、後列の兵は、前列の兵を助けて戰ふを得。

され ぬ。時に紀元前三三六年なり。

第三篇　東西文化融合時代

第一章　アレクサンドル大王の業

フィリップ王死するや、ギリシア列國、皆マケドニアの羈絆を脱して、獨立せんとせしが、太子アレクサンドル[1]繼ぎ、天錫の智勇を以て、忽ち之を威服し、其推戴によりて、ギリシアの元帥となり、紀元前三三四年、自ら兵を率ゐて、ペルシアに侵入し、向ふ所勝たざるなく、小アジア・フェニキア・パレスチナ等を席卷し、進みてエジプトを定め、アレクサンドリア[2]府を建設し、以て地中海の制海權を固め、再び鋒を東方に轉じて、ペルシアに入り、ダリウス三世の軍と、アルベラ[3]に激戰し、大に之を破り、ダリウスを窮追せしが、ダリウスは、部下の弑する

所となり、ペルシア全國、悉くアレクサンドルの有に歸しぬ。

初めアレクサンドルが、外征の師を出すや、其目的ギリシアの國敵・ペルシアを討ち、以て其統一を鞏固にせんとするにありき。然るにペルシアの稍平定するに及び、更に大統一の理想を生じ、其國人を軍隊に加へて、印度を討ち、既にしてスーサに凱旋するや、親らダリウスの女を娶り、部下の將士をして、アジアの婦人と婚せしめ、又鋭意ギリシアの文化を東方に輸入し、交通商業の便を開き、東西領土の人種文化を混一せんことを圖りしが、紀元前三二三年、經營未だ成らず、中道にして死し、また之に代るべき英雄なかりしかば、諸將互に相鬩ぎて、大紛亂を釀し、終にマケドニア・シリア・エジプトの三大王國を形成せり。

シリアは、アジアの西南を占め、三國中最大なるものなりしが、後久しからずして、パルチア（安息）バクトリア（大夏）の二國は、東北に、ユダヤは南部に、獨立を稱しぬ。バクトリアは、ギリシアの開化を輸入せること、シリアの如く、パルチアは、之に反して、ギリシアの文化を撲滅し、ペルシア舊時の文化を恢復するを以て國是となしぬ。

エジプトは、ギリシアの文化に浴すること最も多く、商業盛大にして、其都アレクサンドリアは、東西貨物の集散點となり、繁盛殷富、當時多く其比を見ず。加之ギリシアの學者、多く此地に來りて、學術の研鑽に從事せるが故に、また文學の淵叢となれり。

マケドニア本國は、ギリシア諸邦の覇權を握りしが、ギリシア人動もすれば之に反抗し、エートリア同盟・アケーア同盟等を組織し、本國にては、屢國王を代へ、紀元前二八七年、遂

4. Achæa(ラ)=Achaia(ギ)
5. Epirus(ラ)=Epeiros(ギ)
6. Pyrrhus(ラ)=Pyrrhos(ギ)
7. Pergamus(ラ)=Pergamon(ギ)
8. Bithynia

にエピルス王[5]ピルルス入りて王たり。ピルルスは、在位僅に七個月にして逐はれしを以て、爾後志を西方に伸さんと欲し、カルタゴ・ローマ兩國と衝突を惹起すに至れり。

此他小アジアには、[7]ペルガムス・ビナニア・ポンツス・カッパドキア・パフラゴニア等の諸王國、及び[12]ローヂス共和國ありて、各一方に割據せり。

第二章　地中海沿岸諸人種の關係

フ*エニキア人は、地中海の沿岸到る處に殖民し、ギリシア人も、亦廣く各地に殖民地を設け、東は群島海、黑海の沿岸に抵り、西はイタリア南部・シチリア・サルヂニア・コルシカ及び今の佛國の東南岸・[1]エスパニアの東北岸等に及べり。故に激烈なる競爭衝突は、常に此兩民族の間に起りき。

1. España(原)=Hispania(ラ)=Spain(英)
2. Carthago(ラ)=Karchedon(ギ)=Karthada(原)=Carthage(英)
3. Italia=Italy(英)
4. Etrusci
5. Latini
6. Sabini
7. Umbri
8. Samnitæ
9. Tiber=Tiberis(ラ)=Tevere(伊)
9. Pontus(ラ)=Pontos(ギ)
10. Cappadocia
11. Paphlagonia
12. Rhodus(ラ)=Rhodos(ギ)

フ*エニキアの殖民地中、最も形勝の地を占め、夙に繁榮を極めし[2]カルタゴは、本國の衰微するに從ひて、益富强を加へ、其海軍は、優に地中海を制し、勢威沿岸の諸民族を凌ぎ、殊にシチリアにては、嶋の西部なるフ*エニキアの殖民諸市を助けて、其東部なるギリシア殖民諸市を壓せんことを務めき。

[3]イタリア半島の北部には、[4]エトルスキといふ種族あり。何人種に屬するか明かならざれども、其開化の發達、半島中部に住せるイタリア民族よりも早く、製造商業を勉め、コルシカ・サルヂニア等に殖民せり。

イタリア民族は、[5]ラチニ・[6]サビニ・[7]ウムブリ・[8]サムニテー等の種族に分る。ラチニは、[9]チベル河を以て、エトルスキと界し、夙に其河畔に一殖民地を起し、サビニ及びエトルスキの二村落と相合して、一府をなせり。これ即ち[10]ローマ府なり。

ローマは、初め選擧せる王を戴き、元老院[11]之を輔佐し、大事は、之を貴族會[12]に諮詢し、然る後決せり。庶民[13]は、一切參政權なかりしが、常に自ら伸びんとして止まず。王も亦多くは之を助け、終に之に兵士たるべき權を與へ、兵員會[14]に出席して、攻擊的戰爭を可否するを得しむ。貴族[15]等之を悅ばず、遂に王を逐ひて、共和政治を立て、統領[16]二人を置き、在職一年と定めき。

此政變に際し、庶民は、反りて兵員會の權を張り、漸次貴族會を有名無實とし、元老院も亦大に勢力を得、遂に行政の全權を握るに至りしが、兵員會に於ては、尙貴族の權勢大なりしかば、庶民は、漸を以て歩を進め、遂に護民官[17]を設けて、自己の權利を保護せしめ、民會[18]を起して、兵員會と相對せしめ、又漸次各種の官職に就くことを得ければ、紀元前第四世紀の末には、貴族と庶民とは、法律上全く差別なきものとなりぬ。

10. Roma(ラ)(以)=Rome(英)
11. Senatus =Senate(英)
12. Comitia Curiata
13. Plebes
14. Comitia Centuriata
15. Patricii
16. Consul
17. Tribuni Plebis
18. Comitia Tributa

ローマは、建國以來、國運日に隆盛に赴き、ラチニの諸邦を從へ、一時エトルスキに屈服せしことあれども、幾もなくして獨立し、國勢復振ひぬ。時に歐洲西南には、ケルチ人種あり。其一支族ガリ[20]は、ガリア[21]今の佛國及び其の北方附近の地に住せしが、東北なるゲルマニ[22]人種に壓迫せらるゝに及び、其一部、イタリアに入り、エトルスキを破り、紀元前三九〇年、ローマを侵し、勝に乘じて市内に闖入し、焚掠を恣にせり。ローマは、重幣を納れて、僅に之を退くることを得たりしが、ガリは、終にポー[23]河以北の地を占め、屢南侵してローマを苦め、ローマは、之と激戰すること數回にして、紀元前三四九年、遂に大に之を破りぬ。是に於てガリの一群は、鋒を東に轉じて、トラキアに移り、屢マケドニア・ギリシアに寇し、又他の一群は、小アジアに渡り、劫掠を逞しくし、後其中央の山地に蟠居して、漸次ギリシアの開化

19. Celti(ラ)=Celtics(英)

此時ローマの舊記は、悉く烏有に歸す。

20. Galli(ラ)=Gauls(英)
21. Gallia
22. Germani
23. Po=Padus(ラ)

此山地にガリの蟠居せるに由り、之をガラチアと名づく。(Galatia)

に浴しぬ。

第三章　ローマのイタリア一統　エピルスの寇

ローマは、日に繁盛に赴き、人口大に増剰せしかば、從ひて國土擴張の必要を生じたれども、其海軍微々として振はず、紀元前三四八年、カルタゴに迫られて、頗る不利なる商業條約を結びき。其形勢此の如くなれば、ローマは、殆ど海外に殖民地を得るの望なく、專ら陸上に發達伸暢を圖るの外、道なかりき。然るにローマの强敵サムニテーは、常に謀主となりて、諸種のイタリア民族のみならず、ガリ・エトルスキ及び半島南部のギリシア人をも聯合し、連年ローマを苦しめて、其發展の大障害をなせしが、ローマは、よく之と戰ひ、數回の戰役を重ねて、紀元前二八二年、遂に大に之に勝ち、ガリの外、悉く諸種族を征服して、其地を割かしめ、許多の殖民地を作り、良好なる軍路を開きて、之を聯絡せり。

時にエピルス王ピルルス、私に大志を懷き、ギリシア殖民地なるタレンツム[1]が、ローマに迫られて、救をピルルスに求むるや、直に之に應じ、紀元前二八〇年、イタリアに上陸し、其用兵の妙と、戰象及び密聚長鎗隊（ファランクス）の新奇なるとに依り、連りにローマ軍を破りければ、イタリアの諸種族、爭ひて之に從へり。然れども、ローマは、毫も之に屈することなく、ピルルスの使節を逐ひて和を議せざりき。此時ローマの殖民各市は、皆本國に忠誠を致し、敵至れば固守して出でず、敵去れば出でゝ其後を窺ひしを以て、ピルルスも奔命に疲れ、且既に數多の精兵を失ひて、軍氣頗る沮喪せしが、適シラクセー市、カ

1. Tarentum(ラ)=
Taras(ギ)=
Taranto(伊)

ルタゴの攻撃に苦しみ、救をピルルスに乞へるに會ひ、乃ち轉じてシチリアに至り、大にカルタゴの軍を破れり。是に於てカルタゴ・ローマ攻守同盟を結び、カルタゴは、海軍を以て、ピルルスの本國エピルスとの交通を妨げぬ。既にしてピルルス、再びイタリアに上陸せしが、今や、其兵大に減じ、イタリア諸種族亦之に服せず。加之ローマ人は、亂射を以て象を退け、側面より密聚長鎗隊を夾擊するの妙策を覺りければ、ピルルスは、紀元前二七五年、大敗して歸國せり。是に於てガリの外、イタリア半島の諸民、悉くローマの覇權に服しぬ。

第四章　ポエニ戰役

紀元前第三世紀の初めに當り、地中海の沿岸に、二個の強國あり。一は海軍の強を以て、既に一世に雄視せるカルタゴにして、一は陸軍の精鋭を以て、新に勃興せるローマなるが、兩雄並び立ち難く、此二國は、紀元前二六四年、遂に干戈を以て相見るに至れり。これを第一[1]ポエニ戰役といふ。

此戰爭は、シチリアに開かれ、ローマは、常に陸戰に於て優勢なりしが、敵艦海上を制して、意の如く爲さしめざりしかは、難破せる敵艦に模して大戰艦を造り、又大將[2]ヅイリウスは、各艦に吊橋を設けて、直に敵艦に突入するの便に供し、紀元前二六〇年、[3]ミレーの海戰に、始めて大勝を得たり。尋ぎてローマの一軍は、敵の本國を衝かんとして出發し、[4]エクノムス岬附近に於て、敵の艦隊に遇ひ、之を擊破して、直にカルタゴ近傍に上陸し、其國都に迫りしが、忽ち大に敗績し、死傷頗る多く、殘兵は僅に船に上りて、逃げ歸るを得たり。

後又ローマ海軍大敗し、且颶風に遇ひて、多く難破せしが、

1. Pœni
2. Duilius
3. Mylæ
4. Ecnomus(ラ)=Eknomos(ギ)

ポエニは、フォエニキアの轉なり。

吊橋には、鈎ありて、敵船を鈎するに供す。

ローマ市民は、奮ひて金を醵して、新艦隊を作り、紀元前二四一年、エーガテス[5]諸島の邊に於て、遂に敵の艦隊を全滅するを得たり。是に於てカルタゴ力竭き、賠償を出して、和を結びぬ。ローマ、乃ちシチリアの東端小部を、其同盟シラクセーに與へ、殘部を合して、始めて縣[6]を置き、尋ぎてカルタゴの疲弊に乘じ、迫りてサルヂニアを割讓せしめ、又北方のガリを討平し、其地に數多の殖民市を設けて、貧民を移し、以てガリの再叛に備へ、且之を感化せしめぬ。

カルタゴは、其後エスパニアを略し、其地の銀山を新財源とし、又土民を傭兵として、國力稍恢復せしかば、ローマ人、大に之を忌み、紀元前二一八年、再び戰端を開きぬ。之を第二ポエニ戰役と名づく。

此役に、カルタゴの名將[7]ハンニバルは、エスパニアより、南部ガリアを經、アルプス山の嶮を越えて、北部イタリアに入り、破竹の勢を以て南進し、到る處ローマ軍を破りしが、直にローマに迫らず、轉じて東海岸に出で、本國と聯絡の根據を作り、紀元前二一六年、カンネ[8]の戰に、大にローマ軍を破りしかば、イタリアの諸民族、風を望みて歸降するもの多く、ローマの危急旦夕に迫れり。然れどもローマ人不屈不撓の精神益振ひ、上下心を一にして、頻りに戰備を修めたり。

當時カルタゴに於ては、貴族却りてハンニバルを嫉み、十分の援兵を給せず、又遙にエスパニアより應援の爲に來れるハンニバルの弟ハスドルバル[9]は、ローマ軍に要擊せられて、空しく敗死し、外援全く絶えしかば、ハンニバルの軍氣漸く沮喪せり。ハンニバルは、又マケドニア・ギリシア・シリア等を聯合して、ローマを攻めんことを計りしが、シリア王アン[10]

5. Aegates Insulae(ラ)=Egadi Isole(以)=Aegatian Islands(英)
6. Provincia
7. Hannibal
8. Cannæ(ラ)=Canne(以)
9. Hasdrubal

10. Antiochus(ラ)=Antiochos(ギ)
11. Publius(名)Cornelius(族) Scipio(姓)Africanus Maior(綽名)

チオクス三世は、即位の初め、内亂を鎭め、バルチア・バクトリア・エジプト・印度等の侵寇を擊退し、今や、方に國力休養を要する時なるに、ローマが速にエジプトと同盟せるを以て、爲に遠く師を出すことを得ず。マケドニア王フィリップ三世も、ローマの海軍を恐れて、師を出さず。ローマが、ギリシア列國を煽動して、共に來り攻むるに及び、遂に和を請ひぬ。是に於て、ハンニバルの勢益窮す。之に反してローマは、漸次其勢を增し、シチリアにては、敵の同盟シラクセーを陷れ、エスパニアにては、名將スキピオ[11]、全半島を略定し、更に轉じて、カルタゴ本國を衝けり。是に於てハンニバルは、本國政府の召還に應じて、倉皇歸國し、紀元前二〇二年、スキピオと、ザマに激戰して大敗せしかば、カルタゴ遂に和を請ひ、エスパニアを割讓し、軍艦は十艘を除く外、悉く之を破壞し、爾後年々貢獻をなし、及びローマの許可を得ずして、猥りに兵を動かさゞることを約しぬ。

第五章　ローマの地中海沿岸地征服

紀元前二〇〇年、マケドニアは、シリアと同盟し、エジプトペルガムス・ローズス等を略せんとせしかば、是等の諸國、救をローマに請へり。ローマ之に應じ、輙ち兵を派し、ギリシア列國の兵と共に、大にマケドニアの軍を破り、紀元前一九七年、フィリップ三世をして、莫大の償金を出さしめ、又其常備兵の數を制限し、ギリシアの覇權を棄て、ローマの許可なくして、猥りに干戈を動かさゞることを盟はしめぬ。

シリア王アンチオクス三世は、紀元前一九二年、一旦ギリシアに上陸せしが、列國多く之に從はず。マケドニア王フィリ

プも、亦先にアンチオクスが、己を援けざりしを怨み、反りて之に敵しぬ。既にしてローマ軍大に至り、アンチオクスをギリシアより逐ひ、ローヅスの艦隊、亦其海軍を擊破せり。尋ぎてローマの大將スキピオ、シリアに攻め入り、紀元前一九〇年、マグネシア[1]に於て、大にアンチオクスを破り、翌年和を修めて、タウルス[2]山以西の地を割讓せしめ、之をペルガムスとローヅスとに分與し、又戰象・戰艦を獻じ、巨萬の償金を出さしむ。此時、大小アルメニア[3]の二國も、シリアより分離して獨立し、シリア王國大に衰へぬ。

紀元前一七一年、マケドニア王フィリップの子、ペルセウス[4]、又兵を擧げて、ローマに反抗しけるが、ローマは、同一六八年に至り、全く之を滅して、四個の保護國とし、其與國なるイルリリクム[5]（今のダルマチア）を滅して縣となし、紀元前一四六年、又マケドニア・ギリシアの反亂を戡定し、遂にマケドニアを以て、ローマの縣とし、其縣知事をして、ギリシア諸邦を統治せしめ、各邦に自治を許したりしが、獨りコリンツス市は、商業上ローマの强敵たるを以て、之を破壞し、其市民を奴隸として賣却せり。

此年、カルタゴ亦ローマの爲に破壞せられぬ。カルタゴは、形勝の地を占め、其民有爲活潑の氣象に富めるを以て、漸次國勢を恢復し、また隆盛に赴くの勢ありしかば、ローマ人之を忌憚して措かず。紀元前一四九年、海岸を距る數里の地に移轉せんことを迫れり。カルタゴ人憤慨に堪へず、今や外に援くべき與國なく、內に兵備の不整なるをも顧みるに遑あらず、斷然此殘酷なる命令を拒絕し、擧國一致して敵に當り、初めはローマ軍を擊退することを得たれども、スキピオ・エミリアヌス[6]來りて、巧に包圍攻擊を爲すに及び、終に陷り、

1. Magnesia.
2. Taurus.
3. Armenia Maior(大)
   Armenia Minor(小)
4. Perseus
5. Illyricum＝Illyria
6. Publius Cornelius Scipio Aemilianus Africanus minor

ハンニバルの敵手なるスキピオの養子なり。

7. Attalus(ラ)=Attalos(ギ)
8. Numidia

數百年來繁盛を極めし海上の雄國も、ローマ人の一炬、忽ち焦土と變じ、其人民は、悉く奴隷となり、其地は、ローマのアフリカ縣となりぬ。これを第三ポエニ戰役とす。

紀元前一三三年、ペルガムス王アッタルス[7]三世死するや、遺言して國をローマに讓りければ、ローマは、國人の反抗を鎭めて、之をアジア縣となしぬ。當時ヌミヂア[8]（アフリカ縣の隣國）、エジプト、シリア及び小アジアの諸國、皆多少ローマの號令に從ひしかば、地中海沿岸諸國の覇權、遂にローマに歸しぬ。而して其ギリシア征服は、ギリシア文化の輸入を生じ、ローマは、能く之を吸收して、東西に傳播するの媒介者となりぬ。

第四篇　ローマの大統一時代

第一章　ローマ共和政治の腐敗

ローマにては、貴族と庶民との差別、全く消滅して、更に一の門閥を生じ、種々の利益特權を專領し、元老院の議員席、政府の顯職、皆其占むる所となりしが、初めは高潔有爲の人士多く輩出し、外交方針の如き、反りて之が爲に一貫し、連りに諸外國を征服し、遂にローマをして、宇内の一大國とならしめぬ。然るに是等の勝利により、ローマに流入せる莫大の富は、甚しく人心を頽弛し、閥族は、或は資本家と結托して、家門の繁榮を計り、或は賄賂を貪りて、不義の富貴に誇り、驕傲華奢、滔々として風をなしき。之に反して、平民の窮苦は、人口の增殖と、奴隸使役の風盛なるとにより、日に益甚しく、貧富懸隔して、國家存立の要素たるべき中等社會、漸く跡を絕つに至れり。然れども、ローマ市民たる者は、尙貧擔を免るゝことを多く、且參政權を有せしが、他のイタリア人は、啻に市民權な

きのみならず、貧擔偏重にして、徒らに政府に驅使せられ、縣（プロヴィンス）に至りては、更にこれより甚しく、知事の賦歛苛重に失し、殊にローマ人の爲に、其子弟の拐去せられて、奴隸とせらるゝこと大に行はれたり。

兵員會は、重大の事を決し、民會は、普通の國事を議す。而も其權限の區域明瞭ならず。閥族は、前者に於て全權を握り、平民は、後者に於て多數を制す。故に其衝突は、到底免るゝこと能はざる勢なりきと雖も、閥族が、金錢を投じて吝まざると、失政の甚多からざりしとは、永く平民の望を繫ぐを得しが、其腐敗の愈甚しきに及び、漸く反對の氣焰を高め、紀元前一三三年、ナベリウス・グラックス[1]の護民官となるや、民會を率ゐて、大に閥族の抑制を試み、却りて之が爲に虐殺せられ、弟カイウス・グラックス[2]、亦護民官となり、其遺志を繼承せしが、紀元

1. Tiberius Sempronius Gracchus
2. Caius Sempronius Gracchus

前一二一年、其黨三千人と共に、亦閥族の毒刃に斃れぬ。

ヌミディア王ユグルタ[3]の陰謀を以て、其國を一統するや、ローマの命令を奉せず、頗る侮蔑の所爲多かりしが、厚く閥族の官吏將帥に賂ひて、其責罰を免れしかば、ローマの人民、大に之を咎め、遂に政府に迫り、閥族ならざるマリウス[4]を擧げて大將とし、ヌミディアを攻めしめ、紀元前一〇七年、全く之を服したり。是より先、ゲルマニ[5]種のキムベリ[6]・テウトニ[7]の二種族、南ガリアに侵入して、ローマ軍を破り、將にイタリアを犯さんとす。是に於てマリウス、また兵を率ゐて之を邀へ、紀元前一〇二年、大勝を得て之を鑒にしたり。

其後、閥族の專横益甚しく、平民との軋轢止まず。平民黨は、他のイタリア人民に、市民權を與ふることを約して、之と運動を共にせしが、紀元前九一年、兩黨調停の策破るゝや、イタ

6. Cimberi
7. Teutoni
8. Lucius Cornelius Sulla

3. Jugurtha
4. Caius Marius
5. Germani

リアの諸人種は、失望の極、遂に大聯合を作りて、ローマの羈絆を脱し、イタリアと稱する一大共和國を建てんとせしかば、ローマ市民の驚愕譬ふるにものなく、茲に全く黨爭を抛棄して、擧國一致の方針を取り、マリウス・スルラ[8]の二將をして、專ら鎭定に盡瘁せしめしが、反徒の勢、頗る猖獗にして、容易に平定すべからず。因りて斷然、ラチニ以下、未だ反かざる種族に、市民權を賦與し、次ぎて定期内に降服する者にも、亦均しくこれを許すことゝしければ、反徒の氣焰大に挫け、紀元前八八年に至り、全く鎭定したり。

第二章　東方諸國及びローマの内亂

バクトリアは、國勢一時强大にして、印度西北部を略せしが、其後漸く衰へ、月氏[1]（蒙古種）其北邊を蠶食し、パルチア王ミトラダテス[2]一世、亦西方より侵入して、紀元前一五〇年頃、遂に之を滅せり。其一族、尙南方に據りて、餘喘を保ちしが、紀元前八〇年の頃、亦嚈噠[3]に滅されき。嚈噠は、即ち月氏なり。ミトラダテスは、又シリア王國を攻め、其境をエウフラテス河まで擴めぬ。バクトリアの滅亡、及びシリアの縮小は、即ちギリシア文化の挫折なりと謂ふべし。

黑海東南岸のポンツスにては、其王ミトラダテス六世、黑海の北岸及ひ東岸の地、小アルメニア・カッパドキア・パフラゴニア等を併呑し、ローマの譴責を蔑視し、紀元前八八年、アジア縣に亂入せしが、土民之を歡迎し、小アジア全部皆其有に歸しぬ。是に於て王は令して、其地にありしイタリア人、男女八萬を殘殺せしめ、兵を遣して、トラキア・マケドニアを略し、又軍艦を派して、ローマ商業の中心なるデルス島を取り、進

1. Yue-chi
2. Mithradates
3. Ephthal

みてエウボエア[4]島を略しければ、アテン以下ギリシア列國、風を望みてポンツスに歸しぬ。

是に於てローマは、スルラを征討大將に命じぬ。會、護民官スルピキウス[5]、マリウスと謀り、大に平民を煽動し、閥族の權力減殺の法案を通過せしむ。スルラ之を聞き、兵を率ゐてローマに入り、スルピキウスを殺し、マリウスを走らせて、兵員會の權力を擴張し、而る後馳せてギリシアに至り、連りに勝ちて、ポンツス兵を驅逐し、軍艦を新造して、敵を窮追し、小アジアに渡り、終にミトラダテスをして、其併呑せる地を悉く復舊し、償金軍艦を献じて、和を請はしめたり。

其間過激民黨のキンナ[6]は、マリウスと共に、武力に藉りてローマに入り、閥族を殘殺し、其財產を掠奪せしが、幾もなくして、マリウス病死し、キンナは、一揆の爲に殺されぬ。此時スルラは、ポンツスの事局を結びて、直に歸國し、民主黨の兵を破りて、ローマに入り、嫌疑者數千人を殺し、其財產を沒收し又新憲法を作りて、以て大に閥族の權力を固定し、後退隱して病死しぬ。

4. Euboea
5. Sulpicius
6. Lucius Cornelius Cinna

此時に當りて、ローマの下等人民は、益貧困に陷り、閥族は、腐敗驕奢、其極に達し、無益なる事には、數萬金を散ずれども、國家必要の事業には、錢を吝み、警察弛緩し、海軍振はず、盜賊到る所に橫行し、海賊出沒して商船を襲ひ、ローマ附近に上陸して、劫掠を逞しくするに至れり。加ふるにマリウスの殘黨は、エスパニアに據りて、政府に反抗し、ポンツス王ミトラダテス、亦之と氣脈を通じて、アジア縣を侵し、マケドニア山地の土民も、亦反きて勢猖獗なり。殊にローマ人の殘忍なる、奴隸捕虜等をして、武器を執りて相格鬪し、或は野獸と相鬪

はしめ、之を觀て以て娛樂とせしが、今や、是等の[7]鬪者（グラディアトル）相結びて、大一揆を起し、また暴戾を極めたり。是に於てローマ人は、[8]ポムペイウスをして、エスパニアを平定せしめ、[9]クラッススをして、鬪者の亂を鎭めしめ、共に其功を奏しき。

當時海賊の跋扈益甚しく、穀物の輸送之が爲に杜絕せり。ポムペイウス、また命を奉じて之を掃蕩し、遂に[10]キリキアに至り、其根據を覆滅しぬ。次ぎて[11]ケーザル及び有名なる辯者[12]キケロ等の盡力により、ポンペイウスは、ポンツス及び其同盟アルメニア大を擊つの全權を委托せられ、紀元前六六年、ポンツスに攻め入り、忽ち之を平定して縣となし、又アルメニアに侵入せり。初めアルメニア王[13]ティグラネスは、パルティアの西北境を略し、又シリア人の推戴を受けて、其王を兼ぬ、國勢大に振ひしが、今やポムペイウスに敵する能はずして降りければ、ポムペイウスは、これに其舊領を許し、シリアに縣を新設し、又ユダヤを攻めて、之を朝貢國とせり。而してパルティアとは、初め同盟を結びけれども、後其條件を履行せず、之に處する頗る不正不遜なりしかば、是よりパルティアは、ローマの仇敵となりぬ。

11. Julius Cæsar
12. Marcus Tullius Cicero
13. Tigranes

7. Gladiator
8. Cnaens Pompeius
9. Marcus Crassus
10. Cilicia

第三章　ケーザルの業

ローマの人心既に腐敗し、閥族は專横を極め、地方人民は疾苦に泣く。此時に當りて、[1]カイウス・ユリウス・ケーザル出で、英斷を以て、百弊を一掃し、能くローマ大國の瓦解を防ぎたり。ケーザルは、民主黨の首領なり。寬洪・大膽・明敏・果斷・才略絕倫にして、兼ねて衆技に通ぜる、千古稀有の英雄なりしが、早くも閥族の爲すなきを洞察し、ポムペイウス・クラッススと結

1. Caius Julius Cæsar

托し、閥族を抑へて政權を握り、紀元前六〇年、第一三頭政治[2]を作りぬ。

次ぎてクラッススは、パルチアを討ち、其名將スレナス[3]の術中に陷り、紀元前五三年、カルレー[4]に近き沙漠に於て、敗死しければ、アルメニアは、パルチアに歸降し、ユダヤも亦獨立し、從來東方に赫々たりしローマの威勢一朝にして地に墜ちぬ。

クラッススの失敗に反して、ケーザルのガリア征討は、前後八年に亘り、遂に悉く慓悍なる土民を服し、永くローマの風に化せしめ、又ブリタニアを討ちて、其一部を平定し、ゲルマニを破りて、永く其患を絶ちたり。

ポンペイウスは、獨りローマに止りしが、市内の黨爭を制することと能はず。ケーザルの威名日に盛なるを見て、嫉妬の念止み難く、終に閥族と結びて、紀元前四九年、ケーザルを招還したり。ケーザル其陰謀を覺り、兵を率ゐて歸國せしかば、ポムペイウス及び多數の閥族は、倉皇ギリシアに出奔しき。

ケーザル、之を窮追し、紀元前四八年、ファルサルス[5]に於て、大に敵軍を破り、閥族多く之に死し、ポムペイウスは、逃げてエジプトに至り、土人の爲に殺されぬ。

ケーザルは、エジプト及び東方諸國を定め、又アフリカ・エスパニアなるポムペイウスの殘黨を平げ、紀元前四五年、ローマに凱旋し、總統[6]となり、又イムペラトル[7]の稱號を得て、政治兵馬の全權を握り、大に人才を登用し、兵制を革新し、海軍を擴張し、尚武の氣風を恢復するの方針を取り、刑法を改良し、財政を整理し、地方に無數の殖民市を新設し、特に地方官の監督を嚴にして、其專横を防遏し、學問美術を奬勵し、曆法

2. Triumviri
3. Surenas
4. Carrhæ
5. Pharsalus
6. Dictator
7. Imperator

ディクタトルは、國家危急の時、一時獨裁權を與ふる職なり。イムペラトルは、初めは唯將軍といふ義なりしが、此時より兵馬最上權所有者の稱號となり、終に皇帝の義となりぬ。

を改正し、奢侈を禁じ、利子の制限を定め、ローマ街衢の改新を計り、大建築を起し、善政頗る多かりしが、尚ケーザルが計劃中にありし主なる事業を擧ぐれば、ローマ附近沼澤の乾燥、ナベル河流の改浚、[8]アペンニヌス山中新道の開通、コリンツス・カルタゴ兩市の再建、コリンツス地峽の開鑿、大圖書館・大博物館の創設、大法典の編纂、パルナア征伐等なりき。

ケーザルは、是等の大經綸に盡瘁して、其他を顧みるに遑あらざりしが、門閥政治の舊夢を忘るゝ能はざる[9]ブルツス、及びケーザルの榮達を妬忌せる[10]カッシウスの輩六十人、密に黨を結び、紀元前四四年、不意に起りて、ケーザルを議事堂に刺殺しぬ。

8. Apenninus＝Apennine(英)
9. Marcus Junius Brutus
10. Caius Cassius

第四章　ローマ帝政の前期

ケーザル死したれども、時勢は既に門閥政治の復興を許さず、慘憺たる内亂を經て、終に君主政體の確立を見たり。

ケーザルの死後、[1]アントニウスといふ者、快辯を振ひて、人民を激昂せしめしかば、ケーザル刺殺者は、ギリシアに逃走せり。アントニウス、乃ちケーザルの姪[2]オクタヴィアヌス、及びケーザルの部將[3]レピッスと結托し、第二・三頭政治を作り、大に反對黨の人士を殺戮し、紀元前四二年、オクタヴィアヌスと共に、ブルツス・カッシウスを[4]フィリッピに破りて、之を殺しぬ。

パルナアは、ローマの内亂に乘じ、太子[5]パコロスを遣して、シリア・フェニキア・パレスチナ及び小アジアの南岸を略せしむ。時にアントニウス、エジプトに在りしが、其部將[6]ヴェンチデウス、パルナアの軍を擊ちて之を破り、パコロスを殺しぬ。紀元前三六年、アントニウス、親ら大兵を率ゐてパルナアに

1. Marcus Antonius＝Mark Antony(英)
2. Octavianus
3. Lepidus
4. Philippi
5. Pakoros

侵入し、利あらずして歸り、復エジプトに至り、女王クレオパトラの色に迷ひ、逸樂に耽り、終にオクタヴィアヌスの妹なる、其妻[8]オクタヴィアを離別しければ、こゝに兩人の間に爭端を開き、ギリシアのアクチウム[9]に、兩軍相對せしが、海戰酣にして、アントニウス逃走しければ、其海軍先づ潰え、陸軍は、戰はずして、オクタヴィアヌスに降りぬ。

オクタヴィアヌスは、アジア地方を平定し、エジプトに攻入りしが、アントニウス・クレオパトラ、共に自殺しければ、乃ちエジプトを以て縣とせり。是より先、レピッス、亦オクタヴィアヌスに抗せしが、勢敵し難くして降伏し、政權終に全くオクタヴィアヌスの手に歸しぬ。

オクタヴィアヌスは、イムペラトルの稱號と、君主の實權とを得たれども、勉めて共和政治の形式を存し、己は唯其一官

6. Ventidius
7. Cleopatra
8. Octavia
9. Actium
10. Augustus

吏たるの外觀を裝ひ、數、其職を辭せしが、元老院及び民會は、反りて切に其留任を請ひ、且アウグスツスの尊號を奉りぬ。

アウグスツスは、大に風俗改良[10]に關する法律を發して、惰弱の風を矯正せんとし、ローマ市街を改良修築し、地方官の監督を嚴にし、文學美術を奬勵せしかば、ヴィルギリウス[11]・オヴィディウス[12]・ホラチウス[13]の如き、有名なる詩人輩出せり。而して耶蘇基督の生誕[14]も、亦アウグスツス治世中紀元前四年なりき。

アウグスツスは、パルチアと和し、エスパニアの西北隅を討ちて、全半島を平定し、將を派してゲルマニを討たしめ、悉くドナウ[15]河全流以南の地を略し、又ライン[16]右岸の地を蠶食せしが、トイトブルグ森中に大敗して、全軍を失ひければ、ゲルマニア[17]平定の初志を飜して、專ら蠻民の侵寇に備へき。

紀元一四年、アウグスツス死し、ユリウス家に多少の緣故あ

11. Virgilius＝Virgil(英)
12. Ovidius＝Ovid(英)
13. Horatius＝Horace(英)
14. Jesus Christus

アウグスツスは威嚴高大の義、後世文學隆盛時代をアウグスツス時代といふ。

通常稱する所の基督紀元は誤算なり。

トイトブルグ森は、今のドイツのウェストファーレン地方にあり。

る者、四人、相次ぎて立ち、帝政漸く固定せり。チロ帝、暴虐にして、將士之に反き、帝遂に自殺し、國内大に亂れしが、ヴェスパシアヌス[18]（六九―七九）亂を靜めて、帝位に登りぬ。

ヴェスパシアヌスの後、チツス（七九―八一）[19]、ドミチアヌス（八一―九六）[20]、ネルヴァ（九六―九八）[21]、トラヤヌス（九八―一一七）[22]、ハドリアヌス（一一七―一三八）[23]、アントニヌス・ピウス（一三八―一六一）[24]、マルクス・アウレリウス（一六一―一八〇）[25]相次ぎて立ちしが、ドミチアヌスを除きては、皆賢明の君主にして、國利民福を計り、國權伸暢を勉めぬ。此間ヴェスパシアヌスは、ブリタニアを討ちて、之を平定し、又チツスをして、ユダヤの反を鎭めしめ、七〇年、エルサレムを陷れ、人民を四方に放散せしめぬ。トラヤヌスは、ドナウ河下流以北の地を略し、之をダキヤ縣[26]とし、又アラビア北部を取り、アラビア縣を置き、マルクス・アウレリウスは、北方より侵入せるゲルマニを擊退せり。後、漢に通ぜし大秦國王安敦は、此帝なりといふ。

15. Donau(獨)＝Danube(英)＝Danubus(ラ)
16. Rhein(獨)＝Rhine(英)＝Rhenus(ラ)
17. Teutoburger Wald
18. Vespasianus＝Vespasian(英)
19. Titus
20. Domitianus＝Domitian)
21. Nerva
22. Traianus＝Trajan
23. Hadrianus＝Hadrian(英)
24. Antoninus Pius
25. Marcus Aurelius Antoninus＝Marc Aurel (獨)
26. Dacia

マルクス・アウレリウス死せしより、ヂオクレチアヌスの即位に至る、百四年間（一八〇―二八四）に、ローマに帝たりし者、廿四人、概ね暗愚或は暴虐にして、終を善くせる者、僅に二人、其他は皆非命の死を遂げぬ。是等皇帝の位に即くや、多くは跋扈せる軍隊の助を借りしが、當時の軍隊は、傭兵より成り、眼中に國家あることなく、唯自己の心服せるもの、或は己に賄賂せる人を奉ずるを常とせり。此の如く形勢頗る亂雜なるを以て、ローマは、漸く衰弱に赴き、殖産事業退歩して、人民大に困難に陷りぬ。

第五章　ローマと其東隣　基督教の弘通

アウグスツスの時より、凡百餘年間、ローマとパルチアと

は、互に和親を保ちしが、一一四年、トラヤヌス帝、大擧してパルチアを討ち、連戰連勝して、パルチアの都クテシフォン[1]を陷れ、殆と之を滅さんとせしが、土民四方に蜂起して、ローマ軍を苦しむること甚し。偶一一七年、帝病みて陣中に死し、從弟ハドリアヌス、パルチアと和し、悉く占領地を返しぬ。マルクス・アウレリウス帝の時、パルチア王ヴォロゲセス[2]三世（一四一～一九一）ローマを攻め、其勢頗る盛なりしが、幾もなくして大敗し、却りてローマ軍の侵入を受け、國都復陷りければ、メソポタミアの北半を割きて、和を結べり。其子ヴォロゲセス四世、ローマの内亂に乘じ、メソポタミアを恢復したれども、後セヴェルス[3]帝の破る所となり、メソポタミア、及び其東北なるアヂアベーヌ[4]地方を割讓して和しぬ。

セヴェルスの子、カラカラ[5]帝は、全帝國人民に、悉く市民權を

1. Ctesiphon
2. Vologeses
3. Severus
4. Adiabene
5. Caracalla

授與したり。ローマは、もと三市の合同より成り、漸次諸種の民族を征服し、常に其習慣信仰に干渉せず、又自治制を許し、唯市民權即ち參政及び其他二三の特權を與へざりしが、イタリア半島諸民族大謀反の時に、イタリア人一般に市民權を授け、其後、また他の人民にも之を許せしことありしが、是に至りて、全國の人民、悉く此權を得て、全く同等となりぬ。當時ローマ人は、自國の文化を崇拜するの極、苟も此文化に浴する者は、皆同一ローマ人にして、ローマは、化外の民を馴服するの天職を有せりと信じ、此主義を取る者は、何の國人たりと雖、之を皇帝として奉戴するを恥とせざること、頗る漢人と相似たり。

然るに帝國内に千種萬態の宗教存立し、多くは一國一地方に特有なる性質を有し、荒唐なる教理、卑陋なる祭式、到る

所に行はれ、此騒亂の世にありて、宗教に對する人民の切なる依賴心を滿足し、十分之を安心せしむるに足るものなく、皇帝崇拜の宗教を作らんとせる政府の計劃も、遂に行はれず。是に於て教理他に勝り、且博容主義に投合すべき基督教は、非常なる渇仰を受け、政府は、連りに迫害を加へたれども、反りて益信徒の數を增加し、終に公然ローマの國教とせらるゝに至りぬ。

カラカラは、自らパルチアに侵入せしが、マクリヌス[6]といふ者、帝を弑して自立し、パルチアと和しぬ。然るに此時、サッサン[7]朝の高祖アルデシル[8]起り、蒙古種なるパルチア王朝を仆し、所謂中期ペルシアを起して、大に國勢を振ひ、アルメニアを占領せり。其子シャプル[9]一世、シリアに攻入りしが、フィリップス帝は、之にアルメニア・メソポタミア全部を割讓せり。

6. Macrinus
7. Sassanidae
8. Ardeshir(原)=Artaxerxes(ギ)
9. Shapur(原)=Sapor

其後、ローマに内亂起り、フランク人[10]は、ガリアに、アラマン[11]人は、イタリアに、ゴート[12]人は、バルカン半島に亂入し、劫掠を恣にせり。シャプル、亦此機に乘じ、再びローマを攻め、ヴァレリアヌス[13]帝を虜にせり。是に於てローマは、四分五裂し、各地の軍隊、各其將を推して帝とす。其東部に據りし、パルミラ[14]を都とせるオデナッス[15]は、連りにシャプルと兵を交へしが、其寡婦ゼノビア[16]、亦女傑にして、セム種の一大國を興さんとし、ペルシアと和睦同盟したり。然るに二七〇年、アウレリウス[17]、帝となり、再びローマを一統して、中興の業をなし、ゼノビアも、亦虜にせらる。時にペルシアには、マニ[18]といふ者、摩尼教[19]を起し、遂に磔殺せられしが、之が爲に大擾亂を極めたりき。

10. Frank
11. Alaman=Aleman
12. Goth
13. Valerianus=Valerian(英)
14. Palmyra
15. Odenathus
16. Zenobia
17. Aurelius
18. Mani
19. Manichæism

第六章　ローマ帝政の末期　ローマの國情

二八四年、ディオクレチアヌス[1]、帝位に登り、大改革を行ひて、君主專制を完備し、又各地の行政を周到ならしめんと欲し、自ら帝國東部を統轄し、マクシムス[2]をして、イタリア及びアフリカを治めて、己と同じくアウグスツスと稱せしめ、又コンスタンチウス[3]をして、ガリア・ブリタニア・エスパニアを、ガレリウスをして、マケドニア・ギリシアを管領し、各ケーザルと稱せしめ、自ら總理となりて、時々是等諸分國主を會合し、帝國一般の利害に關する事項を合議せり。

然れども此制度は、永續せずして反りて內亂を釀せり。三二三年に至り、コンスタンチヌス[4]大帝、再び全國を一統し、自ら基督教に入りて、之を國教とし、三二五年、ニケーア[5]に、宗教大會議を開き、各派を調和して、一に歸せしめんとし、其決議に依り、アリウス派（基督は、唯神に類似せるを排斥し、アタナシウス派（基督は、神と同一なる性質を有すとの說）を以て、正教[8]と定む。帝又都をビザンチウム[9]に奠し、之をコンスタンチノポリス[10]と稱す。三三七年、帝死するや、行政的分國制を再興し、其三子及び二姪を分封したりしかは、內亂再び起り、且ペルシアと戰爭絕えず。ゲルマニは、帝國の衰弱に乘じ、四方より侵寇し、東部の主ヴァレンス[11]の如き西ゴート[12]と戰ひて陣亡せり。三九四年、テオドシウス[13]一世、復帝國を一統せしが、翌年其死するに先ち、長子アルカディウス[14]に東部を、次子ホノリウス[15]に西部を分與しければ、是に於て、ローマは、全く東西に分れぬ。

ローマは、其地勢の優勝、人民の勇猛堪忍、兵制規律の卓越、外交方針の一貫、殖民地の設置、文化・風俗・言語の輸入、並に被勝者の自治權を許し、概ね之を虐待せずして、漸次市民同等の權利を與へたる事等の理由により、終に西世界を包括せ、

1. Diocletianus＝Diocletian(英)
2. Maximus
3. Constantius
4. Constantinus＝Constantine(英)＝Konstantin(獨)
5. Nicæa(ラ)＝Nikaia(ギ)
6. Arius－Arianism
7. Athanasius－Athanasianism
8. Catholic
9. Byzantium(ラ)＝Byzantion(ギ)
10. Constantinopolis＝Constantinople(英)＝Konstantinopel(獨)＝Stambul(トルコ)
11. Valens
12. Visigoth
13. Theodosius
14. Arcadius
15. Honorius

る大國となりしなり。

ローマ人は、能くギリシアの文化を吸收し、之を四方に傳播せるの功ありと雖、文學・哲學・美術等は、唯其舊套を襲ぎしのみにて、一も之に及ぶこと能はざりしが、獨り法律の發達に於ては、優に他國民を凌駕せり。蓋しローマ人は、秩序の念深く、組織的の才に富めばなり。其成文律の嚆矢は、十二銅板法にして、紀元前四五一年に成れりといふ。人民は、早くより兵員會に最後の裁決を仰ぐの權利を有し、共和政時代には、市民權所有者の重刑は、必ず兵員會に於て決せり。十二銅板法の後、民會・兵員會等の決議、法律となりしもの、積みて山の如く、其間漸次錯雜撞着を生じければ、ケーザルは、舊法を參酌取捨して、一大法典を編せんとして果さず。降りて東ローマ帝ユスチニアヌスに至り、終に千古の模範たる大法典を完備せり。

ローマにては、親族政治の遺風長く存し、家長（パーテル・ファミリアス）の權力甚だ重く、其子弟を勘當し、若くは殺傷賣沽するを得（後稍之を制限せり）從ひて祖先を尊ぶの風盛にして、其像は、必ず最上室に安置し、之が祭祀を絕たざらんが爲に、家に男兒なき時は、養子を置くの制あり。又一族の關係親密にして、各人必ず其族名を冒す。例之カイウスは名にしてユリウスは氏、ケーザルは其族名なるが如し。門閥の起りしも、亦是等の關係に基きしなり。[17]

16. Pater familias
17. Nomen gentiles
(族＝gens)

第二部　中古史

第一編　中古初期

第一章　種族の遷移

ゲルマニ[1]は、歐洲中部及び西北部を占領せる大民族にして、ゴート・フランク・アラマン[2]・サクス[3]・ランゴバルド[4]・ブルグンド[5]・ヴァンダル・スエヴ[6]以下數十の種族に分れ、資性慓悍、戰鬪を好み、農牧を業とし、民主的政體を有せり。

三七五年、久しくヴォルガ[7]河邊に住せる、蒙古種の一派フン[8]が、他の蒙古種に迫られ、西轉してゲルマニの地に侵入するや、てゝに所謂種族の大遷徙起り、ゲルマニは潮の如く衰微せるローマ帝國領内に侵入せり。[9]

フンは、先づ黑海北岸の東ゴート[10]を征服し、進みてダキア[11]の西ゴート[12]に迫りき。此時西ゴートの一部は、ローマに請ひて、難をモエシア[13]に避けしが、忽ちローマの官吏と事を爭ひ、大擧して南侵し、大にローマ軍を破り、三七九年、テオドシウス東部の主となるに及び、和成りぬ。

四〇八年、西ゴート王アラリック[14]、其衆を率ゐて、イタリアを侵せり。西帝國の攝政スチリホ[15]、擊ちて之を退け、又ガリアの邊鎭を召還して、東ゴート一部の侵寇を防ぎ、終に之を鎭にしき。然れども之が爲に、ガリアの守備弛みしを以て、フランク人は、ガリアの北部に、アラマンは、今のドイツ西南に、各其驥足を伸べ、ブルグンドは、ワイクセル[16]河上流地より來りて、ライン上流の地を占領し、今のウンガルン[17]及び其附近に住せるヴァンダル・スエブ及びアラン[18]人蒙古種等は、フンの難を逃れ、遠くガリアを横りて、エスパニアに侵入せり。

四一〇年、アラリック、復イタリアに攻入り、ローマ府を陷れ

1. Germani
2. Sachsen(獨)＝Saxons(英)
3. Langobarden(獨)＝Lombards(英)
4. Burgunden(獨)＝Burgundians(英)
5. Vandalen(獨)
6. Sueven(獨)
7. Volga
8. Hun
9. Migration of Races(英)＝Völkerwanderung
10. Austrogoth
11. Dacia
12. Visigoth
13. Moesia
14. Alarich
15. Stilicho
16. Weichsel(獨)＝Vistula(獨)
17. Ungarn＝Hungary(英)
18. Alan

（スチリホは、もとヴァンダル人なり。）

しが、幾もなくして死し、アタウルフ[19]、其後を繼ぎ、西帝國とガリア鎮定を約して、此に移住し、遂にガリア南部及びエスパニアの大半を併有し、西ゴート王國を建設したり。是に於てスエブは、エスパニアの西北部に蹙まり、アランは、分裂雜婚して消滅し、ヴァンダルは、其王ガイゼリッヒ[20]に率ゐられて、アフリカに入り、ヴァンダル王國を建てぬ。此頃ブルグンドも、亦南下してガリア東南部に建國しき。

當時フランは、西北はバルチック[21]海より、南はドナウ河に至り、東はヴォルガ河に達する廣大の地を領有し、其大汗[22]（汗は蒙古酋長の稱號なり）アッチラ[23]は、東帝國を侵して、賠償・年金を徵し、更に今のドイツ地方を席卷して、ガリアに侵入せり。西ローマの宰相エーチウス[24]、西ゴート・ブルグンド・フランク等の諸種族と兵を合せ、四五一年、アッチラをトロア[25]市附近に破りければ、アッチラは、

*通常カタラウヌム（Catalaunum）原の戰という。

19. Athaulf
20. Gaiserich＝Genserich
21. Baltic Sea(英)＝Ostsee(獨)
22. Khan
23. Attila
24. Aetius
25. Troyes

轉じてイタリアに入り、既にして和を容れて師を班しぬ。後二年アッチラ死し、フンの大國忽ち瓦解して、諸族皆獨立せり。

四五五年、ヴァンダル王ガイゼリッヒ、ローマを侵し、掠奪を恣にして還りぬ。爾後二十年間、西帝國は紛擾を極めしが、ゲルマニ傭兵の將オドヴァケル[26]、皇帝を廢し、自立してイタリア王と稱し、西ローマ遂に亡ぶ。實に紀元四七六年なり。

フンの瓦解後、ウンガルン地方なる東ゴートは、其王テオドリッヒ[27]を奉じ、四九三年、イタリアに入り、オドヴァケルに勝ち、其地を占めぬ。又フランク一部の王アロドヴェッヒ[28]は、同族を一統して、全フランクの王となり、北方ガリアを併せ、アラマンを征服し、ブルグンドと同盟して、西ゴートを討ち、境をガロンヌ河まで擴め、都をパリシ[29]（今のパリ）に定め、漸く強大を致せり。

26. Odovaker＝Odoacer
27. Theodorich
28. Chlodovech＝Chlodwig＝Clovis(英,佛)
29. Parisi＝Paris
30. Jüten
31. Angeln

四四九年頃、歐洲西北海岸に住せるユート・アンゲル・サクス[30]皆ゲルマニ等の諸族、ブリタニア[31]英國に侵入して、ブリトン人[32]ケルト種に勝ち、七王國を建てたり。

第二章　東ローマとペルシア

西方に於て、種族遷移の大擾亂を極めし時に當り、東方ペルシアも、亦嚈噠[1]エフタルの侵寇に苦しみぬ。當時嚈噠は、東南印度より、西北アラル海附近に達し、四二三年以來、屢ペルシアを侵し、ペルシアも、一時歲幣を納れて、其禍を緩くせしが、第六世紀の初め、クバド[2]一世の時、また來侵し、互に干戈を交ふること十數年。ペルシアは、偶東ローマと事端を開きしを以て、宿怨を棄てゝ嚈噠と和し、更に鋒を西方に轉じぬ。

東ローマとペルシアとは、彊域相接し、開化の性質、全然相異なれる大國なれば、其衝突は、到底免れ難き處とす。當時東ローマにては、ユスチニアヌス[3]五二七・五六五帝、位に在り、名將ベリサリウス[4]、專らペルシア防禦の任に當り、勝敗未だ決せず。會、クバド死し、其子クスル[5]一世嗣ぎ、遂に東ローマと和しぬ。

クスルとユスチニアヌスとは、共に一代の明主なり。クスルは學術を奬勵し、內政を釐革して、ペルシアを中興し、ユスチニアヌスは、政敎の宿弊を一掃して、之が統一を圖り、五三四年、ヴァンダル王國を滅し、次ぎて東ゴート王國を平げて、イタリアの地を復し、更にエスパニアの南部を併せ、又處處に大建築を興し、有名なる大法典を編纂せしめ、五五五年、支那より蠶卵・桑種を移して、西洋養蠶業の基を開きぬ。

クスルは、東ローマが、日に隆盛に赴くを見、深く之を忌み、東ゴートと東西相應じて、之に當るの策を劃し、五四〇年、ア[6]

1. Ephthal
2. Kubad(原)=Kobad(ラ)
3. Justinianus(ラ)=Justinian(英)
4. Belisarius
5. Khusru Naushirwan(原)=Chosroes(ラ)
6. Antiochia
32. Briton

ンチオキアを陷れしが、五六二年、和成り、是より專ら嚈噠を圖りぬ。此頃匈奴の別種突厥[7]、漸く强大を致し、東は遼東灣より、西は裏海に至り、北は北氷洋より、南はパミル[8]高原に達する大版圖を領し、蓐りに嚈噠を蠶食せしかば、クスルは、其酋木杆可汗[9]（可汗は大君主の義）と結び、嚈噠を夾擊して、其西境を略せり。後幾もなくして嚈噠遂に突厥の服する所となる。

ユスチニアヌスは、カウカス山地方のアヴァール人[10]（蒙古種）を及びスラフ（蒙古種突厥族）ブルガル[11]ドナウ河流地に移し、之をして種諸族に當らしめしが、五六五年、帝死するや、アヴァール人、漸く跋扈して、帝國の患をなしき。此頃ランゴバルドも、亦イタリアに侵入し、五六八年、其大半を略し、此に國を建てたり。

此年東ローマは、突厥の佗鉢可汗と約して、ペルシア及びアヴァールを夾擊せんと謀り、爭亂復破裂せしが、會、クスル、部下の爲に殺され、其子クスル二世、東ローマの助に藉りて、王位に登り、戰雲漸く收まりて、兩國の和親再び成りぬ。後幾もなくして、クスル二世、東ローマの內亂に乘じて、大擧侵入し、小アジア・シリア・エジプトを略し、アヴァールと結び、東ローマの國都コンスタンチノポリスを脅せり。東帝ヘラクリウス[12]之を破り、却りてペルシアを侵し、クテシフォン城下、またローマ軍を見るに至れり。既にして和成り、互に侵地を還しゝが、兩國共に疲弊して、其勢復振はず。是より先、突厥も、亦分裂して、勢漸く微弱となりぬ。

東ローマとペルシアとは、共に宗派の爭亂に苦しみき。ニケーアの會議に於て、アリウス派の排斥せらるゝや、其僧侶等は、去りてゲルマニの間に弘敎し、之をして益ローマ人と相反目せしめぬ。東ローマ帝テオドシウス二世四〇八―四五〇の時、チ[13]

7. Turk
8. Pamir
9. Kakhan＝Khakan＝Kagan＝Kaan
10. Avar
11. Bulgar
12. Heraclius(ラ)＝Heraklios(ギ)

ネストリウス派は、唐に入りし景教なり。

13. Nestorius= Nestorians
14. Monophysis= Monophysites
15. Neoplatonic School
16. Mazdak= Mazdakism

ストリウス派・モノフィシス派の二大異端また起り、前者は、シリアを根據として、ペルシアに弘通し、ペルシア王を助けて、本國ローマの仇となり、後者は、專らエジプトに流行し、サラセンの寇するや、却りて之に内應せり。ユスチニアヌスは、是等諸派の調和に盡力し、又アテンなるプラトン派の哲學々校を閉ぢ、以て基督教の統一を期せしが、遂に成らざりき。ペルシアにても、ゾロアストル教幾多の分派、互に相軋り、殊に社會主義を唱ふるマヅダク教起り、紛亂益甚しかりき。

第三章　サラセン國の勃興

東ローマとペルシアと、互に存亡を賭して交戰せる間に、ムハーメッドといふ者出で、サラセン國大食國の基を開きぬ。ムハーメッドは、五七一年、アラビアのメッカに生れ、自ら上帝の天使にして、破邪の利劍を賦與せられたりと稱し、猶太・基督兩教を參酌して、イスラム教回教を創む。其教理簡單にして入り易く、殊に慓悍なるアラビア人の性質に投合せしが、メッカ市民の迫害甚しく、六二二年、出でゝメヂナに奔りしが、幾もなくして、メッカを陷れ、遂にアラビア全土を一統し、更に外邦に弘教せんとするに當り、六三二年、病みてメヂナに死せり。

ムハーメッドの死後、其繼承者は、皆ハリファ哈利發と稱し、政教の兩權を一身に保有し、能くムハーメッドの遺志を紹ぎ、コーラン回教聖書・朝貢・劍戟の三者を以て、外邦に臨み、先シリア・エジプトを席卷し、六三九年、ペルシア軍をチハウェンドに粉碎し、其國の大半を略しぬ。此時ペルシアは、援を唐に求めしが、太宗之に應ぜず、遂に滅亡の悲運に陷りぬ。

其後ハリファ繼嗣の爭ありしが、ムアヴィアー之を一統して、

1. Muhammed= Mohammed= Mahomed
2. Saracen
3. Mecca
4. Islam
5. Medina
6. Chalifah= Chalif(英)
7. Koran
8. Nehawend

回々教徒は、此逃走の年を以て紀元元年とす。

ハリファは、即ち繼承者の義なり。

オムミア朝を創め、都をダマスクス[11]に遷せり。爾後サラセンは[10]、東ローマの衰弱に乘じ、連年コンスタンチノポリスを攻撃し、未だ大に其志を伸ぶる能はざりしが、東は、中央アジアを平定し、又印度に攻入り、西は、アフリカの北岸を從へ、進みてエスパニアに入り、七一一年、西ゴート王國を滅し、七三二年、今のフランス[12]に侵入し、フランク王國の宮宰（マヨルドムス）カール・マルテル[13]の爲に破られて退きぬ。既にして國内大に亂れ、七五〇年、アブル・アッバス[14]、自立してアッバス朝を創め、尋ぎて都をバグダッド[15]に遷せり。時にオムミア家の一族アブド・ウル・ラーマン[16]、エスパニアに遁れ、七五六年、亦自立してハリファと稱し、コルドヴァ[17]に都せり。是に於てサラセン國東西に分れぬ。

東西のハリファは、盛に文學技藝を奬勵し、アラビア文化の光彩を放たしめしが、殊にアッバス朝にては、文學・哲學及び諸

9. Muaviah
10. Ommiyah=Ommeya
11. Damascus
12. Major Domus
13. Karl Martel
14. Abul Abbas
15. Bagdad
16. Abd-ur-Rahman
17. Cordova

種の理學、盛に研究せられ、ハルン・アル・ラシッド[18]（七六八～八〇九）の代は、サラセン國最盛の時代なりき。

サラセンの領地は、多く炎熱乾燥の地にあれども、到る處運河を通じ、水利に便せしを以て、農耕の業、頗る發達し、工業も、亦大に勃興して、織物其他の製造盛に行はれしが、商業は、其進歩更に見るべきものあり。陸上貿易は、隊商の法に依り、バグダッドを中心として、東西各地に往來し、海上貿易は、支那より傳來せる羅針盤を利用して、南洋諸島及び東方アジアに至り、又アフリカの沿岸を南航して、モザンビック[19]に達しぬ。

此の如く生産の勃興せるサラセンは、其國富非常に增殖し、政府の歲入莫大にして、兩ハリファ廷の華奢は、實に人目を驚せしが、其衰弱分裂も、亦此時に兆せり。蓋し回教の性質たる、痛く人心を威嚇し、思想の自由發達に便ならざるを以て、

18. Harun-al-Rashid
19. Mozambique

一時異彩を放てる文化も、永續進歩の力を有せず、其衰頽に赴くも、亦甚だ迅速なり、況んや、其廣大なる領土と、幾多の異人種とを統一するは、實に至難の業なるをや。

第四章　ギリシア皇帝とローマ法王

東ローマは、漸次イタリア風を失ひ、專らギリシアの言語・思想・感情を收容せしを以て、一に之をギリシア帝國と稱す。

ヘラクリウス帝死後、繼承者概ね庶弱にして、內憂外患交至り、國勢陵夷して、轉落日の觀を呈しき。七一七年、レオ三世[1]の位に卽くや、サラセンを擊退して、コンスタンチノポリスを重圍の中に救ひ、諸制度を改革して、財政・司法・軍務を整理し、大に帝國の面目を新にせしが、偶基督敎の改革を企て、頗る西方に於ける權威を失墜せり。抑基督敎は、一神敎にして、偶像の崇拜を容さず。然るに其純潔の風、年と共に去り、各地の敎會は、聖母・使徒・殉敎者等の繪畫肖像を以て充滿し、全然偶像崇拜の多神敎と異ならざりしが、東帝國には、之が破壞を企つる者起り、帝も亦最も熱心なる偶像破壞者[2]なりければ、偶像禁止の勅令は、七二六年、遂に其發布を見るに至れり。

初め基督敎信徒は、平等主義を取り、役僧を選擧して、敎會の事務を處理せしめしが、其四方に弘通するや、僧侶と信徒と、漸く懸隔を生じ、地方の僧侶は、市の僧正に隷し、僧正は、更に都府の大僧正に隷し、選擧其他宗敎上の大事は、僧侶會議[3]に於て之を決し、大僧正は、僧正を任命し、僧正は、下級の僧侶を任命するの制となりぬ。然るにローマの大僧正には、俊傑相續ぎて輩出し、漸次其勢力を高め、殊にグレゴリウス一世[4]は、ゲルマニ中に、アリウス派弘通して、ローマ人との調和、益、

1. Leo
2. Ikonoklast
3. Synod
4. Gregorius(ラ)=Gregory(英)

困難なるを憂ひ、宣教師を四方に派して、連りに正教を弘め、各地に教會支部を設けて、ローマの教會に隷屬せしめ、以て秩序整然たる中央集權制を組織せしかば、是よりローマ大僧正の權勢愈加り、遂に天堂の鍵を保管せる惟一の法王[5]の義として仰がるゝに至れり。法王の權勢既に斯の如くなるが故に、蠻民の感化と、寺院の收入とに、大關係を有する偶像禁止令は、ローマに於て、強硬なる反對を招きたり。

當時法王の位にありし者を、グレゴリウス二世とす。グレゴリウスは、啻に勅令を奉せざるのみならず、偶像破壞者を以て、外道なりと宣言せしが、幾もなくして法王・皇帝相次ぎて死し、コンスタンチヌス五世（七四一―七四五）新に帝位に登り、サラセンを破り、曩にアヴァールを西方に壓迫して、バルカン半島のスラフ種の諸族に覇たりしブルガルを擊ちて、之に勝ち、又

7. Pipin＝Pepin(英、佛)
8. Irene
9. Karl＝charles(英)
5. Pappas(ギ)＝Pappa(以)＝Pope(英)　＝Pape(佛)＝Papst(獨)
6. Ravenna

益偶像崇拜の禁を厲行せり。

時にイタリアにては、ランゴバルド王[6]、ラヴェンナ及び其近傍の皇帝領を奪ひ、進みてローマに迫りしが、法王は、フランクの宮宰[7]ピピンをして、フランクの王たらしめ、其助を得て、ランゴバルドを退けたり。爾後法王は、常にフランクと結托し、益其權勢を擴張し、皇帝は、復之を如何ともすること能はず。東西二教會、終に全く分離し、東は、ギリシア・カトリック教、西は、ローマ・カトリック教と稱せり。七八〇年、女帝[8]イレーネ、偶像禁止令を解きしが、一旦分離したる教會は、また合一すべからず。フランク王[9]カール、ルは、遂に西ローマ帝國を再興しぬ。

第二篇　中古本期

第一章　カール大帝の業

五一一年、フランク王フロドヴィヒ死し、爾來國勢駸々として進み、ブルグンド及びテューリング族を滅し、又バユヴァリ[1]今のバイエルンを附庸とせしが、其後王權漸く衰へて、宮宰、實權を握り、王は唯垂拱して成を仰ぐのみとなり、カール・マルテルの子、ピピンは、七五一年、ローマ法王ステファヌス[3]三世の助を得て、遂にフランクの王位に登り、カロリング朝を創め、法王の求めに應じて、ランゴバルドを征伏し、又ラヴェンナ地方を取り、之を法王に與へ、*法王領土の始めをなせり。

七六八年、ピピン死し、其子カール[5]嗣ぐ。カールは、蓋世の英傑なり。ランゴバルド・バユヴァリ・アヴァールを滅し、サクスを征伏し、ノルマンを擊退し、東北のスラフを討じ、又エスパニアを攻めて、エブロ[6]河北の地を奪ひ、其領土、西は、エブロ河より、東は、エルベ[7]河に及び、北は、オーデル[8]河より、南は、ナベル河以南に達せしが、八〇〇年、基督誕生の式日に、法王レオ三世は、カールに加ふるに、西ローマ皇帝の金冠を以てしたり。初めフロドヴェヒ、異教より直にカトリック教に入り、又領内のローマ人に許すに、フランク人と同等の權利を以てしたりき。是等の事實と、國力の强大とは、實に法王をして、フランクと結托せしめし所以にして、從來相衝突せるローマ・ゲルマニヤ兩分子は、今や漸く融和の道を得たり。

カール大帝は、鋭意其大版圖の統治を圖り、都をアーヘン[9]に奠め、領内を數多の縣に分ち、伯[10]をして之を分治せしめ、邊陲の縣にマルク伯[11]、帝室領地に、プファルツ伯[12]を置きて、之を治めしめ、毎年一回五月會[13]を開き、知事・僧侶・兵士等を會して、其助言を求め、又農工を保護し、學術を奬勵し、寺院を建て、學校を興し、其治績、征戰の勳烈に讓らざりき。

4. Carloringian Dynasty
5. Karl der Grosse(獨)＝Carolus Magnus(ラ)＝Charlemagne(英, 佛)
6. Ebro
7. Elbe
8. Oder

* Patrimonium Petri＝State of Church

1. Thüringer
2. Bajuvari(ラ)＝Bayern(獨)＝Bavarians(英)
3. Stephanus

9. Aachen＝Aix-la-Chapel(英,佛)
10. Gau
11. Graf＝Comes(ラ)＝Count(英)
12. Markgraf＝Marquis

數縣を兼治する地方官を公(ヒツオク)爵(Herzog＝Duxラ＝Duke英)といふ。

八一四年、帝死するや、嗣子ルードヴィヒ[15]、庶弱にして其器にあらず。帝領分割の事によりて、四子の間に不和を生じ、骨肉相鬩ぎ、八四三年、ヴェルダン[16]の條約を結び、長子ロタール[17]は、中部フランクを得て、帝號を稱し、第三子ルードヴィヒは、東部フランクを、第四子カール[18]は、西部フランクを得たりしが、ロタール死するや、中部フランク西北の地は、東西フランク兩王の分割する所となり、ロタールの子、ルードヴィヒ二世、特りイタリアのみを有して、依然帝號を稱しき。其後西フランク人、ノルマンの寇に苦しみ、東フランク王カールを迎へて王とし、東西再び合同せしが、カールは、ノルマンを禦ぐ能はざりしを以て、八八七年、東西フランク人、相共に之を廢し、東はアルヌルフを立て、西はノルマン防禦に功ありしパリ伯オド[20]を立てゝ王となしぬ。是に於てフランク全く東西に分れ、各、特異の發達をなし、以てドイツ・フランス兩國の基をなせり。

1. Norman＝Northman
2. Scandinavia
3. Sweden(英)＝Schweden(獨)＝Sverige(原)
4. Norway(英)＝Norwegen(獨)＝Norge(原)
5. Denmark(英)＝Dänemark(獨)＝Danmark(原)
13. Pfalzgraf＝Count Palatinayc(英)
14. Maifeld
15. Ludwig＝Louis(英, 佛)
16. Verdun
17. Lothar＝Lothaire(英, 佛)
18. Karl＝Charles(佛)シャール
19. Arnulf
20. Odo, Comte de Paris

此時既に次子ピピンは死せり。

第二章　ノルマンの跋扈

ノルマン[1]は、一にスカンヂナヴィア[2]人と稱し、今のスウェーデン[3]・ノルウェー[4]・デンマルク[5]の地に住し、勇敢不羈にして、頗る冒險を好みしが、其土地の多く不毛にして、獲る所尠きと、人口の繁殖せると、長子相續の習慣とは、遂に之を驅りて海賊たらしめ、常に輕舸[6]に乘じて、バルチック海及び北海の沿岸に出沒し、劫掠を恣にするに至らしめぬ。

第九世紀の頃より、ノルマン南侵の勢、フランク王國に及び、カール大帝死後、其患益甚しく、東部フランクにては、アルヌルフ王、終に之を擊攘したりと雖、西部フランクは、國内騷

6. Kappar
7. Rollo
8. Duc de Normandie
9. Wessex
10. Egbert＝Ecgbert
11. Danes
12. Alfred the Great＝Aelfred
13. Knud＝Canute
14. Edward＝Eadward
15. William＝Guillaume(佛) ギーヨーム

擾絶えざりしを以て、國王之が防禦に苦しみ、九一一年、ノルマンの將ロルロ[7]を、ノルマンデー[8]公に封じて、和を媾じたり。

ブリタニアにては、八二七年、ウェセックス[9]王エグベルト[10]、七王國を一統せしが、其頃よりノルマンの一派デーン[11]、數來侵し、國運漸く危殆に傾き、エグベルトの孫アルフレッド[12]大王、勇武にして能く國難を救ひ、海軍を創め、學問を奬勵し、法律を編纂せしめけれども、當時既に王國の半は、デーン人に占められ、一〇一六年に至り、クヌード[13]大王、終に英國を併呑し、デンマルク・ノルウェー及びスウェーデンの一部を兼領して、其威遠近に振ひぬ。然るに其後嗣勢を失ひ、一〇四二年、舊王統のエドワード[14]、位に復せしが、其死するや、ノルマンデー公ウィリアム[15]は、母系の姻親たるに藉り、ローマ法王の許可を得、一〇六六年、英國に渡り、ヘースティングス[16]の一戰に、之を平定して、

* Rossia(原)＝Russia(英)
21. Finnljandija(露)＝Finnland(英)
22. Rus
23. Rurik
24. Novgorod
25. Kiew
16. Hastings
17. Napoli(伊)＝Naples(英, 佛)＝Neapel(獨)＝Neapolis(ラ)
18. Benevento
19. Roberto Guiscard
20. Rugiero＝Roger(英)

王位に登り、ウィリアム一世と稱せり。

ノルマンは、第九世紀以來、地中海の沿岸及び其島嶼をも侵せり。當時イタリアの南部には、ナポリ[17]・ベネヴェント[18]等の公國あり。サラセン人も、亦シチリア・サルデニア及びイタリアの南端を領しけるが、ノルマンデーより來れる武士の將ロベルト・ギスカルド[19]は、第十一世紀の初め、悉く南部イタリアを征服し、又東帝國に寇して、大勝を得、其姪ルジエロ[20]に至り、終にシチリアよりサラセン人を驅逐して、ナポリ王國を創建し、學校を興し、農商工を奬勵し、頗る繁盛を致しき。

ノルマンは、又東方に於て、*ロシアの基を開きぬ。初めノルマンの一部、スウェーデンより、フィンリャンヂヤ[21]に移住するや、土民[22]之をルスと呼び、スラヴ人と連合して、之を退けしが、後ルスの一酋長リューリック[23]、スラヴの内訌に乘じて來侵し、八六

二年、ノヴゴロッド[24]に據り、傍近のスラヴ族を征服して、ロシア建國の基をなし、同時に他の一群は、キエヴ[25]に遷りて獨立し、南下して東帝國を侵しき。既にしてリューリックの嗣イゴリ[26]、キエヴを取り、又スラヴの諸族を從へ、更に進みて東帝國を侵し、有利なる通商條約を結ばしめき。

ノルマンは、又第九世紀以後、イスランド[27]・グリーンランド[28]及び北アメリカを發見して、之に殖民し、新世界發見の名譽を荷へり。

第三章　神聖ローマ皇帝と法王との交渉

東フランク王アルヌルフは、支離の國家を統一して、ドイツ國の基を固め、ノルマンを擊破して、其後患を絶ち、ウラル山地方より西遷して、終に今のウンガルンに止りし[1]マジャル人（実族厥）を征服し、又イタリアを討ちて、帝位に即きしが、後嗣暗弱にして、王業衰へ、カロリング王統も、終に斷絶に歸したりしかば、諸侯相會し、九一一年、フランケン[2]公コンラード[3]一世を推選して王となしき。王はマジャル[1]の侵寇を防ぎ、鋭意王權の擴張を圖り、其將に死せんとするや、平生相反目せるザクセン[4]公ハインリッヒ[5]一世（九一九―九三六）を推して、王位に即かしめぬ。

ハインリッヒ一世は、よく諸侯を駕御し、マジャルを討ち、デーン[6]を破り、ヴェンド（スラヴ種）を禦ぎ、大に國威を振起せり。其子オット[7]一世、亦英邁にして、諸侯の叛亂を鎮定し、其地を近親に與へて、以て尾大不掉の宿弊を改め、九五五年、大にマジャルを破りて、永く其患を絶ち、又イタリアを平げ、九六二年、法王ヨハンチス[8]十二世をして、己に帝冠を加へしめ、神聖ローマ[9]皇帝と稱しぬ。是よりドイツ王は、イタリア王を兼ね、且皇帝たるの資

1. Magyar
2. Franken
3. Konrad＝Conrad(英)
4. Sachsen
5. Heinrich＝Henry(英)
6. Wend
7. Otto＝Otho(英)
8. Johannes(ラ)＝John(英)＝Giovanni(以)
24. ノヴゴロッド
25. キエヴ
26. イゴリ
27. イスランド
28. グリーンランド
Igorj
Island＝Iceland
Greenland＝Grönland

9. Holy Roman Emperor(英)=Imperator Romanorum Sanctorum(ラ)=Heiliger Römischer Kaiser(獨)
10. Clemens

格を有する事となり、歴朝力をイタリアに用ゐ、本國に於ける王權の固定を顧みるに遑あらざりしかば、諸侯の權力增長して、獨國統一の業頗る衰へしかど、之が爲にイタリアの優等なる文化を輸入し、且ドイツ人中に、大統一の理想を注入して、其抱負を大ならしめ、遠く影響を今日に及せり。

オット一世の後、五十餘年にして、ザクセン王統絶え、フランケン公コンラード二世、一〇二四―一〇三九新に王位に登り、其子ハインリッヒ三世一〇三九―一〇五六王權を盛にし、諸侯を抑制せり。是より先、カール大帝の死後、法王、一時威權を振ひしが、有力なる保護者なきを以て、神聖なる法位も、徒にローマ附近の黨爭の具となり、廢立頻りに行はれ、法王の墮落腐敗、其極に達せり。ハインリッヒ乃ちイタリアに至り、位を爭へる三法王を廢し、ドイツの清僧[10]クレメンス二世を立てゝ法王とし、之をして已に帝冠を加へしめき。是より後、清淨なる法王、相次ぎて立ち、教會の宿弊を一掃し、其權力と抱負とを增長し、遂に皇帝と衝突するに至りぬ。蓋し皇帝と法王とは、共に大統一の理想を有し、皇帝は、宗教を以て之を成すの利器とし、法王も、亦有力なる後援を得て、以て世界の大導師たらんことを期せしが故に、兩者の間、常に輔車脣齒の關係ありしが、其結托全く成りて、威權漸く振ふや、互に他の願使に服するを屑とせず、遂に大衝突を惹起すに至りしなり。

グレゴリウス七世曰はく、法王は日の如く皇帝は月の如しと。

一〇七三年、グレゴリウス七世、法位に登る。法王、初めの名をヒルデブランドといひ、微賤より出づ。常に以爲へらく、世界一切の衆生をして、敬虔博愛ならしめ、爭鬪殺伐の跡を絶[11]たんと欲せば、宜しく法王を各國君主の上に置きて、感化教導の任に當らしめざるべからずと。其未だ法位に登らざる

頃より、一意此大理想を貫くことに盡瘁し、教會をして、帝權の干渉を脱せしめんと欲し、先づローマ本山の大改革を行ひ、僧侶の品行を矯正し、妻帶及び僧官賣買を嚴禁し、又僧官[12]封地の權を皇帝より奪はんとせり。

時にハインリッヒ三世の子、ハインリッヒ四世、獨王たりしが、即位の時、年甫めて六歲なりしかば、諸侯之を機として、大に跋扈せしが、ハインリッヒ長ずるに及び、悉く之を抑壓して、頗る王權を伸暢し、其法王の侵權に遇ふや、忽ち之と衝突を生じ、宗教會議を開きて、法王を廢し、法王も亦王を破門し、其臣民に服從の義務なきことを命じぬ。ドイツ諸侯は、ハインリッヒの抑壓を惡むこと久しきを以て、此機に乘じて、廢立を謀りしかば、ハインリッヒ孤掌鳴らし難く、一〇七七年、法王をカノッサ城に訪ひて、哀を請ひ、露頭跣足、雪中に立つこと三日にして、初めて其破門を免されき。既にしてドイツ人民、大に勤王の心を起し、王は、兵を率ゐて、再びイタリアに入り、グレゴリウス三世を法王とし、己に帝冠を加へしめたり。是に於て、グレゴリウス、サレルノに逃れ、一〇八五年、遂に憤死せり。

其後、皇帝と法王との爭益、甚しく、一一三八年、ホーヘンスタウフェン家の祖コンラード三世位に即くや、之を援助するギベリン黨と、之に反對するゲルフ黨と起り、互に相軋りしが、ゲルフは、常に法王の助を借りしを以て、終に法王黨と同意義となりぬ。コンラードの姪フリードリッヒ一世一一五二―一一九〇、バルバロッサ綽名、赤鬚の義伯父に次ぐ、義勇寛洪、中世武士の龜鑑たり、其部下亦大統一の理想の爲に戰ひ、大に高尚勇武の氣象を發揮せり。

フリードリッヒは、當時ドイツの半を領せる、ゲルフ黨の首

11. Hildebrand
12. Investitur
13. Canossa
14. Salerno
15. Hohenstaufen
16. Ghibellinen
17. Guelfen=Welfen
18. Friedrich Barbarossa=Frederick Barbarossa
19. Innocentius=Innocento(以)

領ザクセン公ハインリッヒを膺懲し、之を逐ひて、其封土を沒收し、又數、イタリアに行き、之を一統せんとせしが、遂に成らず。其子ハインリッヒ六世に至り、ナポリ王國を併せて、イタリア一統の業を完くせり。

一一九七年、ハインリッヒ死するや、ゲルフ・ギベリンの黨爭益激しく、常にドイツに二王を見るの奇態を呈せり。此時に當りて、法王インノケンチウス三世[19]（一一九八―一二一六）出で、グレゴリウス七世の志を貫かんと欲し、終に能く遠近を服從し、各國君主をして、皆其鼻息を窺はしめ、特にドイツの紛亂に乘じて、之に干渉し、己が後見せるハインリッヒ六世の子フリードリッヒ二世（一一一五―一二五〇）を立てゝ王とせしが、其死後、フリードリッヒと法王との爭激しく、法王は、別にドイツ王を立てゝ之に抗しぬ。而してフリードリッヒの子コンラード四世は、全くドイツを放擲して、ナポリ王國維持に汲々とし、其子コンラヂン[20]殺さるゝに及び、ホーヘンスタウフェン家、遂に斷絕せり。

20. Konradin
21. Bonifacius＝Bonifacio(以)
22. Philippe

爾後ドイツは、紛擾益甚しく、一二五六年より、一二七三年まで、全く皇帝なく、諸侯互に相攻め、國力疲弊し、法王も亦權力衰へ、ボニファキウス八世（一二九四―一三〇三）[21]其衰勢を挽回せんとせしが、佛王フィリップ四世[22]の爲に辱められて憤死し、是よりグレゴリウス七世の遺志を繼ぐ者、久しく跡を絕てり。

第四章　英國憲法の發達、佛國王權の伸暢、英佛二國の交渉

英王ウィリアム一世（一〇六六―一〇八七）は、英國に於て、廣大なる地を王領とし、殘部にノルマンの貴族を分封し、習慣法制を變更し、佛語を以て朝廷及び官府の用語となしたり。王は尙佛國の

大諸侯として、ノルマンヂー及びブレターニュを領せしが、其後プランタジェット[2]王統の祖ヘンリー二世[3]（一一五四―一一八九）の位に登るや、父母の遺産と、王后の相續とにより、更に佛國に於ける領土を加へて、遙に佛の王領を凌駕し、軍事を整備し、司法制度を改革し、又大に諸侯の權力を削りて、王權を伸暢し、其子リチャード[4]一世に傳へたり。

佛國にては、九八七年、ユーグ・カペー[5]、王となりしより、王位永く其統に歸せしが、其初め諸侯跋扈して、王權振はざりしを以て、歴朝鋭意之が伸暢を圖り、フィリップ二世アウギュスト[6]（一一八〇―一二二三）に至り、大に王室の勢力を強め、市府に特權を與へて、其發達を奬勵し、以て諸侯を抑壓せり。王又十字軍を起し、英王リチャード一世と、共に征途に上り、事を以て相爭ひ、未だエルサレムに達せずして還りしが、リチャードが、歸路ドイツに抑留せられて、其弟ジョン[7]の位を僭するに乘じ、悉く佛國内の英領を奪ひぬ。既にしてリチャード免されて歸國し、佛國と兵を交ふるや、法王インノケンチウス三世、之を和解し、フィリップは、其占領地を英國に還附せり。既にしてリチャード死し、ジョン（一一九九―一二一六）立ち、暗弱暴虐にして、失政多く、大に民心を失ひければ、フィリップは、遂に佛國に於ける英領の大半を奪ひき。

ジョンは、又インノケンチウス三世と爭ひて破門せられ、遂に哀を乞ひて、英國全土を法王に獻じ、其封地として之を領し、舊例に率由せず、數、重稅を課せしを以て、一二一五年、諸侯僧侶等王に迫り、舊慣に基ける大憲章[8]に署名せしめき。是に於て英國憲法の基礎立ち、立憲制度の端を開けり。其後、王が大憲章を蹂躙せんとするに及び、諸侯相謀り、佛の太子ルイを迎へんとせしが、會、ジョン死し、人民も亦佛に從ふを喜

1. Bretagne
2. Plantagenet
3. Henry
4. Richard
5. Hughes Capet
6. Philippe Auguste
7. John
8. Magna Charta Libertarum
9. Dover

ばず、ジョンの幼子ヘンリー三世一二一六を擁立し、一二一六年、佛の海軍を[9]ドーヴァー海峽に殲滅して、其勇圖を挫けり。

ヘンリー三世、年漸く長じ、亦無道なりしかば、[10]シモン・ド・モントフォルド、大に民權擴張を唱へ、王をして貴族・僧侶の外、州・市の代議士を召集して、[11]議會を開かしめ、英國[12]下院の濫觴をなせり。爾後エドワード[13]一世一二七二・同一三〇七・同二世一三〇七・同三世一三二七・一三二七の代に於て、英國の君民同治制、漸く固定せり。

佛國にては、賢君相次ぎ、人民と結托して、貴族を抑へ、以て國權を擴張しければ、人民早くより勤王の志厚く、王權、終に非常に發達せり。之に反して、英國にては、暗弱なる君主、暴虐を逞しくし、且其國威を失墜せしより、人民は、貴族と結托して、權利の保障を得んとし、其結果、佛國の如く、王權の強大を致さず、獨國の如く、諸侯の跋扈を招かず、人民は、王と貴族と

10. Simon de Montford
11. Parliament
12. House of Commons
13. Edward
14. Louis＝Lewis(佛)＝Ludwig(獨)

の中間に立ちて、能く憲法政治の利を占むることを得たり。

佛王[14]ルイ九世一二二七・一二七〇は、智德兼備の明君にして、大に王權を擴張し、學問美術を奬勵し、佛國をして長足の進歩をなさしめ、又數十字軍を起し、南部に瀰蔓せる異端アルビジョワ派を鎭壓し、其根據地[16]ツールース伯領を王領とせしが、法王の爲に、其權威を侵されしことなかりき。フィリップ四世一二八五・一三一四も、亦大に王權の伸暢を計り、僧侶課稅の事に關して、法王ボニファキウス八世と紛爭を惹起し、一三〇二年、貴族・僧侶及び平民の代議士を召集し、其贊助を得て、以て法王に抗しき。是佛國三民會[17]の嚆矢なり。王は、次ぎて佛國の僧クレメンス五世を立てゝ法王とし、佛のアヴィニオン[18]に居らしめ、之をしてテムプラル宗教騎士團體を解散せしめ、其領土を沒收せり。爾後六十餘年間、法王は、唯佛王の顧使に從ひぬ。[19]

パリ大學の種子なるソルボンヌ學校は、此時に起る。

15. Albigeois(佛)＝Albigenses(英)
16. Toulouse
17. Etats Généreaux＝States General(英)
18. Avignon

一三二八年、フィリップ四世の男系絶え、姪フィリップ六世、一三二八・一三五〇王位に登る。是より先、英王エドワード三世、アイルランド・ウェールズ・スコットランドを併せ、全國を一統して、其上に君臨せしが、其母のフィリップ四世の女なるを口實とし、佛の王位を要求せり。然るに佛國は、動もすれば、フランドル[20]（今のベルギー及び之に接する佛國境界地）を併せて、同地製絨の原料たる羊毛を供給し、以て英國羊毛の輸入を壓せんとし、英國と利害を異にせり。加之英王を戴きて、其主と仰ぐは、國民的感情の容さゞる處なりければ、茲に所謂英佛百年戰爭一三三九・一四五三の端を開きぬ。

一三四〇年、英國及びフランドルの聯合艦隊は、スライス（オランダ西南岸の小市）附近に於て、大に佛の海軍を破り、其後、英軍は[21]クレシー[22]一三四六・ポアチエー[23]一三五六等に大勝を得て、佛王ジャン[24]二世を虜にしたり。一三六〇年、ジャンは、佛の西半を英に割讓して和を修めしが、其子シャール[25]五世一三六四・一三八〇の時、英の威力稍衰へ、スコットランドは、先に、ロバート・ブリュース[26]の力に依りて獨立し、佛國なる英領の民も、其主に服せざりしかば、シャール、終に是等の地を恢復し、且海軍を派して、英のウィンチェスター[27]・ポーツマス[28]等を燒けり。其子シャール六世一三八〇・一四二二幼弱にして、貴族等また跋扈し、就中ブルゴーニュ[29]公は、佛の東北廣大の地を占め、相續によりて、フランドルをも併せ、其權勢王室を凌ぎぬ。

英國にては、ランカスター[30]公ヘンリー四世、エドワード三世の子リチャード二世を廢して自立し、其子ヘンリー五世一四一三・一四二二は、民心を外に轉せんと欲し、ブルゴーニュ公ジャンの誘導に依りて、佛に攻入り、一四一五年、アジンクール[31]に、佛軍を粉碎し、終に佛の過半を陷れぬ。時にシャール七世、尚太子たり。僅に南方の小部を保ち、國運旦夕に迫りしが、會、農家の一少

19. Milites Templarii(ラ)＝Knights Templar(英)＝Templiers(佛)＝Tempelherrn(獨)
20. Flandres
21. Sluys
22. Crécy
23. Poitiers
24. Jean＝John(英)
25. Charles
26. Robert Bruce
27. Winchester
28. Portsmouth
29. Bourgogne＝Burgundy(英)＝Burgund(獨)
30. Lancaster
31. Azincourt
32. Jeanne Darc
33. Jacques Cœur
34. Calais

女ジャン・ダルク[32]、義を唱へて、人心を鼓舞し、毛皮商人ジャック・クール[33]、亦軍資を王に獻せしかば、國民奮起、遂に英人を國外に驅逐し、カレー[34]の外、悉く其地を恢復し、百年戰爭、終を告げぬ。

百年戰爭後、ヨーク[35]公リチャード、英の王位を覬覦し、一四五五年、兵を擧げ、三十年の間、國内兩黨に分れ、戰爭止まず。紅白の薔薇を以て、各其表章となしければ、之を薔薇戰爭[36]と名づく。ヨーク家、終に勝ちて王位に登りしが、相傳ふること三世にして、ランカスター家の一支族チューダル家の始祖ヘンリ七世[37]一四八五―一五〇九ヨークに勝ちて即位せり。

ヨーク黨は白薔薇をランカスター黨は赤薔薇を記章とす

35. York
36. War of Roses
37. Tudor

第五章　十字軍　東方諸國の盛衰

十字軍は、實に東西異人種の衝突なり。回教的アラビア開化の擴張に對する、基督教的ローマ開化の反動なり。歐洲の天地に充塞欝屈せる、尚武好鬪の精神の激發なり。歐洲人士が、基督教に對する信仰熱情の迸發なり。法王の權力强大にして、宇内統一の意氣盛なるの結果なり。而して十字軍直接の目的は、聖地を回教徒の手より恢復せんとするにありき。

初めサラセンの、エスパニア半島を略するや、西ゴート人の一部は、北方の山中に據り、遂に再び崛起して、アスツリア[1]ス・カステラ[2]・アラゴン[3]・レオン[4]・ナヴァーラ[5]等の基督教國を起し、一〇三一年、コルドヴァなるオムミア家斷絶して、其國の分裂せるに乘じ、漸次北部を蠶食し、第十三世紀の初めには、サラセンの領する處、僅にグラナダ[6]一國に過ぎざりき。

バグダッドのアッバス朝には、第九世紀の初めより、内訌頻りに起り、小邦群起して、また統一すべからず。第十一世紀の初め、突厥族のセルジュック[7]・トルコ、ペルシアの北部に起り、終に

1. Asturias
2. Castella
3. Aragon
4. Leon
5. Navarra

ナヴァーラは、カール大帝のマルク。

西アジア一面を蠶食し、都をイスパハン[8]に置き、君主之君主[9]と稱し、バクダッドのハリファをして、僅に其教權を維持せしめしが、同世紀の終に至り、其國亦數多の小國に分裂せり。

是より先、基督教徒は、靈場巡拜を以て、無上の功德なりと信じ、エルサレムなる基督の墳塋に詣づる者、陸續斷えず。サラセン人のエルサレムを領するや、是等巡拜者の爲に、利を獲ること多かりしを以て、敢て之を虐遇せざりしが、セルジュック・トルコの同地を占領するに及び、基督教徒を見ること蛇蝎の如く、虐遇酷待到らざる所なかりき。會佛國の僧ピエール[10]、其慘狀を目擊して歸り、感慨禁ずる能はず、熱心聖地恢復の擧を唱導し、以て人心を激動せり。此時に當りて、ギリシア皇帝も、亦セルジュック・トルコの猖獗に苦しみ、遙に書を寄せて、援を法王に請へりしかば、法王ウルバヌス二世[11]は、一〇

6. Granada
7. Seldjuk Turk
8. Ispahan
9. Emir al Omra

九五年、大に諸國の僧侶貴族及び平民を、佛國のクレルモン[12]に會し、聖塋恢復の事を勸奬せり。衆皆感激し、奮ひて十字軍[13]に加はらんことを請ひ、翌年八月を以て、上征の期と定めたり。

然るに信仰の熱情と、劫掠の慾心とに驅られて、狂奔烏集せる輩は、期未だ至らざるに、ピエールを擁して出發し、小アジアに入りトルコ人の爲に要擊せられて、空しく白骨をニケーアの原頭に曝しぬ。これを第一・十字軍の先驅とす。

翌年ロートリンゲン[14]伯ジョッフロア[15]、第一・十字軍一〇九六、一〇九九を率ゐて出發し、ギリシア帝國を經て、小アジアに入り、進みてアンチオキアを陷れ、終にエルサレム（コンスタンチノープル）に達し、奮鬪數十日、始めて之を占領しき。是に於てジョッフロア、推選せられて聖地守護職となり、弟バルドウィン[16]に至り、エルサレム王となりぬ。

10. Pierre
11. Urbanus
12. Clermont
13. Crusade(英)=Croisade(佛)=Kreuzzug(獨)
14. Lothringen
15. Geoffroy(佛)de Bouillon=Gottfried(獨)=Godfrey(英)
16. Baldwin=Balduin(獨)
17. Sala-ed-din=Saladin

其後エルサレム王國は、又セルジュック・トルコの侵寇に遇ひ、殆ど危急に迫りしかば、ドイツ王コンラード三世、佛王ルイ七世と共に難に赴きしが、コンラード病死し、佛軍亦利を失ひて空しく歸國せり。これを第二十字軍一一四七とす。

次ぎてサラ・エド・ヂン[17]といふ者、エジプトに起り、ナグリス河以西の地を併呑し、一一八七年、遂にエルサレム王國を滅し、聖地再び回教徒の手に歸しぬ。此報一たび西歐に達するや、民心また奮ひ、神聖ローマ皇帝フリードリッヒ一世は、佛王フィリップ二世、英王リチャード一世と共に、遠征の途に上れり。然るに皇帝は、小アジアに溺死し、英佛二王は、隙を生じて軍紀整はず、第三十字軍一一八九―一一九二亦遂に功を收むる能はざりき。

第四十字軍一二〇二―一二〇四は、法王インノケンチウス三世の命により、佛・伊・獨諸侯の出征せしものなりしが、諸軍聖地に赴かず、ギリシア帝國の内亂に干渉し、之を顚覆してロマニア帝國[18]を建設し、遂に亦當初の目的を達せずして止みぬ。

第五十字軍一二一八―一二二九は、神聖ローマ皇帝フリードリッヒ二世の出征にして、一たびエルサレムを恢復したれども、後回教を奉ずる花剌子模[19]人の、來襲するに及びて、遂に亡びぬ。第六・第七の十字軍は、佛王ルイ九世の、エジプト及びチュニス[20]に向ひて起しし、ものなるが、皆効なくして終り、一二九一年、基督教徒は、全くアジアに根據を失ひ、復十字軍の擧なかりき。

18. Romania
19. Charesm
20. Tunis

第六章　中古西歐の情形

西ローマの顚覆するや、基督教僧侶の力によりて、能く其文化の全滅を防ぎ、漸次蠻民を教化せしかば、西歐の精神界は、終に全く其支配する所となり、人々皆宗教に熱中し、深く

迷信の淵に沈みぬ。是に於て所謂[1]暗黑時代となり、文學・美術、一として宗教の臭味を脫すること能はず。彫刻・繪畫は、拙劣を極めて、美を發揮するに足るものなく、建築は、陰暗鬱幽なる[2]ローマ式行はれ、柱太く、天井低く、窓小にして、上部圓穹を爲せり。當時疑獄の決し難きあれば、宗教の儀式を經て、決鬪及び其他の運命的決斷を取る事行はれ、之を[3]神盟裁判といひき。又[4]神和と稱し、期日を定めて、爭鬪を嚴禁する事あり、犯す者は、教會の責罰を被る。凡教會の懲罰の、最も重きを[5]破門とし、一たび此極刑に處せらるゝ時は、王侯の尊きも、威嚴忽ち地に墜ちて、社會の擯斥を免るゝ能はざりき。世態此の如くなれば、各所の[6]律院は、孰れも信者の喜捨によりて、富裕を極め、數多の僧侶、其内に在りて、看經侍神に生涯を送れり。

十字軍は、一時宗教の熱心を煽颺せしが、冒險を好むの氣

1. Dark age
2. Romanesque Style(英)=Romanische Styl(獨)
3. Dei Judicia(ラ)=Ordeal(英)
4. Treuga Dei(ラ)=Pax Dei(ラ)=Gottesfriede(獨)=Trève de Dieu(佛)=Divine truce(英)

爭鬪を禁せる期日は、毎水曜日の晩より、月曜日の朝に至るまで、及び祭日其外教會に於て定めたる日期なり。

5. Excommunication
6. Cloister(英)=Monastery(英)=Kloster(獨)
7. Gothic Style(英)=Gothische Styl(獨)
8. Feudal System
9. Vassali
10. Senior

風、亦之と共に振興し、第十三世紀の頃より、漸次風をなせる[7]ゴート式の建築は、柱細く、天井高く、窓また大にして、上穹尖端をなし、高遠を望むの精神、自ら其中に存せり。彫刻も、亦大に進歩して、優美雅趣、昔日の比にあらざれども、敬神の情、偶像の容貌態度に溢れ、自ら活氣變化に乏しかりき。

中古西歐を通じて、[8]封建制度行はれぬ。初めフランク國の隆盛に赴くや、貧者は、連年の戰爭に、其生活困難に陷り、地方の豪族に賴りて、[9]從臣となり、其土地を借り、其眷養を仰ぎ、戰時、[10]主人に從ひて出陣し、進退指揮を奉じ、以て平生の恩顧に酬いしが、此風漸く盛に行はれ、王も、亦若干の從臣を蓄へて、其護衛となし、終に、主從の關係は、父より子に傳ふるに至りぬ。カール大帝死後、其國の亂るゝや、各地の侯伯は、各其地に據り、多數の從臣を養ひて、自ら强くし、高僧等も、其寺院に附

屬せる地に據りて、亦從臣を蓄へ、所謂宗教的諸侯となりき。是等諸侯は、表面上、皆帝王より封土を受け、或は其戰役に從ひ、或は其大禮に參し、又時に獻金を爲す等の義務ありき。

封建制に伴ひて、騎士[11]といふ者起り、敬神忠君を經とし、猛勇任俠を緯とし、特に婦人を尊敬保護するを以て其任とす。凡騎士たらんと欲する者は、幼時より、王侯貴婦人の扈從となりて、禮節を習ひ、次きて騎士の從士となり、武技を學び、武士道を究め、然る後嚴重なる儀式を經るを要するなり。

中古僧侶は、幾多の團體[12]を作り、各一種の主義を取り、教會の爲に盡力しき。聖アウグスチヌス團體[13]、聖ドミニクス團體[14]等是なり。然るに十字軍の時代に於て、之に倣へる宗教的騎士團體[15]起り、武力を以て、宗教の用に供し、半僧半兵の團員は、皆嚴格なる規律に服せり。而して其最有名なるは、テンプラル團體[16]・ヨハニテー團體[17]・ドイツ團體[18]等にして、前二者は聖地の保護を目的とし、ドイツ團體は、ドイツの東北にありて、異教のスラヴ種族と戰ふを以て、其務とせしき。

封建制は、農業を以て、國本とすれども、中古、農民甚しく抑壓せられ、氣力全く消耗し、諸侯、各堅牢なる城中に住し、道路の險惡、反りて防禦に便なるを以て、交通機關の完備を希はず。甚しきに至りては、小諸侯、從士を率ゐて、旅客を道に要し、通行稅と稱して、之を掠むることありき。是に於て、是等盜賊[19]騎士に對して、市府の聯合起りぬ。

市府の商民は、有爲活潑の氣象に富み、屢危險を冒して、鉅利を獲、其漸く富裕に赴くや、金を領主に獻じて、市府の自治制其他の特權を許され、且金力を以て、兵を雇ひ、其權利を保護擴張することを勉めしが、十字軍の起るや、諸侯多く出師

封土をFeudumといふ。Feudal Systemの語これより出づ。

11. Knight＝Ritter
12. Orden
13. Sanctus Augustinus
14. St. Dominicus
15. Order of Knights＝Geistliche Ritterorden
16. Milites templarii(ラ)＝Knights templar(英).
17. Johanitae(ラ)＝Knights of St. John(英)＝Johanniter(獨)
18. Teutonic Knights(英)＝Deutscher Orden
19. Robber Knights＝Raubritter
20. Venezia(以)＝Venice(英, 佛)＝Venedig(獨)
21. Milano(以)＝Milan(英, 佛)＝Mailand(獨)

の費途に窮せるを以て、市民は、益、其權利を張り、土地を買ふの好機に會へり。加之十字軍の爲に、新需要盛に起りて、商業大に伸暢しければ、市府は益、繁盛に赴きぬ。

イタリアには、ローマ時代の舊市制、尙殘存せると、其地位地中海の中心にあるとに由り、其市は、他に先んじて隆盛に赴き、北方には、[20]ヴェネチア・ミラノ・ジェノヴァ、[21]中部には、[22]フィレンゼ・[23]ピサ等勃興し、其殷富、時人をして驚嘆せしめき。次ぎて英・佛・[24]獨・西等の諸國に於ても、市府漸く發達し、就中獨國には、北にハンザ聯合、南に、シュワーベン聯合、ライン地方に、ライン聯合等[25]起り、各、數十市[26]を包括し、其勢の盛大なる、王侯も、[27]亦其歡心を失はんことを恐るゝに至りぬ。

1. Bulgaria＝Bolgaria(露)
2. Symeon
3. Tsarj(原)＝Czar(英)＝Zar(獨)＝Caesar(ラ)
4. Polowtui＝Kiptschak＝Kumani
5. Chasar
6. ブルガルは蒙古種のフィン族なりとの異說あり。

20. Genova(以)＝Genoa(英)(佛)＝Genua(獨)＝Gênes(佛)
21. Firenze(以)＝Florence(英)(佛)＝Florenz(獨)
22. Pisa
23. Hansa＝Hansabund＝Hanseatic League(英)
24. Schwabischer Städtebund
25. Rheinischer Städtebund
26. 27.

八八六年、レオ六世、ギリシア帝となり、行政部の獨立を奪ひしより、爾後暗弱なる皇帝の出づる毎に、行政の紊亂を來し、國勢益、陵夷せり。當時ブルガルは、基督教に入り、部下のスラヴ諸族と、融和雜婚して、終に今のブルガリア[1]人となりしが、其汗[2]シメオン（八八八―九二七）英邁にして大志を懷き、ギリシア帝國の衰弱に乘じて、テッサリア・エピルスを略し、自らツァリ[3]（ケーザルの轉訛）と稱しき。然れども其死後ブルガリアの國勢萎縮して振はず、終に東西二國に分裂したり。

此頃カウカス地方には[4]ポロヴツィ欽察あり、ロシアの東南には、[5]カザルあり、其北には、ブルガル（ブルガン半嶋なるブルガルは、之より分れ移住せるなり。）あり、カザルの西には、[6]ペッチェネギ・マジャルあり。是等皆蒙古種の突厥族に屬せり。既にしてマジャルは、ペッチェネギに迫られ、漸次西遷して、第十世紀の中葉には、或はドイツを侵し、或はブルガリ

ア及びギリシア帝國に寇しければ、ギリシア帝國は、ペッチェチギと同盟して、之を擊退し、獨帝オット一世、亦之に大打擊を加へて、其勢を挫きぬ。是に於てマジャルは、ウンガルンに退縮せり。

露主[7]イゴリの子[8]スヴャトスラヴは、ポロヴツィと共にカザルを攻めて之を滅し、其西部を取り、又ペッチェチギと同盟して、東ブルガリアを併呑せしが、ギリシア派遣兵の爲に破られ、終に之を[9]ヨハンネス帝に献じたり。九八八年、スヴャトスラヴの子[10]ヴラヂミル一世の帝國を侵すや、コンスタンチヌス八世帝、之に妹[11]アンナを嫁して和睦し、基督教に入らしめぬ。時に西ブルガリアの[12]ツァリサムエル、九七七―一〇一五亦帝國を侵し、マケドニア・テッサリア・エピルスを席卷して、ペロポンネスに入りしが、幾もなくして大敗して歸國し、其姪ヴラヂスラヴに

11. Anna
12. Samuel
13. Wladislaw
14. Kroatia
15. Serbia

6. Petschenegi＝Kangli
7. Igorj
8. Swjatoslaw
9. Zohannes＝Zohn(英)
10. Wladimir

殺され、ヴラヂスラヴ遂に自立せり。時に帝國軍勝に乘じて、其本國を攻め、ヴラヂスラヴを殺し、全くブルガリアを平定し、[14]クロアチア・[15]セルビアの諸酋長、亦内附して、帝國の勢威、一時大に振へり。

然るに其後國勢復傾き、ペッチェチギは、北境を侵し、セルジュク・トルコは、其東部を蠶食し、ノルマン人は、南イタリアを併呑して、數帝國の西邊に寇し、領土日に蹙まりぬ。加之當時續々帝國を通過せる十字軍は、其獲得せる地を帝國に献ずることを約したれども、其兵士暴戾にして、將帥亦野心勃々たりければ、皇帝は、反りて大に之を恐れ、常に惴々焉として安ずる所なかりき。ロシアにも、ヴラヂミルの死後、内亂起りしが、其子[16]ヤロスラーヴ、一〇三四―一〇五四之を平定し、終にペッチェチギを西方に驅逐し、聖書を露語に譯せしめ、ギリシアの名工を招聘し

ペッチェチギは其後マジャルに屈服せられぬ。

て、多く寺院を建設し、以て國都キエヴ[17]を華麗にし、又刑法を編纂し、商業を奬勵し、大にロシアの文明を發揮したり。當時ギリシア人は、露國を恐るゝこと虎狼の如くなりしが、ヤロスラーヴの侵寇に遇ふや、辛うじて之を擊退することを得たり。

マヌエル一世帝[18]（一一四三―一一八〇）勇猛にして、セルビアを平定し、ノルマンのナポリ王國と戰ひ、又ヴェネチアと兵を交へしが、其海軍に敵し難く、償金を約して和しぬ。一一八二年、ギリシアの內亂に際し、暴民、イタリア人の在留せる者を虐殺しければ、ナポリ王國は、報復の師を起し、深く帝國內に侵入して、劫掠を恣にせしが、終に敗れ歸りぬ。

イサーク二世帝[19]（一一八五―一一九五）の時、ブリガリア復獨立せり。帝の弟アレクシウス三世[20]、位を簒しければ、イサークの子アレクシウス、西歐に走りて救を求めき。會、第四十字軍、出征の途にあり、ヴェネチアの大統領[21]エンリコ・ダンドロ、アレクシウス皇子に說き、法王の敎權を認め、且多額の報酬を與ふることを約せしめ、十字軍をして、直にギリシア帝國を攻めしめ、一二〇三年、コンスタンチノポリスを陷れ、アレクシウス皇子を帝とせり。然るに帝は、亂後國庫欠乏せると、ギリシア人の宗敎熱心盛なるとにより、其約を履行せざりしを以て、一二〇四年、十字軍の將士等、再び國都を陷れて、暴戾を極め、終にロマニアと稱する帝國を建て、封建制を布き、フランドル伯バルドウィン[22]を皇帝とし、帝國北部及び小アジア西部[23]を領せしめ、其下にテッサロニケ王國[24]、アテン公國[25]、ナクソス侯國[26]、アケーア侯國以下の小國を設けて、皇帝に隸屬せしめ、ヴェネチアは、西岸の諸嶋・ギリシアの南端及びクレータ嶋[27]を得たり。

16. Jaroslaw
17. Kiew
18. Manuel
19. Isaac
20. Alexius
21. Doge
22. Enrico Dandolo
23. Romania
24. Baldwin＝Balduin
25. Thessalonike
26. Naxos
27. Achæa
28. Creta
28. Trapezus＝Trebizond＝Trapezunt

然れども、ロマニアは、内は統一鞏固ならず、外にはギリシア帝室の餘類、尚小アジア西部にニケーア帝國を、同北部にトラペズス帝國を建て、エピルスには、デスポテス[28]專主と稱する者あり。又ブルガリア及びセルジュック・トルコのコニア[29]は、此騷亂に乘じて、大に邊境を擴め、帝國の民も、亦新主を怨みて、到底之に心服するの望なかりき。[30]

第八章　蒙古の侵寇

黑龍江水源地に蒙古の一部落あり、黃金族と稱す。其酋長鐵木眞[1]（一一五四、元太祖一二二七）英邁にして大略あり。兵を用ふる神の如く、乃蠻[2]以下弓壁沙漠地方の諸部落を征服し、一二〇六年、其大集會[3]に於て、全蒙古主に推され成吉思汗[4]（極力强大の君）と稱し、西夏を屈し、金を蠶食し、畏兀兒[5]（回鶻）を下し、大舉して西域に向ひぬ。

初め遼（契丹）の金に滅せらるゝや、其遺族、天山の西北に建國して、西遼[6]（又、合剌乞塔、又黑契丹）と稱し、荐りにセルジュック・トルコの地を蠶食し、其境域アラル湖邊に達しき。既にして其業衰へ、回鶻・花剌子模等獨立せり。花剌子模[7]即ち回々は、もと裏海附近の地なり。其主ムハーメッド、勇猛にして、今のペルシア・トルキスタン・アフガニスタン地方の大半を併呑し、サマルカンド[8]に都し、其境、裏海より印度河に到れり。然るにバクダッドのハリフを攻めて勝たず、頻りに再擧を計るに當り、會、蒙古の西侵に遭ひ、乃ち西遼と同盟して、之に備へぬ。

鐵木眞は、先つ其將哲伯[9]を遣し、西遼を討ちて、其主屈出律[10]を虜にし、一二一八年、親ら諸子と共に、兵六十萬を率ゐ、回々を攻め、ムハーメッドを破り、都サマルカンド[11]を陷る。回々の太子[12]

1. Temdjin
2. Naiman
3. Kuriltai
4. Gingiskhan＝Genghiskhan＝Sutu Bogda Jingis Khakan
5. Uighur
6. Charakitan＝Karakhitai
7. Charesm＝Chorasm＝Chowaresm＝Khuarezm
8. Samarkand
9. Chepe Noyan
10. Kushluk
11. Jelal-ed-din
12. Juji＝Joutchi
29. Despotos＝Despot
30. Conia＝Iconium＝Rum

ラル・エド・ヂン[1]札闌殘兵を集めて、抗戰頗る力めしが、遂に敵する能はずして、印度に走りぬ。後再舉を計りて戰死せり。鐵木眞、乃ち長子朮赤[12]季子拖雷[13]をして、回々の邊境を定めしめ、又哲伯及び速不台[14]を派し、裏海の南を迂廻して、ゲオルギア[15]を征伏し、露國の東南に據れるポロヴツ[16]欽察を討たしむ。是より先、露國は、ヤロスラヴの死後、國内、數多の侯國に分れ、常に相爭鬩せしが、ポロヴツの救を求むるや、南露の諸侯は、之と同盟して、蒙古軍をカルカ[16]河上に逆擊し、反りて大に敗れ、生きて還る者、十の一に過ぎず。是に於て哲伯等、ポロヴツを平定して歸りぬ。

鐵木眞死して、第三子窩濶台[17]太宗、可汗[18]大君の位に登り、金を滅し、又其姪拔都[19]を總將とし、子貴由[20]定宗、孫海都[21]及び蒙哥[22]憲宗バイダル[23]等の諸姪と共に、大軍を率ゐて、再び露國を討たしむ。拔都は、一二三七年大ブルガル[24]不里阿耳を征伏し、使をアザン[25]贊也烈地方の露國諸侯に遣り、其財産の十分の一を獻せしむ。諸侯等之を拒みて曰く、我輩死するの後、悉く之を取れと、遂に合從して血戰せしが、衆寡敵せず、戰死せしもの半に過ぎ、其市府は、遂に蒙古人の一炬に附せられぬ。次ぎて拔都は、スズダル[26]地方を襲ひ、同地方諸侯の聯合軍を破り、其市を焚き、其民を屠り、更に進みて、ノヴゴロド[27]共和大侯國を討ち、途にして師を回し、一二四〇年、蒙哥を助けて、キエヴ[28]を陷れたり。是に於て露の諸侯、陸續西方に走りて、急を告げ、歐洲諸國震駭出づる所を知らざりき。

一二四一年、拔都は、其軍を分ち、自ら本軍を率ゐ、ウンガルンに入りて、焚掠を恣にし、北軍の將バイダル・海都は、ポーランド[29]に突進し、クラコヴを焚き、シュレジン[30]地方當時ポーランドの一部なりに

17. Ogotai＝Oktai
18. Khakan＝Chagan
19. Batu＝Batui
20. Kuyuk＝Kayuk
21. Chaidu＝Kaidu
22. Mangu
23. Baidar
24. Bulgar
25. Riazan
26. Suzdal
27. Novgorod
28. Kiew
29. Krakow(原)＝Cracow(英)＝Krakau(獨)
30. Schlesien(獨)＝Silesia(英)

*Poland(英)＝Polska(原)＝Polonia(ラ)

至り、ワールスタッドの原頭に、リーグニッツ公ハインリッヒの率ゐたる、[31]ポーランド及び[32]ドイツ騎士團體の聯合軍と激戰して之を破り、南方に轉じてウンガルンの本軍に合し、南軍の將速不台・貴由等は、[33]モルダウより[34]ワラハイ・[35]ジーベンビュルゲン地方を屠りて、終に亦本軍に合し、全軍將に進みて、ドイツに入らんとす。此時、西歐にては、法王、荐りに之に向ひて十字軍を勸奬し、ベーメン王[36]ウェンツェル、軍を率ゐて、國境を守りしが、會、窩濶台の訃音到り、拔都等、遂に師を班しぬ。

其後ノヴゴロド、亦歸降して、露國全く平定し、拔都は、此に封ぜられて、欽察國を建て、[37]サライを都としき。是より先、鐵木眞の第二子察[38]合台は、トルキスタン・アフガニスタン東部・印度北部の地を得て、察合台國と稱し、拖雷の子旭烈兀[39]は、ペルシア地方を征服し、一二五八年、バグダッドを陷れ、最後のハリ

31. Wahlstadt
32. Liegnitz
33. Moldau(獨)＝Moldavia(英)
34. Walachei＝Walachia(英)
35. Siebenburgen＝Transylvania(英)

モルダウ・ワラハイ・ジーベンビュルゲン共に今ウンガルンに屬せり。

36. Wenzel
37. Sarai
38. Jagatai＝Tchagatai
39. Hulagu
40. Almustassim

ファアルムスタッシムを殺し、又小アジアを攻め、コニアル及ひ[40]トラペズス帝國の聯合軍を破り、其朝貢を約し、ニケーア帝をして、亦好を通せしむ。旭烈兀は、又シリアを攻めしが、當時シリア及びエジプト[41]迷思耳を領せる[42]マメルック國元蒙古人の傭兵にて遂に國を奪ひの軍勢の爲に、破られて止み、此等克得の地に封ぜられてイルカンと稱しき。

[43]凡是等の諸分國は、皆[44]和林に都せる、可汗を奉戴し、時々其大集會に列して、大事の議に參す。窩濶台・貴由・蒙哥の相次ぎて立ちしは、皆此大集會の決議に依れり。然るに蒙哥の死後弟忽必烈世祖大集會の議を經ずして、可汗の位に即きけれは、[45]茲に內亂を生じ、諸分國、遂に全く元朝と絕つに至りぬ。

拔都に屈服せる露の諸侯は、自治制並に信仰の自由を許され、兵役納稅の義務に服し、繼承は汗の認可を受け、時々サ

41. Mesil
42. Mameluck
43. Ilkhan
44. Karakorum
45. Kubilai

ライに參朝し、或は遙に和林に至り、大汗に謁するを要しき。

第三篇　中古末期

第一章　文運の復活

宗教の束縛と、封建の壓制とは、中古西歐の人心をして、甚しく萎縮せしめ、又大に生産の發達を妨害せり。然るに人口の增殖は、民心の活動を催進し、十字軍終局の結果は、反りて宗教熱を冷却し、他國人・異人種との接觸は、人の識量を廣濶にし、商業盛大となり、生産復振興しければ、西歐人固有の敢爲の氣象、勃々として起り所謂文運復活[1]の機運を啓きぬ。

中古の學者は、アリストーテレス以下少數の古代學者の糟粕を舐りて、其精神を誤解し、之に宗教的思想を混じて、漫りに論法を弄し、反りて眞理を辨せず、奥秘を衒ひて、淺膚なる迷想に力を勞せり。是即ち、煩瑣哲學派[2]なり。然るに人心振起の機運漸く熟するや、イタリアに、古人の文章思想を究め、以て人の性格の神髄を悟了せんとする人道派[3]起り、ダンテ[4]一二六五―一三二一の如きは、以語を以て、其大作神聖喜劇[5]を著しれども、古代の詩文を究め、其流を汲みたるや明けし。次ぎて人道派の祖と稱するペトラルカ[6]一三〇四―一三七四及びボッカチオ[7]一三一三―一三七五出、で、大に古文を修め、古人の思想を考究するのみならず、運りに塵埃中に埋沒せる古書の搜索發見を力むるに當り、ギリシア帝國は、トルコ人の侵略を被り、國運日に蹙り、學者多くイタリアに走りて、難を避けしかば、人道派は、歡びて之を迎へ、延きて以て其教を乞ひぬ。是より高等教育に古學の智識を必要とするの風を生じ、漸次諸國に傳播して、大學教授には、人道派の學者、其多數を占め、就中ドイツのロイヒリン[8]

1. Renaissance(佛)＝Rinascimento(伊)
2. Scholaticism—Schoolmen(英)
3. Humanism—Humanist(英)
4. Dante Alghieri
5. Divina Comedia
6. Francesco Petrarca
7. Giovanni Boccacio

一四六七の如き、其名四方に轟きぬ。抑人道派は、本源全く宗教に關係なきを以て、之が束縛を受けず、自由活潑の精神を有し、反りて當時の宗弊を嘲罵せり。

一四五五エラスムス一五三六

美術も、先づイタリアに於て、古代の風を復活しぬ。復活式の祖ブルチレスコ[10]一三七七は、ローマ古代の建築の殘存せるものを研究し、苦心焦慮、終に快活高尚なる復活式を起しぬ。一四四六

初めは單に其各部を古代の風に模するに止りしが、漸次美の精粹を玩味し、ブラマンテ[11]一四四四のカンチェラリア宮殿、及び同氏とミケル・アンジェロ[12]一四七五と設計せるサン・ピエトロ寺の如き、雄物を見るに至れり。彫刻にも、亦活動雄偉の風起り、ドナテロ・ミケル・アンジェロ[13]の如きは、フィヂアスの壘を摩する[14]の傑作を出しき。繪畫は、中古に於て最も拙劣を極めしがイタリア各地に、彩色優美活動等、各一部に秀づる諸派起り

一四五二一五一九

其特長相合して、遂に艶麗雅致の風に富めるレオナルド[16]一四五二、健筆紙外に迸溢せんとするミケル・アンジェロ、美の神髄を悟了寫出せるラファエロ[17]一四八三一五二〇の如き名手輩出せり。

智識の發達と同時に、之が傳播擴張に必要なる活版の發明あり。從來書籍は、一々之を謄寫せしを以て、其不便いふべからず、其費亦甚だ多かりしが、獨國マインツの人グーテンベルヒ[18]が、第十五世紀の初めに、活版を創めしより、智識[19]を渇望せる當時の人心を滿足せしむることを得たりき。

第二章　地理及び天文上の發見

中古西歐人は、地理の觀念、極めて淺膚なりしが、十字軍の起るや、サラセン人の地理上の智識を西方に媒介し、大に冒險の精神を發達し、或は商利の爲め、或は弘教の爲め、東方に

8. Johann Reuchlin
9. Erasmus von Rotterdam
10. Filippo Brunellesco
11. Bramante
12. Cancellaria
13. Michelangello Buonarotti
14. San Pietro(以)=St Peter(英)
15. Donatello
16. Leonardo da Vinci
17. Raffaello Santi=Raphael(英)
18. Mainz=Mayence(英)(佛)
19. Johann Gutemberg

旅行する者、踵を接しぬ。就中マルコ・ポーロ[1]は、一二七一年、鄕里ヴェチアを出で、陸路蒙古に至り、元の世祖忽烈必の厚遇を受け、之に仕ふること殆ど二十年、其間支那各地を跋渉し、終に海路印度を經て歸國せり。後「東方見聞記」を著し、盛にカダイ[2]北支・マンジ[3]南支・ジパング[4]日本。本邦の歐人に知らるるは是を初とす。那那の繁榮富盛を稱揚し、大に西歐人の遠征心を奮興せしめき。第十三世紀の中頃には、支那より磁針の傳來ありて、航海者をして波濤を犯し、遠地に赴くの機會を得しめぬ。

ポルトガルの王子エンリケ[5]は、一四一五年以來、連りに財を投じ、船を派し、アフリカ西岸を探檢せしめしが、一四四五年、ヂニズ・ヂアズ[6]、カボ・ベルデ[7]綠岬の義を迂廻し、草木繁茂し、人畜棲息せるを見て歸り、南方の熱度は、動植物をして枯死せしむといへる古來の妄說を打破して、以て大に人心を啓發せり。其後ジアノ二世王[8]、エンリケの遺志を繼ぎ、益遠征の擧を盛にし、バルトロメオ・ヂアズ[9]は、好望角[10]を迂廻し、同時に、コビラム[11]は、紅海より印度に到り、又アフリカ東岸を航して、ソファラ[12]マダガスカル對岸に達し、遂に一四九八年に至り、バスコ・ダ・ガマ[13]は、アフリカを迂廻して、印度に至ることを得たり。

此航路の未だ明かならざりし時に當り、西方に航するは反りて印度當時印度とは東方の總稱なりきに至るの最捷徑なりと說く者あり。以國ジェノヴァ[14]の人クリストフォロ・コロンボ[15]西國に仕へて後クリストバル・コロンと稱す熱心此說を唱へ、千辛萬苦を重ね、遂にエスパニア王フェルナンド[16]五世、及び其后イサベラ[17]の贊助を得、一四九二年、船三艘を艤し、大西洋を航すること八十六日、始めて西印度の一嶋に達せり。コロンボは、此地を以て日本附近なりと思惟し、土民を印度人と名けぬ。其後探檢者、相次ぎて西世界に航し、

1. Marco Polo
2. Cathay
3. Mangi
4. Jipangu
5. Dom Henrique＝Henry(英)
6. Diniz Diaz
7. Cabo Verde
8. João
9. Bartolomeo Diaz
10. Cabo da Boã Esperanza(原)＝Cape of Good Hope(英)　好望角は初め暴風の岬と稱せしがジアノ王前途を祝して之に改む
11. Cobilham
12. Sofara
13. Vasco da Gama

終にアメリカといふ一大陸を發見せり。是等の發見は、實に當時の人心を醒覺するに著しき勢力を有しき。

コロンボは、一五〇六年に死せしが、其頃獨人[18]コペルニクス、始めて天動説を唱ひき。これ蓋し宗教の束縛に對する大打擊にして、其結果の顯れたるは、稍後に屬すれども、此の如き新説の出でしは、既に以て人心が、自由發達をなしつゝあるを知るに餘りありとす。

第三章　西歐諸國の中央集權　政略兵制

の一變

中古の末葉に當り、封建制度の破壞と、中央集權の確立とは、西歐の風潮をなし、滔々として到る所に波及せり。

佛國にては、シャール七世、ジャック・クールを宰相とし、稅法を改革し、財政を整理し、會計檢査院を創立し、又常備軍を新設して、諸侯の抑壓を圖り、其子ルイ十一世（一四六一―一四八三）亦王權擴張を力め、大諸侯の男系絶ゆるもの、相次げるに乘じ、悉く其領土を沒收せり。時にブルゴーニュは、相續買收等により、ネーデルランド・ベルギー[1]全部及びドイツ西南の地を得て、獨・佛の間に一大國を建設せんとし、シャール勇膽公[2]は、常にルイ十一世の政略に反對せしが、圖らずもスウィツル人[3]と戰ひて、其破る所となり、一四七六年、遂に落命するや、佛國外の地は、シャールの女婿マクシミリアン帝[4]、之を得たれども、佛國内の公領は、悉く佛の王室に歸し、ルイの子シャール八世（一四八三―一四九八）に至り、ブレターニュ公の女を娶り、其領地を併せ、王權確立して、國勢大に振へり。

英國にては、薔薇戰爭の結果、大貴族概ね其家斷絶しけれ

1. Nederland(蘭)＝Netherland(英)＝Niederland(獨)＝Pays Bas(佛)
2. Charles le temeraire＝Charles the bold(英)
3. Maximilian
4. Court of Star Chamber
14. Genova(原)＝Genoa(英)＝Genua(獨)＝Gênes(佛)
15. Christofolo Colombo(以)＝Christobal Colon(西)＝Christopher Columbus(ラ)(英)
16. Fernando(原)＝Ferdinand(英)
17. Isabella
18. Coppernicus

は、ヘンリー七世（一四八五―一五〇九）は、別に常備軍を置かず。嚴に貴族の蓄兵を禁じ、又星室廳（コート・オブ・スター・チエムバー法廷の天井に星を畫けるに依り名く）を設けて、國事犯罪を裁判し、貴族の行爲を嚴密に監督せり。當時議會は、基礎既に固く、其協贊を經されば、新稅を徵することを能はざるを以て、王は、之を召集せず、專ら在來租稅の徵收法を嚴にして、殆ど苛酷に流れ、又內亂の際、民有に歸したる王室の地所山林等を回收して、其情實を省みず。然れども今や大亂の後を承け、民皆秩序安寧を望むこと切なりければ、忍びて是等の處置に服從し、王も、亦盛に商業を奬勵し、他國との間に、利益ある通商條約を結び、英國の商業をして、大に隆盛に赴かしめぬ。

エスパニアにては、カステラ、遂にアスツリアス・レオンを併せ、一四六九年、女王イザベラは、アラゴン王フェルナンド（アラゴンにて二世、西王として六世）と婚し、一四九二年、グラナダ王國を滅して、エスパニアを一統し、全國普通の法典を編纂し、諸市府の援助を得て、之を厲行し、以て貴族の專橫を抑へ、同時に名譽職を設けて、之を慰撫優待し、又王親ら當時權勢盛なりし三個の宗教的騎士團體の長者となりて、之を抑へ、法王に逼りて、僧侶任命の權を得、清淨忠誠の僧侶を擧げ、大に王權を張りぬ。

ポルトガル[6]は、元カステラの屬邦なりしが、第十一世紀の末に至りて獨立せり。其王ジアン[7]二世（一四五五―一四九五）陰謀を逞しくし、權力强大なるブラガンザ[8]公を捕へて、之を刑し、又親らヴィセウ[9]公を刺殺し、其領土を奪ひて、漸次王權を固定せり。

ドイツにては、初め大小諸侯、悉く王を選ぶの權を有せしが、其後マインツ・トリエル・ケルン[10]の三大僧正、ベーメン王[11]・ザクセン公[12]・ラインのプファルツ伯[13]・ブランデンブルヒ[14]のマルク

9. Viseu
10. Trier＝Trève(英, 佛)
11. Köln＝Cologne(英, 佛)
12. Böhmen(獨)＝Bohemia(英)
13. Sachsen(獨)＝Saxony(英)
5. Schweiz(獨)＝Suisse(佛)＝Switzerland(英)
6. Portugal(原)
7. João
8. Braganza

伯の七大諸侯は、終に皇帝選擧の常置委員の如くなり、任意の選擧をなし來りしが、一三五六年、カール四世帝の黃金文[17]書に依り、此權利を確認し、七大諸侯を選擧侯[18]と稱しぬ。以て王權擴張の望なきことを推知すべし。

マクシミリアン一世帝一四九三―一五一九は、ハプスブルグ家の出にして、其相續に依り、エステルライヒ[19]全土を得、又ブルゴーニュの公主マリー[20]と婚して、子デルランド及び今のドイツ西南部を得たり。然るに其イタリアに領土を拓かんとするや、軍資の欠乏に苦しみ、之を帝國議會[22]に諮りしに、マインツの大僧正ベルトルド[23]等、獨國内の分裂紛擾の爲に、大に外侮を招けるを慨し、此機に乘じて、共和的中央集權制を行はんと欲し、ウォルムス[24]一四九五・リンダウ[25]一四九六・アウグスブルヒ[26]一五〇〇に開ける三期の議會に於て、皇帝に軍資を給するの報酬として、漸次

19. Habsburg
20. Oesterreich＝Austria(英)
21. Marie
22. Reichstag
23. Berthold
24. Worms
25. Lindau
26. Augsburg
27. Ewiger Landfriede
28. Gemeine Pfennig
29. Reichskammergericht
30. Frankfürt－am－Main＝Frankfort on the Main(英)
31. Reichsregiment

14. Pfalzgraf＝Count Palatinate(英)
15. Brandenburg
16. Markgraf
17. Goldene Bulle＝Golden Bull(英)
18. Kurfürst＝Elector

要求の歩を進め、皇帝をして、永久國内平和の勅令[27]を發して、私鬪を禁ずる事。ゲマイネ・プフェニヒ[28]と稱する所得稅を全國より徵收し、其支出は、一に議會の決議に依る事。帝國高等法院[29]を、フランクフルトに常設し、其法官は、議會より任命する事。帝國政府[30]を設け、選擧侯七人、全國六區の代議士、及び皇帝の簡派せる委員より組織し、帝國一切の行政を司る事。帝國[31]普通の刑法を編纂する事。貨幣制度を改革する事等を承認せしめて、殆ど其目的を達せしが、一五〇四年、ベルトルド大僧正の死するや、改革黨の氣勢振はず、マクシミリアン、亦巧に之を掣肘せしかは、此改革も終に無効に歸したり。

此の如く、中央集權の風潮、諸國に波及せしが、之を行ふに當り、成るべく實力を靡せず、權謀術數に依りて、其目的を達せんとせしが爲め、詐僞・暗殺・毒害等の陰險手段を辭せざる

の風、大に行はれ、フィレンゼの人[32]マキアヴェリは、其書、イル・プリンチペ[33]君主に、是等の手段を列記せり。外交にも、亦縱横の術策に依り、容易に事を遂げんとする外交術[34]起り、ヴェチチア・フレンゼは、此術の母と稱せられ、率先して、公使を外國に派し、其國情・政況等を探索報告せしめ、本國政府は、此報告に基きて政略を定めぬ。

封建制の破壞に、最も有力なりしは、兵制の變化なり。中古の戰爭は、騎士の突貫を以て、終局の勝敗を決せしが、重甲を擐ける騎士の突貫は、歩兵の能く防ぐ處にあらず。然るにスウィッツル人は、地理を利用して、敵の弱點を突く事と、前列に長鎗隊を布き、先づ突貫の勢を挫き、次ぎて後列にある者をして、ハレバルド[35]（斧鎗鈎を兼ねたる利器）を振ひて、騎士を斃さしむる事と、を發明し、[36]モルガルテンに、一三一五エステルライヒ軍を破りて

32. Niccolo dei Machiavelli
33. "Il Principe"="The Prince."(英)
34. Diplomacy
35. Hallebard
36. Morgarten
37. Sempach
38. Landsknecht

其獨立を確定し、後又ゼムパッハ[37]に於て之に勝ち、威力を内外に振ひき。かくてスウィッツル人の戰鬪力、普く諸國に知らるゝや、傭兵として四方に用ゐらるゝ者多く、マクシミリアン帝は、スウィッツル人に倣ひて、其領土の民を訓鍊し、同樣の武器と火器とを用ゐしめて、大に功を奏し、之をランツクネヒト[38]と呼びき。是より各國爭ひて、傭兵の制度を採用せり。蓋し騎士に對して有効なると、封土授與の必要なくして、封建制の廢止とに便なればなり。

長鎗・ハレバルドより稍後れて行はれ、其効力遙に其上に出でしは、火器なり。ギリシア帝國にては、早くより戰爭に一種の火藥を用ゐたるが、西歐人は、始めて之をサラセン人より傳來せり。大砲は、初め鐵製にして、牛を以て牽かしめ、唯攻城の用に供せしのみなりしが、其後銅製の輕砲漸く行はれぬ。

銃は、初め拳銃のみにして戰斧を兼ぬるものあり。後長銃漸く行はれたれども、皆火繩銃なりき。是等火器の使用は、騎士をして顏色なからしめ、封建破壞の大動力となれり。

第四章　オットマン・トルコの跋扈　モスクヴァー[1]勃興

ニケーア皇帝は、鋭意恢復を計り、テッサロニケを併呑し、ロマニア帝領を蠶食し、一二六一年、終にコンスタンチノポリスを陷れ、次ぎてエピルスを平定し、ギリシア帝國を再興したり。然るに其後内亂起りて、國力復疲弊し、セルビア及びオットマン・トルコは、東西より侵寇せり。

セルビアの酋長ステファン・デューシャルは、マケドニア・ブルガリア・アルバニア[3]・テッサリア・エピルス及び中部ギリシアを併呑して、ツァリと稱し、行政を改革し、法典を編纂し、學術商業を奬勵せしが、其死後、國内分裂して、勢復振はざりき。

オットマン・トルコは、もと突厥の一部落なりしが、蒙古人の壓迫を受くるに及び、一二五年頃、部衆五萬、其酋スレイマン[4]に率ゐられて、アルメニアに移り、スレイマンの子エルトログル[5]の時、コニアの臣となり、一二三一年、小アジアのアンゴラ[6]附近の地を得、其子オスマン[7]一二八八、一三二六遂に獨立してギリシア帝國を蠶食す。是よりオスマン又オットマン・トルコの稱起れり。オスマンの子ウルカン[8]一三二六、一三五六其境を東方に擴め、又悉く小アジアに於けるギリシア帝領を略奪し、弟アラ・エド・ヂン[9]と計りて、憲法[10]を作り、功勞ある臣下には、小秩祿を加增したれども、其相續を許さず。又捕虜とせる基督教徒の男兒を養育して、ジャニザリー[11]と稱する勇猛なる軍隊を作り、

1. Ottoman Turk＝Osman Turk
2. Stephan Duschar
3. Albania
4. Suleiman＝Solyman
5. Ertrogrul
6. Angora
7. Ottoman＝Othman＝Osman
8. Urchan
9. Ala-ed-din
10. Kanun
11. Janizaries

別に相續的の屯田騎兵[12]を置きければ、當時常備軍の設なく宗教熱心の衰へたる歐洲人は、到底其鋭鋒に敵し難かりき。

ウルカンの子ムラード[13]一世、一三五九―一三八九トラキアを畧し、都をアドリアノポリスに奠め、其領土全くギリシア帝國を包圍し、セルビア・ブルガリア及び小アジアの諸小國を服す。其後セルビア・ボスニア・アルバニアの同盟[14]して反抗するや、一三八九年、同盟軍をコッソヴォ・ポリエ烏之原といふに粉碎し、ムラードも終に陣亡しぬ。其子バエジッド[15]一世、ブルガリア・セルビア・アルバニア・ボスニアを平定し、ワラハイをして朝貢せしめ、ウンガルンの邊境を侵し、マケドニア・ギリシア地方を併呑し、群島を蠶食す。是に於て獨佛の騎士數萬、義憤を起して東行し、ウンガルン王シギスムンド[16]に從ひ、進みてニコポリ[17]に到る。一三九六年バエジッド迎擊ちて、大に之を破り、コンスタンチノポリスを圍むこと急なりしかば、皇帝は、使を察合台國の帖木兒に遣り、朝貢を約して救を求めぬ。

帖木兒[19]は、綽名をレンク（跛者の義、世俗タメルランといふは其轉訛なり）といふ。一三三〇年、察合台國に生れ、一三六九年、國内を一統し、其威勢遠近に振へり。是より先、ロシアには、モスクヴァー[20]大侯陽にサライ朝に忠誠を裝ひ、陰に其實力を養ひ、以て機運の熟するを待ちしが、ヂミトリイ・ドンスコイ[21]に至り、一三八〇年、大に欽察國の軍を破りて獨立す。欽察のトクタムイシ[22]汗、反者の爲に逐はれて帖木兒に寄るや、帖木兒、乃ちロシアに攻入り、トクタムイシを位に復しぬ。一三八二年、トクタムイシ、モスクヴァーを襲ひて之を陷れ、ヂミトリイを服し、又帖木兒の不在に乘じて、其本國を犯しければ、帖木兒は、兵四十萬を率ゐて、再び露國に侵入し、其勢當る可らず。トクタムイシ[23]、出奔してリトヴァーはポーランドの東北ロシ

11. Janizary
12. Spaphis
13. Murad
14. Bosnia
15. Kossowo Polje(原)=Amselfeld(獨)
16. Bajesid
17. Sigismund=Sigismond(英)
18. Nicopoli
19. Timur Lenk=Tamerlan
20. Moskwa(露)=Moskau(獨)=Moscow(英)
21. Dimitrii Donskoi
22. Toktamuish
23. Litwa(露)=Littauen(獨)=Lithuania(ラ)

アの西なる國大侯ヴィトヴト[24]に歸す。ヴィトヴト、乃ちドイツ・ポーランド・リトヴァー・ロシア・欽察の諸軍に將とし、ヴォルスクラ[25]河（ドニエプル河の支流）上に帖木兒と戰ひ、反りて大に敗る。此時帖木兒は、焚掠を恣にして歸國し、尋ぎて印度を攻め、恒河[26]（ガンガ）まで、其地を平定せしが、ギリシア皇帝の救を乞へるに會し、大擧してトルコを攻め、一四〇二年、アンゴラに於て、バエジッドと戰ひて、之を虜にしき。其後帖木兒は、明朝の無禮を怒り、將に膺懲の師を起さんとせしが、一四〇五年、病死し、大國忽ち瓦解せり。

欽察は、之が爲に獨立することを得たりしが、國勢振はず、カザニ[27]汗・クリム[28]汗等、各分離獨立せり。之に反しモスクヴァー大侯國は、日に益強大に赴き、イヴァン三世[29]に至り、一四六九年カザニを屈服し、一四七八年、ノヴゴロドを征伏し、一四八〇年、欽察國と戰ひて、大に之を破り、欽察國遂に瓦解して亡びぬ

24. Witowt
25. Worskla
26. Ganga(梵)＝Ganges(英)
27. Kasanj

イヴァン又ギリシア皇女ソフィア[30]を娶り、同帝室の紋章双頭鷲を襲用し、以て自ら其繼承者に擬す。其子ヴァシリー三世[31]に至り、終にツァリ（皇帝）と稱せり。リトヴァも亦大侯ヴィトヴト死し、其領土全くポーランド王ヤゲロー[32]に歸し、是よりポーランドの勢力大に加りぬ。

トルコは、其後獨立して、漸次國勢を恢復し、再び侵畧を計りけるが、ポーランド王兼ウンガルン王ヴラヂスラヴ[33]、ウンガルンの將軍フニヤヂ[34]、アルバニア侯スカンデルベク[35]等の名君良將出でゝ、トルコ擊攘に盡瘁し、フニヤヂ[36]の如き、一四三四年、フィリッポポリスの邊まで侵入しき。一四四四年、ムラード二世[37]、地をセルビア・ウンガルンに割讓して、和を結びしが、基督教徒反りて約に背きて攻擊を始め、ヴラヂスラヴは、同年、ヴァルナ[38]に敗死し、フニヤヂ、亦コッソヴォポリエに利を失ひ、

28. Krim
29. Iwan
30. Sophia(露)＝Sophy(英)
31. Wasilii
32. Jagello

ヤゲローは元リトヴァー大侯たりしが、一時ヴィトヴトを之に封せしなり。

トルコの勢益加りて、ムラードの子ムハーメッド二世（一四五一―一四八一）に至り、一四五三年、終にコンスタンチノポリスを陷れ、ギリシア帝國を滅して、都を此に奠め、次ぎてトラペズス帝國・セルビア・ボスニア・アルバニアを併呑し、ヴェチチア屬領の大半、及びポーランド[39]の一部を略し、クリムの汗を屈服し、一四八〇年、將を派して、イタリアのオトラント[40]を陷れ、其民を屠り、將に進みて西世界を席卷せんとせしが、其翌年、病みて死し、經營半にして止みぬ。然れども、オトラント陷落の一事は、實に西歐人をして肝膽を寒からしめき。

第五章　イタリア戰爭　宗教改革の企圖

各國中央集權漸く成りて、其國力充實するや、こゝに侵畧運動大に起り、イタリアは、其逐鹿の中心となりぬ。

33. Wladislaw
34. Hunyadi
35. Albania
36. Skanderbeg
37. Philippopolis
38. Warna
39. Bosnia
40. Otranto

第十五世紀の末葉に當り、以國に國を成せるもの五あり。ヴェチチア共和國・ミラノ公領は北部に、フィレンゼ・法王領・ナポリ王國は南部に、各分立對峙して、久しく均勢を保ちき。フィレンゼのロレンツ・デ・メヂチ[1]は、其獨裁權を握りて、文學美術を奬勵し、復活式の恩人と稱せられ、外交にも、亦其敏腕辣手を揮ひて、能く五國間の均勢を維持せしが、其死するや、ミラノ公ルドヴィコ・スフォルツ[2]は、フィレンゼ・ナポリが、共に聯合して己を圖るを知り、佛王シャール八世を招きしかば、シャールは、一四九四年、兵を率ゐて、以國に入り、翌年ナポリを略しぬ。既にしてルドヴィコは、シャールの勢盛なるを忌み、獨帝マクシミリアン一世・法王アレクサンドル六世・西王フルナンド五世・ナポリ舊王アルフォンソ二世の從弟[3]と對佛同盟を結びて之に抗す。シャールは、同盟軍を破りて歸國せしが、西軍遂にナポリを取り、舊王アルフォ

1. Lorenzo de' Medici
2. Ludovico Sforza
3. Alfonso
4. Federigo＝Frederick(英)

ンソ二世の子フェデリゴ[4]四世を立てぬ。

一四九八年、シャール死し、ルイ十二世繼ぎ、先づ西王フェルナンドと同盟し、翌年、以國に入りて、ミラノ公領を平定し、又西軍と協力して、ナポリを略し、其分配の事より、西・佛間に戰端を開きしが、ナポリは、終に西軍の占領する所となりぬ。

マクシミリアン帝も、亦ミラノを奪はんとして、兵を出しし、ヴェネチアは、佛と同盟し、其通路を塞ぎて、之を擊退せり。

然るにヴェチナアの四方蠶食は、偶以て諸國の厭惡を招き、獨帝・法王・西王・佛王等、相合してヴェチナア分割條約を結び、一五〇九年、不意に四境より進擊し、ヴェチナア國大に困みしが、上下相一致して、之が防禦を勉め、又曩に蠶食せる地を法王・西王に返し、以て其同盟を脫せしめぬ。

法王ユリウス[5]二世は、以國より外國人を驅逐し、己れ以國に覇たるの理想を懷き、ヴェチナア・獨帝・西王及び英王ヘンリー八世と、神聖同盟を結び、又スウィツル人を諭し、ミラノを攻めて、佛人を逐はしめ、次ぎて兵力を以て、フィレンゼに迫り頭僧官ジョバンニ・デ・メヂチ[6]を首領となさしめ、更に機を見て、ナポリより西人を驅逐せんとせしが、一五一三年、業半にして死し、ジョバンニ頭僧官、之に繼ぎて、レオ[7]十世と稱しぬ。

一五一五年、佛王ルイ十二世死し、フランソア[8]一世立ち、ヴェチナアと同盟し、ミラノを攻めて、スウィツル人を破り、次ぎて之に賠償を與へて、以國の事に容喙せざらしめき。時に西王フェルナンド死し、幼孫カルロス[9]位に在りしを以て、マクシミリアンも、獨力佛と爭ふこと能はず、遂に之と和し、ミラノ、全く佛領となれり。

侵略運動と同じく、中古末期に著しきは、宗教改革の企圖

5. Julius(ラ)(英)＝Giulio(伊)
6. Cardinal Giovanni de' Medici
7. Leo
8. François＝Francis(英)＝Franz(獨)
9. Carlos

なり。第十四世紀には、地震・黑死病・蝗害等、天災地殃、頻々として來り、恐怖の情、歐洲の天地に充滿せしが、之に安心を與ふべき宗教は、甚敗頽甚しく、法王は、一三〇五年以來、アヴィニオン[10]にありて、佛王の奴隸の如く、腐敗墮落、其極に達し、一三七八年には、ローマ及びアヴィニオンの大僧正、各法王を選擧して、互に自ら正統となし、他の法王及び之に從ふ者を以て、外道なりと宣言しければ、信徒は、其適歸する所を知らず、深く失望の淵に沈みぬ。是に於て宗教改革の聲大に起り、パリ大學教授の首唱に因り、一四〇九年、以國ピサ[11]に、宗教大會議を開き、新法王を立てしが、徒に一人の法王を增したるのみにて、反りて宗弊一掃の妨害となりき。一四一四年、又コンスタンツ[12]に、宗教大會議を開き、遂に三法王を廢し、更にマルチン五世[13]を立てゝ、法脈の歸一を計りたれども、各國の會議員中に

10. Avignon
11. Pisa
12. Konstanz(獨)=Constance(英・佛)
13. Martin

軋轢を生じ、マルチン五世、亦巧に之を操縱せしを以て、會議は、遂に一弊を除かずして、曖昧模糊の間に閉會しぬ。其後一四一三年、バーゼル[14]に開ける宗教大會議は、地方宗教會を置きて、法王の權を削らんとし、爲に之と衝突を起し、黨爭復其内に生じ、寸効なくして解散せり。其他一個人として、宗弊の匡正を計り、且教義に對して攻擊を試みたる英のウィックリフ[15]・以のサボナロラ[16]・ベーメンのフス[17]の徒あれども、皆其目的を達する能はず、百弊依然として存したるが、時にドイツ[18]は、國家甚しく統一を缺けるが爲、宗教的徵稅に抗するの力なく、徒にローマの寶庫とせられたれば、反抗の氣焰最も盛なりき。此時に當り、能く改革の大業を遂行すべき者は、必ずしも博識多才を要せず、寧ろ自信に厚く、斃れて止むの精神を要したりき。

14. Basel(獨)=Bale(佛)
15. John Wycliffe
16. Girolamo Savonarolla
17. Böhmen(獨)=Bohemia(英)
18. Johann Huss

第三部　近古史

第一篇　エスパニア・フランス對抗時代

第一章　宗教改革　西佛二國の確執

ドイツ宗教改革の首唱者[1]マルチン・ルーテルは、鑛夫の子にして、一四八三年、[2]アイスレーベンに生る。初め法律を學びしが、事によりて發心し、聖アウグスチヌス派の僧となり、[3]ウィッテンベルヒ大學の聘に應じて、神學を教授し、常に教風の敗頽を痛恨せしが、法王レオ十世が、サン・ピエトロ寺建立の資金募集の爲、[4]免罪符を賣らしむるを見るに及び、慨然起ちて之に抗し、一五一七年、意見九十五條を草して、ウィッテンベルヒの寺門に掲げ、免罪符販賣の非理なるを辨明したり。此說忽ち四方に傳播し、世論囂々たりしが、諸侯中には、之に贊同するもの尠からず。次ぎてライプチッヒの公開討論に於て、ルーテルは、基督教義の、一に聖書に據るべきを切論し、且法王と雖、また全く過失なき能はざるを明言しければ、法王は、一五二〇年、遂にルーテルを破門したり。

是より先、エスパニア王フェルナンド六世の死するや、一一六五其外孫[6]カール、王位を繼ぎ、カルロス一世と稱せしが、後三年、其祖父マクシミリアン帝死するに及び、エステルライヒの領土を相續し、又佛王フランソア一世と、ドイツの王位を爭ひ、終に多數の推選によりて、王位に登り、カール五世と稱しければ、エステルライヒ・子！デルランド・サルヂニア・ナポリ・シチリア・エスパニア及び海外の屬領を併有し、其版圖の廣大なる、カール大帝以後、稀に見る所なりき。是より西・佛二國の確執益甚しかりしが、カールが、ミラノを、佛國より奪はんとするに及び、法王も、亦エスパニアの權力が、更にイタリアの

4. Ablass (獨)＝Indulgenz(獨)＝Indulgence(英)
5. Leipzig
6. Carlos(西)＝Karl(獨)＝Charles(英)

1. Martin Luther
2. Eisleben
3. Wittenberg

北部に及ぶを恐れ、佛王と結びて、之に敵したり。カール、乃ち先づ異端者を鎮壓して、法王の歡心を買ひ、之が援助を借らんと欲し、一五二〇年、始めてドイツに入り、翌年ウォルムス[7]に國會を開き、ルーテルを召して、其所說を棄てしめんとせしが、固く持して命を奉ぜざりしかば、遂に勅令を發して、ルーテルを異端者となし、其徒と共に法律の保護を停止せり。是よりルーテルは、其領主ザクセン公フリードリッヒの庇護を受け、アイゼナッハ[8]に近き、ワルトブルグ[9]の城內に隱れて、聖書の飜譯に從事し、一五二二年、新約全書を譯成せり。

當時イタリアの風雲益急にして、ウォルムスの勅令も、之が實行を見るに至らず。カールは、國會閉會後、直にミラノ公領に出陣し、佛兵を逐ひて、之を略し、佛王親ら精兵を率ゐて至るに及び、一五二五年、又パヴィア[10]に勝ちて之を虜にし、翌年、マドリッド[11]條約を結び、佛王をして、ミラノ及びナポリを要求する事を廢棄せしめ、且ブルゴーニュを割讓せしめたり。

後佛王免されて歸國するや、またマドリッド條約を履行するに意なし。會、法王も、亦深くカールの權力の强大を恐れしを以て、佛王と結び、遂に英王ヘンリー八世、及びイタリア諸國と同盟してカールに敵したり。是に於てカールの軍、ローマ府を陷れ、抄掠殘暴到らざる所なかりしが、一五二九年、カムブレー[12]和約成り、佛王は、イタリアに向ひて、權利を主張する事を廢し、カールも一時ブルゴーニュに對する要求を棄て、其翌年ボロニア[13]に於て、帝冠及びイタリア王冠を戴きぬ。これを法王授冠の最終とす。

7. Worms
8. Eisenach
9. Wartburg
10. Pavia
11. Madrid
12. Cambrai
13. Bologna

帝軍中に新教徒多かりしかば、寺院を掠め僧侶を辱かしめぬ。

第二章　宗教改革の進行　トルコの西侵

ウォルムス勅令出でしより、茲に八年、新教は西・佛二國の紛爭によりて、皇帝の壓抑を免れ、勢益〻熾なりしが、其間また急激なる改革を主張する者起り、特にクラウス・ストルヒ[1]等は、再洗禮派[2]を創唱し、愚民を煽動して、寺院に闖入し、亂暴狼藉到らざる所なかりき。當時南ドイツには、封建の盛時を夢みる騎士輩尚多く、新教の寺領廢止說に雷同し、之を口實として暴動を企て、以て己を利せんとし、遂に大諸侯の爲に鎭壓せられ、又南部の農民等は、常に領主の壓制に苦しみしが、今や、宗教改革の極端に馳せ、萬民同祖、貴賤無差別の社會論を唱へ、其徒漸く蔓延して、狂暴を逞しくせしが、幾もなくして、諸侯聯合軍の爲に、鎭定せられぬ。

ルーテルは、常に過激極端の行爲を排擊しければ、是等暴舉の失敗の爲に、毫も新教の力を減殺せられず。メランヒトンの徒と共に、新教の教會組織を確立し、又大に學校を興し、少年有爲の士を養成して、其弘通を計りしかば、北ドイツの諸侯は、概ね之に屬せり。就中ドイツ騎士團體の長老なるアルブレヒト[4]は、一四五五年以來、團體がポーランドの配下に屈せるを慨し、其羈絆を脫せんとして成らず。是に至りて宗教改革を行ひ、自らプロイセン[5]公と稱し、團體の地を領せしが、名は尙ポーランドの臣たりき。

カール五世は、新教の勢益〻盛なるを見、カムブレイ[6]の和約成るや、スパイエル[7]に國會を開き、ウォルムス勅令の厲行を決議せしめたり。然るに新教を奉ずる諸侯及び市府は、此決議の非を鳴らし、抗論して止まざりしを以て、是より新教徒を稱して、プロテスタント[8]抗論者の義といふ。然るに此時會、勁敵の東方に現るゝありて、帝は復新教徒制壓の擧を中止せり。

1. Klaus Storch
2. Wiedertäufer(獨)=Anabaptist(英)
3. Melanchthon
4. Albrecht(獨)=Albert(英)
5. Preussen=Prussia(英)
6. Cambrai
7. Speyer
8. Protestant
9. Selim

トルコ帝ムハーメッド二世の孫セリム一世[9]一五一二―一五二〇は、專らアジア地方の侵略を勉め、頻りにペルシアを蠶食せり。是より先、ペルシア地方は、帖木兒に併呑せられ、其子孫各地に割據して、數多の小國分立し、一五〇二年に至り、土人イスマエル・アル・サフィ[10]崛起して之を一統し、新ペルシアを起しゝが、セリムと戰ひて、大に敗れぬ。セリム、又シリア・パレスチナ・エジプトを征服し、其子スレイマン二世一五二〇―一五六六に傳ふ。スレイマン[11]は、ローズス島を略して、ヨハニテー團體を驅逐し、又ウンガルンに攻入り、ウンガルン兼ベーメン王ルードヴィッヒ二世とモハーッ[12]に戰ひ、大に之を破り、ルードヴィッヒを殺しぬ。

カール五世は、家門の繁榮を計るに汲々とし、先に其弟フェルヂナンド[13]に、エステルライヒを與へ、シュワーベン市聯合が、ウュルテムベルヒ[14]公ウルリッヒ[15]を逐ふや、其地を購買して、又フェルヂナンドを此に封じ、ルードヴィッヒ王の戰死するに及び、更に之を助けて、ウンガルン兼ベーメン王に選擧せしめぬ。時にウンガルンの貴族ツァポルヤ[16]、王位を爭ひ、援をトルコに求め、佛王フランソア、亦スレイマンを煽動しければ、一五二九年、スレイマン、大擧して侵入し、勢破竹の如く、進みてヴィーン[17]を圍みぬ。是に於て新舊兩教徒は、閱墻の暇なく、ルーテルも、亦大にトルコ人征討の擧を勸告しければ、獨國の人士、相一致して皇帝を助け、終にトルコ人を擊退したり。

一五三〇年、皇帝親臨して、國會をアウグスブルヒ[18]に開くや、新教徒は、メランヒトンが編纂せるアウグスブルヒ信仰[19]個條を奉呈し、新舊兩教の委員熟議して調和を試みしが、終に成らず。國會の多數は、新教排斥を議決しければ、新教徒は、自衛の爲、一五三一年、シュマルカルデン[20]同盟を組織しぬ。

10. Ismael al Safi
11. Suleiman
12. Mohacz＝Mohacs
13. Ferdinand
14. Württemberg
15. Ulrich
16. Zapolya
17. Wien＝Vienna(英)
18. Augsburg
19. Confessio Augustana(ラ)＝Augsburgische Confession(獨)
20. Schmalkalden－Schmalkaldischer Bund(獨)＝Schmalkaldic League(英)

此年スウィッツルの新教徒も、亦挫折せり。初め、チューリッヒの僧ウルリッヒ・ツウィングリ[22]は、ルーテルよりも、更に舊教[21]と離隔せる新教を唱へ、其教スウィッツルの各地に行はれしが、ツウィングリ派は、ルーテル派と大同によりて協力せず、小異の爲に、相見ること路人の如くなりき。ツウィングリは、又所謂建國の五州[カントン]即ちウリ[23]・シュウィーツ[24]・ウンテルワルデン[25]・ツーグ[26]・ルツェルン[27]が、同盟の全權を握りて、專横なるを慨し、又人民を外國の傭兵とするを以て、人身賣買なりとし、之を廢止せんことを計りしが、傭兵の報酬を以て、重要の歳入とせる五州は、之に抗して新教弘通を妨碍し、終に新教を奉ずる諸州との間に、戰端を開き、一五三一年、ツウィングリ戰死して、此派衰へぬ。

此の如く、新教徒の氣勢、一時挫けたれとも、政治上の關係より、法王及び舊教を奉ずる諸侯等も、帝權の增大を恐るゝこと甚しく、佛王も、亦常に機に乘じて、ミラノ公領を恢復するの野心を包藏し、加ふるに、一五三二年、スレイマンは、復大擧して、エステルライヒに攻入りければ、帝も内外の多事なるに苦しみ、一五三二年、新教徒と、ニュルンベルヒ[28]の宗教和議を結び、次回の宗教大會まで、其宣布の自由を許しぬ。

1. Hessen
2. Landgraf Philipp
3. Algérie(佛)=Algeria(英)
4. Crespy
5. Schmalkaldische Krieg
21. Zurich
22. Ulrich Zwingli
23. Uri
24. Schwyz
25. Unterwalden
26. Zug
27. Luzern=Lucern(英)
28. Nürnberg=Nurenburg(英)

第三章　シュマルカルデン戰役

ニュルンベルヒの和議は、カールが、一時の窮策に出でしものなれば、兩派の抗爭は、依然として舊の如く、ウルテンベルヒにては、一五三四年、舊公ウルリッヒ[1]、ヘッセンランド[2]伯フィリップの助により、其地を恢復して、南ドイツ新教徒の中心となりぬ。當時皇帝は、國事日に多端にして、南船北馬、これ日も足らず、一五三五年、チュニスを伐ちて、トルコ人と結托せる海賊を

破り、翌年、佛王が、スレイマンと約して、東西より迫らんとするや、大擧して佛國を攻め、既にして之と和して、チーデルランドの反亂を鎭め、又アルジェリー[3]海賊掃蕩の擧を企て、偶颶に遭ひて、功なかりき。此時に當りて、佛王またスレイマンと、東西相應じて、皇帝を夾擊せんとしければ、皇帝は、英王ヘンリー八世と結びて、之に當り、互に勝敗ありしが、一五四四年、遂にクレピー[4]の和約を締結し、多年紛爭の局を結びたり。

西・佛の葛藤收まるや、幾もなくしてまたシュマルカルデン[5]戰役（一五四六―一五四七）起り、帝は、兵力を以て、新敎徒壓伏の擧を始め、先づ南ドイツの新敎諸邦を從へ、次ぎてミュールベルヒ[6]の一戰に新敎徒の巨魁ザクセン公フリードリッヒを虜にし、ヘッセンランド伯フィリップを降し、ザクセン家の支流なるモーリッ[7]に、ザクセンを與へて、選擧侯となしぬ。是に於て帝威赫々として、四方に輝き、其抱負實行の期、漸く近づきしが、帝の處爲、法王の希望に副はず、モーリッも、亦帝權の甚大なるを悅ばず、竊に戈を倒にして、新敎徒に通じ、又佛王フランソア一世の子アンリ二世（一五四七―一五五九）と結び、不意に起ちて、帝を攻めければ、帝[8]は、僅に身を以て免れ、一五五二年、新敎徒とパッサウ[9]の和議を結び、又佛王と戰ひて、其侵地を恢復せんとせしが、成らず。一五五五年、所謂アウグスブルヒ[10]信仰個條を奉ずる新敎徒の信仰を許し、新舊兩派の同權を公認したり。

帝は、事皆心と違ひ、大望全く畵餅に歸しければ、アウグスブルヒ和議の後、自ら位を退き、其弟フェルヂナンドを選立せしめ、其子フェリペには、エスパニア・ナポリ・チーデルランド等を與へて、エスパニア王と稱せしめ、己は、エスパニアなる一

6. Mühlberg
7. Moritz
8. Henri＝Henry(英)
9. Passau
10. Augsburger Religionsfried

僧庵に隱棲し、一五五八年に至りて病死せり。

第四章　葡西の殖民政策

ポルトガルは、鋭意地理探檢を企て、新地を發見すれば、從ひて之に居留地を設け、遂に武力に依りて、其地を略し、アフリカ海岸の諸所に、領地を得たりき。一四九八年、ヴァスコ・ダ・ガマが、初めて印度に達せしより、胡椒・肉桂・藥草等の商業は、全く葡人の手に落ち、從來サラセン人が、印度より貨物をエジプトに齎し、アレクサンドリアより、以國人、特にヴェネチア人の手を經て、歐洲に輸入せる舊慣を破り、世界商業の局面を一變せり。是を以て、サラセン人は、ヴェネチアに煽動せられ、其後援を借りて、初めより葡人に妨害を試みしが、葡人は、且商ひ、且戰ひ、サラセンを退け、土人を壓せり。就中最初の印度總督アルメイダ[1]は、一五〇五年、印度西岸にカナノル[2]以下數市を得、又諸所に堡寨を設けて、其商館を保護し、數サラセン人を破れり。一五〇八年、アルブケルケ[3]、之に代りて總督となるや、其政策を紹ぎ、一五一〇年、ゴア[4]を併せて、此に總督府を置き、翌年マラッカ[5]を略し、暹羅・ペグと交通を開き、又マレー群島の諸處を攻取り、居留地を設けて、香料の商利を專らにし、一五一五年には、ペルシアより、オルムズ島[6]（ペルシア灣口）を奪ひて、此に堅砦を築き、以て葡國東方の策源地とせり。此年アルブケルケ、讒によりて召還せられ、後任者皆之に匹敵する技倆なく、徒らに土民を虐待して、其怨を買ひしが、葡國は、依然其東進政策を蹈襲し、一五一七年、始めて廣東に至り、支那と商業を開きぬ。然るに葡人の行爲亡狀なり、こを以て、一五一九年、一旦支那より驅逐せらる。後再び互市を許さるゝや、海賊討

1. Don Francisco d' Almeida
2. Cananor
3. Affonso d' Albuquerque
4. Goa
5. Malacca
6. Ormuz
7. Macao
8. Fernão Mendes Pinto（フエルナノ メンデス）
9. Mexico

歐洲人來朝の始め

伐の功に由り、一五五七年、年金五百兩を明廷に約して、[7]媽港（マカオ）を澳門、本邦人之を天川と稱す。を永代借地とするを得たり。是より先、一五四二年、[8]ピント、初めて種子島に至り、日本との商業も、其端を開けり。

西國も、亦コロンボの新世界發見後、西印度諸島を占領し、漸く新大陸に及せしが、[9]メキシコ・ペルーは、[10]開化稍進みて、富盛なりしかは、一五一九年、[11]コルテズは、メキシコを攻め、三年にして之を略し、[12]ピザルロは、一五三二年より、五年を費して、全くペルーを平定し、次ぎて一五四一年に、[13]チリまた西領となる。以上の諸地方には、金鑛多きを以て、西國は、恰も無盡の金庫を得たるが如し。而して葡人も、亦一五〇〇年、偶然ブラジルを發見し、[14]アメリゴ・ヴェスプッチ（後人此人の名を取りて大陸をアメリカと稱す）をして、之を探檢せしめ、漸く殖民地を設けぬ。

10. Peru
11. Fernando Cortez
12. Francisco Pizarro
13. Chili
14. Amerigo Vespucci

メキシコは西人ノバエスパニアと名く、本邦人の所謂濃毘敷（ヒヤクヤ）般（ハン）なり

15. Cabo Verde(葡)=Green Cape(英)
16. Lega=League(英)
17. Magellan(西)=Fernão de Magalhaes(葡)（フェルナン　マガルヤンス）
18. Philippine Islands(英)
19. Matteo Ricci
20. Jesuits(英)=Jesuiten(獨)
21. Loyola

是より先、一四九三年、法王アレクサンドル六世、令して、カボ・ヴェルデ島より西、百レガ（一レガは、凡三千歩）の地に、經度を劃し、[15]其東の發見地を、悉く葡領とし、其西なるを西領と定めしが、翌年、葡國の抗議に由り、更に境界線をカボ・ヴェルデより二百七十レガの處に改む。次ぎて葡人マジェラン（[17]これ西音、本音はマガルヤンスといふ）西王の命を奉じ、一五一九年、南アメリカに航し、マジェラン海峽を通過して、太平洋に出で、西北に航し、一五二一年、[18]フィリピン群島に至り、土人の殺す所となりしが、其徒遂に印度・アフリカを迂廻し、一五二二年、初めて世界を一週して、西國に歸りき。是に於て西・葡の境界論再燃せしが、葡は、フィリピン群島の西領なるを認め、且代償金を出して、其西なる葡領に對し、西國の容喙を止めしめたり。

基督教宣教師は、常に發見者の蹤に從ひ、マテオ・リッチ（自ら利瑪

22. Franciscus Xaver(ラ)=
Francisco Xaviero(西)
23. Fray Bartolomeo Las Casas

資と稱すの徒は、支那に弘敎し、ゼスイト開祖ロヨラの高弟ハヴェール[22]は、一五四二年、印度のゴア[20]に至り、大に土人[21]を感化し、其より漸く東して、マレー群島に弘敎し、更に一五四九年、日本に至り、其道の爲に盡せしこと十年一日の如くなりき。アメリカに於ても、西僧ラス・カサス[23]弘敎の傍、大に西國人の土民虐待を止むることに奔走しき。

西・葡二國民は、侵略に勇なれども、商業に暗く、加ふるに治民の術甚だ拙にして、政府は、徒らに殖民地の利益を吸收し人民は、實着なる業務に從ふを喜はず、之が爲に、反りて本國の製造衰頽を來し、一時人目を炫耀せる國富も、遂に永續する能はざりき。

第二篇　エスパニア強大時代

第一章　宗教改革の反動

カール五世の後、フェルヂナンド一世は、新舊兩派の調停を力め、其子マクシミリアン二世（一五六四―一五七六）は、頗る心を新敎に傾けしを以て、第十六世紀の末葉には、新敎の蔓延する所、殆ど[1]ドイツ全國に及び、バイエルン・エスターライヒの如き、舊敎の根據地にてすら、續々改宗者を出し、デンマルク・スウェーデンの二國も、亦全く之に歸し、更にポーランド・ウンガルン・エスパニア・イタリア等の諸國に波及せり。

此の如くルーテル派の、四方に弘通せると同時に、カルヴィン派、亦漸くスウィツル・オランダ・スコットランド・フランス及びドイツ自由市の間に流傳したり。此派の創唱者カルヴィン[2]は、一五〇九年、佛國に生れ、後國を去りて、ジェネーブ[3]に至り、宗

教改革論を唱へ、ルーデル派に偏せず、ツウィングリ派に傾かず、別に兩派の中間に位せる一派を開きしが、其說大にジェチーブ人の特性に投合し、遂に推されて、國政爨理の大任に當り、宗教的共和政を建設し、ジェチーブをして、此派の根據たらしめき。

今や、新教は、其勢破竹の如く、將に悉く基督教世界を席卷せんとせしが、其後形勢頓に一變し、攻守忽ち地を易へて、カトリック再興の氣焰當るべからず。蓋し此反動の原因は、一にして足らず。新教各派の相和せずして、互に反目疾視せる事、其一なり。新教の教義は、多く幽遠の理論に涉り、人の想像感情を滿足するに足るべき、無害の儀式典禮をも、多く斥けて顧みざりし事、其二なり。法王以下僧侶輩が、深く世の攻擊に省みて、行を慎み、德を修め、漸く民望を恢復したる事、其三なり。エスパニア人、イニアジオ・デ・ロヨラが、新教に對して、法王の威權を維持せんと欲し、一五四〇年に、耶蘇會即ち所謂ゼスイト團體を組織し、身體强壯、才智衆に擢でたる者を選び、嚴格なる教育を施して、獻身殉教の志操を確立せしめ、盛に各地に弘教せる事、其四なり。カトリックの教義には、未定のもの多きを以て、巧に外部の攻擊を遁れ、且新教の所說を參酌加味せし事、其五なり。當時學者の淵叢と稱せられたるパリ大學の神學部が、其歷史及び感情上より、新教に反對せる事、其六なり。以上六種の原因の外、更に新教の傳播に、大障碍を與へたるは、西國王フェリペ二世（一五五六―一五九八）の經綸なりとす。當時西國の領地は、シチリア・ナポリ・ミラノの外、繁盛比なきデルランドあり、無盡の富源たるアメリカの殖民地あり、以て盛に傭兵を蓄へ、其將帥も、亦多く當代の名士なりしかは、

1. Calvinism
2. Calvin＝(Jean Caulvin 實名)
3. Génève(佛)＝Genf(獨)
4. Ignazio do Loyola
5. Societa Jesu
6. Jesuits(英)＝Jesuiten(獨)
7. Felipe(西)＝Philip(英)
8. Nederland(原)＝Netherland(英)＝Pays Bas(佛)＝Niederland(獨)
9. Mary
10. Lepanto＝(古Naupaktos)
11. Portugal(原)